

星織ユメミライ

HOSHI ORI ★ YUME MIRAI

アートワークス

コアマガジン

18
未満



星織ユメミライ

HOSHI ORI ★ YUME MIRAI
The memories of that day, memories of you, I wish upon a star
to be always with you.

アートワークス



目次★Contents

★003 Chapter 1 School Part (スクール編)

- 004 Introduction
- 006 逢坂そら Sora Ousaka
- 016 篠崎真里花 Marika Shinozaki
- 026 瀬川夏希 Natsuki Segawa
- 036 沖原美砂 Misa Okihara
- 046 鳴沢律佳 Rikka Narusawa
- 056 雪村透子 Touko Yukimura
- 066 主人公のユメとミライを応援する人たち
Other Character

★069 Short Story

- 070 書き下ろし篠崎真里花ショートストーリー
「真里花、二十歳になりました」
- 074 書き下ろし雪村透子ショートストーリー
「特別な応援を、キミだけに」



★079 Chapter 2 After Part (アフター編)

- 080 逢坂そら Sora Ousaka
- 086 篠崎真里花 Marika Shinozaki
- 092 瀬川夏希 Natsuki Segawa
- 098 沖原美砂 Misa Okihara
- 104 鳴沢律佳 Rikka Narusawa
- 110 雪村透子 Touko Yukimura
- 116 汐風市フォトアルバム

★119 Chapter 3 Official Artworks

雑誌描き下ろし/特典/キャラクターグッズ etc...

★151 Chapter 4 Extra Contents

- 152 『星織ユメミライ』スタッフインタビュー
- 159 スタッフクレジット/主題歌/挿入歌
/エンディング
- 160 奥付



Chapter

★
1

School Part

Introduction

Sora Ousaka

Marika Shinozaki

Natsuki Segawa

Misa Okihara

Rikka Narusawa

Touko Yukimura

Other Characters



INTRODUCTION

イントロダクション

長らく県外で生活していた主人公・日野涼介は、7年ぶりに故郷・汐風市へ戻ってきた。季節外れの転校生として汐風第一学園に転入した彼を待っていたのは、幼なじみとの再会や新たな女の子たちとの出会い。



たったひとりの天文部員、逢坂そら

小さい頃は病弱だった幼なじみ、篠崎真里花

カメラを手に常にベストショットを探す瀬川夏希

自然科学部でひとり、くらげの世話をする沖原美砂

他人との関わりを避け、放課後はピアノを弾いている鳴沢律佳

立ち入り禁止のはずの旧館にいた転校生、雪村透子



「学校生活をもっと楽しく!」がモットーの行事運営委員会の一員となった主人公は校内イベントを通して彼女たちと賑やかな日々を送り始める。



そんな中、ふと気付いたのは彼女たちが抱えるささやかな夢。
その夢に寄り添ううちに、ある願望が芽生え始める。

彼女たちと恋人同士になりたい。
世界一幸せなキスを交わして、いつまでも一緒にいたい。

ある夏の日から始まる、未来への恋の物語。



星に願いを。
キミとずっといられますように。

「星織ユメミライ」キービジュアル

星は変わらない。
 今も昔も、そしてこの先も。同じ場所でまたたき続ける



About SORA

by 魁(シナリオ)

無口・無感情・不思議系と、tone work'sとしてはややキャラ性特化気味の彼女は、年下ということもあって、幼さを見せる為にショートカットにしてもらいました。でもこのカットは大人になると、出来る女性に見えるという不思議。あとtone work'sきつてのぺったん娘です。

星に思いを馳せる天文少女

逢坂そら

OUSAKA SORA

CV: 桐谷華

学年	1年生	誕生日	1月5日
身長	152cm	体重	43kg
スリーサイズ	76 (A) /57/80		
血液型	O型	原画	武藤此史

たったひとりの天文部員。

立ち入り禁止の屋上に繋がるカギを持つ唯一の生徒。物静かで口数も少なく、感情をあまり表に出さない。天体望遠鏡で星を見ている時間が何より幸せで、夢中になるといつまでも動かないことも。部活動中は、パーカーを頭から被り、余計な光や情報を遮断して没頭している。

Expression Collection



School



制服+パーカー



制服



水着



私服

キャラクターラフデザイン



第1案



第2案



SORA
Trivia

by 魁(シナリオ)

星を語るのに星座の位置や月齢を偽るわけにはいかないので、複数のシミュレーションソフトを使って、夜空を確認していました。月を語るシーンの月の画像は、ライターが自分で撮影した月なのです！そらのバイト、着ぐるみはライターの実体験を元に描かれた物なのです！

月の直径は3474キロ。
太陽系の衛星の中では5番目の大きさ。
地球から月までの距離は38万4400キロ。
公転周期・自転周期は共に27日と7時間43分なので
月の裏側を地球から見ることは不可能。



05月31日

●屋上で出会った少女

転入する学園の下見に訪れた涼介は空から降ってきた金の短冊を手に屋上へと足を運んだ。そこにいたのはフードを被って望遠鏡を覗き込む少女。涼介は星の話になると饒舌な彼女、それに月の話を教わるのだった。

【涼介】「…驚いたな」

【そら】「…コクリ。…私も…初めて月を見たときは驚いた…」

【涼介】「いや、月もそうだけど、キミ自身に。星のこと、すごく詳しいんだな」

【そら】「…好き、だから…」

好きってのは、星の事を言っただけなのに、ちょっと反応してしまう。



06月27日

●膝枕で天体観測

屋上で星を眺めているうちに、そらに促され膝枕をしてもらった涼介。星座の話をしているうちに、そらは彼女が知るはずの無い涼介の子供の頃の記憶とリンクした架空の星座話を始める。

【そら】「飛行機座…、ミサイル座…」

【涼介】「ああ…それと」

【そら】「…怪獣座…」

【涼介】「そうそう、そんなのも考えた。よくわかるな。えーと…どれとどれをつなげたっけかな」
星を指差そうとすると、俺より早く逢坂が人差し指を夜空に向けた。

【そら】「…あの星とあの星…それとあの星をつなげて飛行機座」

【涼介】「そうそう、俺が考えたのも、そんな感じだったと思う」

【そら】「…ミサイル座は、あそこの一等星を中心に、長方形につなげたもの」



…星空を見ると、飛行機座や
ミサイル座のことをいつも思い出していた。



リョウのことを考えると…胸が温かくなる。
だから…問題ない。
間違いなく、私はリョウが好き…

06月27日

●告白の返事のキス

幼い頃に七夕祭りで出会っていた涼介とそら。ふたりの記憶が鮮明に繋がり、お互いの気持ちが昂ぶる中、そらは涼介のことが好きだと告げる。そしてその想いは行動となって涼介の唇を熱く塞ぐのだった。

【涼介】「俺は逢坂のこと…、いや…、俺、そらのことが好きだ」

【そら】「…コクリ…」

【涼介】「俺と付き合ってほしい。恋人になって、これからも一緒に星を見ていきたいんだ」

【そら】「……………」

そらは何も答えずに、じっと俺の顔を見つめた。そして微かに微笑んで—

【涼介】「…っ…!?!」

【そら】「…んっ…ちゅっ…」

返事の代わりに、そっとキスをしてくれた。

07月11日

●恋人同士の天体観測

期末試験も終わりやっと天文部の活動が再開された。今までの時間を取り戻すように、ISSを見たり星々の話をするふたり。いつもの様に膝枕を促すそらだったが、涼介は彼女の背後に回りそっと彼女を抱き寄せる。

俺はいつものようにそらの太股に頭を寄せ—ずに彼女の背後に回った。

【そら】「…? …??」

キョトンとしている彼女の背後に座り、そらの小さな体を背中から包むように抱きしめる。

【涼介】「膝枕もいいけど、たまにはこういうのもいいかなと思って」

【そら】「……………」

【涼介】「こういう天体観測ってアリか…?」

…コクリ。…アリだと思う。





07月15日

● 幸せな気持ち

避妊具を持っていないことに気がつき行為を途中で中断した涼介とそら。それから数日経ち、そらは涼介の家に夕飯を作りに来る。手作りオムライスを食べた後、まだ若い恋人同士は、お互いの心と体を求め初めてひとつに重なる。

…リョウとキスをするのは好き…。
なんだかあったかい気持ちになる…

【そら】「リョウは…私の胸を触ると、うれしい？」

【涼介】「ああ、嬉しい。幸せな気分になる」

【そら】「…そう。それは、私も幸せな気持ちになる」

【涼介】「お互い幸せで、なによりだ」
そらをより幸せにするために、俺はまた彼女にキスをする。そしてキスをしつつ—ちょっとだけ揉んでみた。



…私はリョウとひとつになりたい。
…だから続けてほしい。
…もう少し力を抜くから。
…リョウが入れやすくなるようにするから…



【そら】「くっ……ふ……~~~~~」

そらは、痛みを堪えるような表情を浮かべていた。

【涼介】「だ、大丈夫か？」

【そら】「…ん…大丈夫…、全然平気…」
とても平気とは思えない…。

【涼介】「な、なあ…とりあえず先っぽだけでも入ったし、これでも一応Hは成功した…と思うから、今やめても俺は—」

【そら】「…ふるふる」



07月20日

●そら2回目のエッチ

デート帰りに涼介の家に来たそら。ふたりでご飯を食べた後、彼女はPCで何かを調べ始める。初体験でそらに負荷を掛けた事を気にしていた涼介のために、彼女は身体に負荷の掛からない体位を検索していたのだった。

【そら】「…どうかした…？」
【涼介】「いや…綺麗な一本筋だなーと…」
小さな体に、綺麗な一本筋の秘唇。少なからず背徳感を感じているのは俺だけか…？
って、当たり前だ。そらのこの姿を見られるのは、彼氏である俺だけなんだから。
【そら】「…私の体…どこか、変？」
そう言うと、そらは自分から一本筋の秘唇を軽く広げて見せてくれた。



リョウに見られて、触られて…
ドキドキしていた…。
もっとたくさんリョウを感じたいと思ったら、
身体が熱くなる。



…くんくん。
…お風呂に入ったのに、エッチな匂いがする。
…かぐと、胸がドキドキする匂い。

07月20日

●そらのフェラチオ

激しい行為の後、汗だくになったふたりはお風呂へ向かう。しかし涼介のペニスはそらの裸を目前にして、またしても硬くいきり立つ。そらはその状況を観察しながらも、鎮めようと初めてフェラチオをしてくれることに。

【そら】「…これがリョウのおちんちん…」

【涼介】「な、なんだ？ もしかして、どこか変か？」

【そら】「…別に変じゃないと思う…たぶん」

【涼介】「たぶんで…そんな曖昧なこと言われると、余計に不安になるんだが」

【そら】「…それは仕方がない。私はリョウ以外のおちんちんを知らない」

【涼介】「…それもそうか」

【そら】「…もっとよく観察してもいい？」



【そら】「…ぶは…」

そらの口から、ため込んだ精液がこぼれ落ち、彼女の体を白く汚していく。

【そら】「…はあ…はあ…ん、ぶ…ぶはあ…」

【涼介】「大丈夫か？」

【そら】「…コクリ」

手のひらで口をぬぐい、付着した精液を確認するそら。

【そら】「…すごくドロドロしてて…口の中に貼り付く感じで、全然飲み込めなかった…」

【涼介】「だから無理に飲むことないんだって」

【そら】「…あまり美味しいものじゃない…」

残念そうにそう言った。



07月23日

●そらの水着コキエッチ

着ぐるみのバイトから涼介の家へ帰ってきたそらたち。身体をクールダウンさせ、まとわり着く汗を流すためにお風呂で水浴びをすることに。しかしお互いの汗の匂いに刺激されたのか、涼介とそらは発情してしまい……。

【涼介】「今日のそらはいやらしいな…俺の汗の匂いで興奮しちゃうなんて」
 【そら】「…リョウも…興奮している…」
 【涼介】「まあ、な」
 【そら】「…水着のまましたい…とか…んう…こんな…変態なことしたら……興奮、する…あ…～…んう…っ…！」
 あんなことを言って、そらに引かれたかと思っていたけど、まさかエロモードが発動する引き金になるとはなあ…



…この場所も2人の汗の匂いが充満してる…
 エッチな匂いでいっぱいになって、る…
 はあっ…クラクラする…
 エッチすぎて…おかしくなりそ…んうっ…



もう…リョウに、
 食べてほしい…っ。
 準備は万端だから、
 きつと美味しいはず…

07月26日

●そらの裸エプロン

涼介たちは、台風接近のためにプラネタリウム製作を中断して家に帰って来る。そらは台風が来ていることを利用し、最初からお泊まり計画を立てていた。甘い時間を堪能すべく、彼はそらに裸エプロンをお願いする。

【涼介】「うわ、ヤッペ！ これかなりヤッペ！マジヤッペ！」
 【そら】「…リョウが興奮して壊れ気味…」
 【涼介】「そりゃあ壊れもするって！ だっておまえ、裸エプロンなんだぞ！」
 【そら】「…その理由は意味不明」
 【涼介】「そらの裸エプロンなんだぞ！ 好きな子の裸エプロンなんだぞ！」
 【そら】「…なんとなく理解した。リョウが私に発情している」



音は気持ちを高揚させる効果があると思った。
だから、それを応用してる。
…リヨウも、興奮する？

07月27日

●そらの朝フェラ

お泊まりの翌朝、涼介はムズムズする感覚で目を覚ます。すると彼の股間には朝勃ちしたペニスを銜え込んだそらの姿があった。朝勃ちを知らない彼女は涼介が性的に興奮していると勘違いしていたらしく……。

【そら】「…ん…ぶはっ…おはよ…」

【涼介】「お、おう…おはよう。なに…してるんだ？」

【そら】「…フェラチオ」

いや、それは見ればわかるけど…。

【涼介】「朝からエッチしたくなって、俺を起こそうとしてたのか？」

まったく、そらは本当にHな子になって——

【そら】「…ふるふる」

【涼介】「…違うのか？」

【そら】「…リヨウの反応が見たかった」



星は、出会いをくれます。
…たくさんの素晴らしい出会いと、思い出をくれます。

08月06日

●プラネタリウムの説明をするそら

一度は崩壊し、挫折を味わいながらも涼介の機転とみんなの協力によって完成したプラネタリウム“Star Link”。どうにか間に合った汐風学園七夕祭りで、そらは念願のプラネタリウムを開演する。

【そら】「ベガ、アルタイル、デネブ…この3つの星をつなげると——」

【小学生の男子A】「三角形になるっ！」

【そら】「はい、そうです、星空の中に大きな三角形が現れました。これが「夏の大三角形」といわれる星と星とのつながりです」

夏の大三角形——俺がそらに初めて教えて貰った、星の話…。

あの時から、何一つ変わらず、彼女は星を語る。それはきっと、これからも…。



…でも、年に1度しか結ばれないのはイヤ。
私は、リヨウと何度も結ばれたい。

08月06日

●プラネタリウムの中で

無事に閉会し後夜祭を迎えた夜に、涼介とそらは自分らが作ったプラネタリウムの中で、ふたりだけの鑑賞会を開いていた。感謝の言葉とお礼のキスを交わした恋人たちは想いを昂ぶらせ、そのままお互いの身体を求め合う。

【涼介】「あー…いや…なんか、ロマンチックだなーと」

【そら】「…ロマンチック？」

【涼介】「だって、星空の下でエッチするんだぞ？こんなロマンチックなシチュエーションはないだろ？」

【そら】「…コクリ」

【涼介】「後ろに見えているのは天の川だから、さしずめそらは織姫だな。んで、俺が彦星」

【そら】「……」

ポツと顔を赤くするそら。

【涼介】「ごめん…自分で言ってる、俺も恥ずかしくなってきた」



【そら】「…きっと、1年に1回しか好きな人と会うことが出来ない織姫が乗り移った…」

【涼介】「なら仕方ないな。1年ぶりのHなら、そりゃ激しくもなっちゃうな」

【そら】「…コクリ」

【涼介】「でも、俺たちは1年に1回しか会えないわけじゃない。いつもずっと一緒だ」

子供の頃はできなかつたことも……
いまは、なんでもへっちゃら



About MARIKA

by 丘野塔也(シナリオ)

一見目立たないけど、この子が実はすごく可愛いことは、幼なじみの俺だけが知っている……そんな身近にいそうな雰囲気を描いてもらいました。デザイン段階でのあだ名は「地味子」で、いまの真里花は初期案から比較するとかなり華やかになりました。それでも、ほのかに香る普通っぽさが一番の魅力ですね。

再会を“やくそく”した幼なじみ

篠崎 真里花

SHINOZAKI MARIKA CV: あじ秋刀魚

学年	2年生	誕生日	3月3日
身長	156cm	体重	44kg
スリーサイズ	84 (C) /56/86		
血液型	A型	原画	恋泉天音

転入してきた主人公が再会した、かつての幼なじみ。幼い頃は喘息のため学校を休みがちだった（現在は完治）。主人公が引っ越しをすることになった際、「元気になって再会する」という約束を交わしており、それを守れたことを嬉しく思っている。おとなしくてあがり症な性格だが、人一倍の頑張り屋。

Expression Collection



School

SHINOZAKI MARIKA



水着



競泳水着



私服



私服2

キャラクターラフデザイン



第1案



第2案



MARIKA
Trivia

by 丘野塔也 (シナリオ)

真里花は汐風育ちの汐風っ子で、故郷をとて愛しています。あまり詳細には描写していませんが、注意深くチェックしてもらえると、言葉の端々から強い地元愛を感じてもらえるかもしれません。真里花は、たくさんの思い出が詰まったこの街が大好きなんです。



06月01日

●真里花とお風呂

真里花の母親の計らいで夕食に招待された涼介。しかし家には仕事が早く終わった真里花の父親が帰宅していた。気まずい夕食の後に涼介がお風呂を借りていたところ、裸の真里花と鉢合わせしてしまう。

【浩二】「ちょっと入るぞー？」

【真里花】「ちょ、ちょっと待って！ あ、あのっ、こっち見ないでね？」

【涼介】「え…？」

バタバタと慌ただしい気配がして、篠崎はざぶりと、湯船へと入ってきた。

【涼介】「お、おい？ 篠崎…！」

だから、こっち見ないでっ。
視線…逸らして欲しいなー…？



06月15日

●真里花とお風呂ふたたび

美砂や真里花と潮溜まりの魚を取りに行った日、自宅の風呂が壊れたため先日とは逆に涼介の家の風呂を借りることになった真里花。水着を着ていれば一緒のお風呂でも恥ずかしくないということになり……。

【真里花】「お、思い出さないで欲しいな〜…！ 恥ずかしいよう…」

【涼介】「悪い…」

【真里花】「そうけど〜…」

篠崎は顔を真っ赤にしている。浴びているのはめるいお湯なのに、湯気でも沸いてきそうなほどだ。

水着着てるから恥ずかしくないよ…普通、だもん。
それにほら、前のときに比べれば…



06月21日

●タイドプールに浮かぶ真里花

七夕祭りで展示する天体水族館の水槽に入れる魚を採取しに海岸にある潮溜まりへやって来た涼介、真里花、美砂の3人。一通りの採取も終わり、陽射しで火照った体を冷やすため、真里花は水中に体を浸ける。

こんな楽しい時間を一緒に過ごせるなんて…
なんだか、夢みたいだなー

【真里花】「今年の夏は、楽しいことがいっぱいあるといいな」

【涼介】「篠崎は、どんな楽しいことをしたいんだ？」

【真里花】「やっぱり、七夕祭りを成功させなくちゃね。せっかくだから海で泳いでみたいし、カラ

オケで歌うとかも、楽しそうだな～。流星群なんかも、見てみたいな…？」

篠崎は夢見るような顔で、願望を語る。それを聞いていて気づいた。それって全部、篠崎が子供のころにやりたくても、出来なかったことじゃないのか？



怖かったね、驚いたね？
でも、もう大丈夫だよ。
ほら、お姉ちゃんと一緒だからね？

06月28日

●真里花、女の子を抱き上げる

この日もタイドプールに魚を採取しにやって来た3人。しかし何故か今日は魚が少ない様子。涼介と美砂は真里花と子供たちから離れ遠くまで魚を探しに行くが、戻る途中で女の子が海に落ちたという声が聞こえてきて……。

【真里花】「この子たち、海が気になってみたいで。はしゃぎすぎちゃって、落ちちゃって…ごめんね、わたしがもっとちゃんと見ていれば…」

【涼介】「落ちた…この子が…」
そっか…女の子って、篠崎のことじゃなくて…」

【真里花】「でも大丈夫だから。近くで釣りしてた人に協力してもらって、引き上げたの」

【涼介】「そうなのか…その子にもケガは？ 篠崎も？」

【真里花】「うん、ふたりとも大丈夫」
よかった…ホッとして、思わず力が抜けた。



わ、わたしも…子供の頃からずっと…
日野くんのことを…日野くんのことだけが好きでした。

07月12日

●告白の返事

期末試験も終わり、ギブスも外れた涼介は真里花を海に誘う。海水浴を堪能した帰り道、涼介は真里花に告白をするがフラれたと勘違いしてしまう。家の前まで着いた時、誤解は解けふたりは気持ちを確かめ合いキスを交わす。

【涼介】「篠崎は、本当に泣き虫だな」
頬を濡らす涙を指で拭いてやる。と、篠崎がピクッとして俺を見上げた。

【涼介】「あ…」
その思いがけない近さに驚く。篠崎の顔がすぐそこにある。息が触れそうな距離で、篠崎に見つめられている。

【真里花】「…だいすき、です…」



07月16日

●2回目のキス

自作プラネタリウム光源部分を作るため、家に帰ってきた涼介と真里花。組み上げ終わり光を灯すと部屋の中はポーッと照らされ、ムードが高まっていく。そして涼介は彼女を抱き寄せ、付き合い始めて2回目のキスをする。

篠崎が、腕の中で顔を上げる。息が触れるほどの距離で見つめ合う。そして俺達は、自然に唇を重ねていた。

【涼介】「いきなり、ごめん」

【真里花】「え？ う、うん…うれしかった…」

【涼介】「そ、そうか？」

【真里花】「そうだよ…だって、わたしだって…日野ちゃんとキス…したかったんだから…」





07月21日

●真里花と初体験

プラネタリウム作成作業を手伝うために今日も家に来てくれた真里花。彼女はマカロンを食べさせて貰ううちに涼介の指を舐めてしまい、ふたりの気持ちは高揚していく。そして遂に涼介と真里花は初体験を迎えることに……。

ぶっくりとした恥丘にやさしく触れる。すべすべして撫でているだけで気持ちいい。真里花も気持ちよさそうに目を閉じている。
[涼介]「真里花、もっと見せて欲しい」
【真里花】「え…あ…」
さらにまじまじと、その恥部を覗き込む。



あ…あんまり見ないで欲しいな～…
そこ、恥ずかしいよ…



うらん、そうじゃなくて…コンドーム、まだあるよ…?





07月26日

● 真里花、学校でエッチ

台風の上陸で水槽が心配になった美砂。LIMEでやりとりをして、彼女の代わりに涼介と真里花は学校へ様子を見に行くことに。一段落がついた彼らは若さの奔流に流され教室でエッチをし始める。

【真里花】「そんなこと…ひゃうっ、んんっ！ そんなに首筋、キスすると…痕ついちゃうよう…」

【涼介】「あ、ほんとか」

見ると、首筋にちょっと赤い痕が残ってしまっている。

【涼介】「そっか、キスマークってこういうことか。夢中になっちゃって、ゴメン。一応、そんなに目立たない場所だから…」

【真里花】「謝らなくてもいいよ～むしろ、ちょっとうれしい…かな。愛してもらったって、証拠だから…」



吸いすぎ…んっく、あっあっああ…
そんなに吸ったら、いっぱい
痕ついちゃうよお…んんんっ…





07月28日

●お風呂で水着エッチ

居残り作業をしていたが追いつけなかった涼介たち。今日もまた涼介の家で作業するふたりだったが、良い雰囲気になっても真里花はエッチを拒否する。どうやら汗の臭いが気になるらしくふたりはお風呂へと向かうことに。

【真里花】「くわえられるかな〜…おっきい、からなあ〜…」
【涼介】「怖いかな？ それなら…」
【真里花】「や、やるっ！ 最後まで、気持ちよくなって…欲しいし。綺麗にしてあげたいよ…」
そう言って、真里花は素直に、股間に顔を寄せてくれた。



だって…さっきまでこのおちんちん…口にしてたんだもん…
それに…初めて生で…つながれたから…



【真里花】「うん、イッて…いっしょに…いっぱい気持ちよくなって…大丈夫だからっ…こ、このまま…中で…」
真里花がちょっと振り返り、のぼせたような目で俺を見つめた。
【真里花】「精液…このまま、おまんこの中に…いっぱい出して…？」
【涼介】「真里花…ううっ…」

…うん、ありがとう。
下手かもしれないけど、でも、
大きな声で歌ってくるね。



08月06日

●行事委員会の歌姫

紆余曲折しながらも無事に七夕祭りに間に合った天体水族館。その幻想的な光景に、得票数1位に輝き表彰される。こうして無事に七夕祭りは後夜祭を迎え、カラオケ大会では真里花が美しい歌声を披露し皆を魅了する。

【真里花】「…わたしも歌いたいな」

【涼介】「真里花…ステージにあがるのか？」

【真里花】「…あ、わ、わたしの歌なんて誰も聴きたくないよね」

【涼介】「そんなことないって。少なくとも、俺は聴いてみたいぞ」

真里花の歌ってそういえば聴いたことない。どんなふうにかうのか聴いてみたい。



あ、う～……………
だ、誰もいないとは…
思うけど…
で、でもこの格好…
誰かに見られたら、
言い訳できないと
思うな～…

08月06日

●真里花、校内でエッチ

後夜祭のカラオケ大会も終わり、片付けは明日以降ということで解散となった。しかし涼介と真里花は旧館へと戻り、連日の疲れもあって寝てしまう。遅れて起きた涼介は、真里花を抱き寄せキスを交わし愛を確かめていく。

たちまち、ドロリとした精液が、いやらしい音を立てながらたっぷりと溢れ出て来た。

【真里花】「あわわわ、すごい出てくるよ～…なんだか、寂しい…よう…」

【涼介】「寂しい？」

【真里花】「だって、せっかく…こんなにいっぱい出してもらったのに…たくさん愛してもらったって、証拠だもん」





いまはへっちゃら。
だから今日はすごくうれしい。
こんなふうに楽しい時間が
過ごせるなんて。

08月08日

●真里花と七夕祭り

真里花と一緒に七夕祭りに行く約束をした涼介。彼女の浴衣を期待していると家にやって来た真里花は普通の服のまま。着付けを手伝い何とか祭りへと向かったふたりが夜店を巡っていると雨が降ってきて雨宿りすることに……。

【真里花】「こうやってふたりで七夕祭りに来るのがずっと夢だったから」

【涼介】「ずっと？」

【真里花】「子供のころも来たかったんだよ、一緒に。でも、あの頃はこんな人混みは体によくなくて言われてたし、とても来られなかったから」

【涼介】「…そうだよな。昔は、とてもじゃないけど来られなかったよな」



や、あ、あ、ああ…
すごい、いっぱい…ああ！
わたしの中…いっぱい…
になっちゃってるよお…

写真って、過去と今、
今と未来を繋げる架け橋みたいなものよ



About NATSUKI

by 魁(シナリオ)

初恋1/1の月島叶を継承する形で生まれた女の子ということでデザイン面にも共通点が見られますが、カメラという題材からよりフットワークが軽く、軽快なイメージが出るよう、ポニーを短くしたり、無邪気さをアピールするため、八重歯など備えました。

瞬間を逃さないクラスメイト

瀬川 夏希

SEGAWA NATSUKI CV: 桃井いちご

学年	2年生	誕生日	11月30日
身長	160cm	体重	47kg
スリーサイズ	88 (D) / 58 / 85		
血液型	O型	原画	秋野すばる

卒業アルバム制作委員会所属のクラスメイト。よりよい学園生活を形に残すため、行事関連やイベントでカメラのシャッターをきる。中途半端なことは嫌いで、白か黒か、YesかNoかにこだわる。そのため、ピンボケの写真を取ったときは「死にたい…」とつぶやき肩を落とす。

Expression Collection



School



制服+腕章



制服+カバン



水着



私服

キャラクターラフデザイン

瀬名川 夏希 バース案



NATSUKI
Trivia

by 魁(シナリオ)

初期設定では現像も自分でこなせるカメラ少女でしたが、背景枚数などの関係で写真部部室が無くなりました。けどその結果、写真屋さんという夏希の師匠が生まれ、あのエンディングが生まれました!



05月31日

●どさくさ紛れにラッキー？

転校してくることが決まっている学校内を見学していた涼介。天文部のそらと出会ってしばらくした後、写真撮影に夢中になり階段から落ちてくる夏希を受け止める。これが涼介と夏希の最初の出会いであった。

【夏希】「窓のところに鳥が止まっててね。その飛ぼうと羽を広げた瞬間を狙って、カシャッと——」

【涼介】「んで、キミはグラッと行ったわけだ…。とりあえず、怪我はなさそうで良かった」

【夏希】「動けそう？」

【涼介】「ああ…とりあえずキミがどいてくれたら…」

でも、その前に手を離してもらいたいかなー？



ほら、また脇開いてる。
締めなきやダメって言うてるでしょ！



06月13日

●カメラの構え方レクチャー

行事委員の仕事がオフだったので、夏希の助手として校内で写真を撮り歩くふたり。涼介はカメラの使い方を教わっている最中にツバメが飛び立とうとしている瞬間の撮影に成功し、写真の喜びを初めて知る。

【夏希】「ブレてるわねー。手が震えてるからよ。もっとリラックスして」

俺の肩に、背中に、何やら柔らかいものが押しつけられている。耳に彼女の吐息がかかる。何やらいい匂いが鼻をくすぐる…。

【夏希】「ほら、もう1枚」





06月19日

●夏希を肩車

夏希に連れられてやってきた旧館の裏。そこには屋根の下にツバメが巣を作っており雛が鳴いていた。彼女は高い位置にいる雛の写真を撮るため涼介に肩車を頼む。夏希の太ももの感触にドギマギしながらも撮影は無事終了する。

【夏希】「よい、しょっとお！」
 考えている途中で、白くて柔らかくてスベスベでほんのり温かい何かに顔を挟まれた。
 瀬川の太股だ——。
 【夏希】「はい、立っていいわよ」
 【涼介】「お、おう…しっかり掴まってるよ…」



おーい？ 日野～？
 そんなにあたしの太股が気持ちいい？



ふっふっふっ！
 おとなしくあたしに温もりを貢ぎなさい。
 ほら、冷たい？ あたしはあったかーい♪

06月21日

●天然の全身カイロ

自然科学部の展示用に撮影した魚の写真が気に入らない様子の夏希。悩んだ末に魚の目線で写真を撮りたいと、冷たい海に入り撮影を始める。しかし水は予想以上に冷たく、夏希は冷え切った体を温めるため涼介の体に密着する。

【夏希】「あははははっ、あったかーい♪ 全身カイロだ、これー！」
 【涼介】「ぜ、全身カイロって…おまえな…」
 【夏希】「こうしているとすっごく温かいよ？あー、なんか落ち着くー」
 【涼介】「ったく…勝手にしろよ、もう…」





06月29日

●腕を組んで写真鑑賞

クラスでの交際宣言の後、みんなに祝福されたふたり。初めてのデートは夏希の要望で写真展に決定した。恋人がテーマの写真展で展示作品を見るうちにお互いの知らない部分を認め合い、ふたりの距離は急速に縮まっていく。

【夏希】「あたしが好きなのは瞬間の写真。つまり、動。ある意味、あんたとは真逆ね」

【涼介】「好みが逆か、それはいいな」

【夏希】「え、なんで…？」

【涼介】「んー…自分に無いところを補い合える？趣味が同じってのは案かも知れないけど、それって逆に理解したつもりになりやすくなるかなって。でも違う価値観を受け止めるのって、本当の意味での理解だと思うんだ」

【夏希】「…あんたって、実は考えしっかりしてるのね」

【涼介】「実はってなんだよ」



仕方ないでしょ。
あんたとの…デ、デート…なんだから…。
興奮するなっている方が無理よ。



06月29日

●ファーストキス

初デートを満喫し、陽も暮れた海浜公園。楽しかった1日を振り返りながら色々な話をしていた刹那、涼介が夏希の腰に手を回す。涼介はおもむろに彼女を抱き寄せると、引力に引き寄せられるかのように顔を近づけ彼女の唇を奪う。

【夏希】「あたしとデートしてくれてありがとうって」これまで見ていた笑顔の中でも、とびきりの笑顔で…。

【夏希】「それと…あたしの彼氏になってくれて…ありがとう」

特別な気持ちの詰まった、言葉で…。

【夏希】「大好きだよ…なーんて…えへへ」

自分の鼓動に押されるように、瀬川に一步近づき…。

【夏希】「ねえ、また今度2人で—」

腰に腕を回して、抱き寄せる。

【夏希】「え…」



でも…6月29日は特別な日になるね…えへへ。

07月05日

●ご褒美のキス

試験勉強で夏希が家にやってきた土曜日。勉強に集中させるために全問正解したらご褒美をあげると約束すると、見事、夏希は全問正解する。ご褒美のディープキスを交わしたふたりはキスよりも先の関係へと進んでいく。



言ったでしょ…
今日の下着はお気に入りなんだから…

【夏希】「んっ…ね、ねえ…どうかな…？」
【涼介】「う、うん…綺麗なおっぱいだな…」
白い肌に薄いピンク色の乳首がたまらなく艶めかしい。
【涼介】「瀬川はおっぱい大きいから、見てるだけでドキドキする…」
【夏希】「…そうじゃなくて」
【涼介】「え…」
【夏希】「…あたし、下着を見てほしかったんだけどな…」
【涼介】「え…あ！ か、可愛い下着だな！」
【夏希】「…白々しいんだから…もう」



あたしだけじゃなくて…
今度は…あんたも…ちゃんと最後までエッチ…しよ。





【夏希】「これが今からあたしの中に入るんだよね…？ ちゃんと…その、入るかな？」
やけに口数が多い気がする。さすがに不安になっ
てるのかな。

【夏希】「あ…写真撮っていい？」

【涼介】「いいわけあるか！」

【夏希】「だ、だよな…ごめん」

【涼介】「なあ、不安ならまた今度にしてもいいん
だぞ？」

【夏希】「こ、ここまできてそんなわけないでしょ！
それに、誰も不安だなんて言ってないし！」

07月05日

● 本当の恋人同士

コンドームを着け終わり、夏希とひとつになる瞬間が近づいて来た。痛がっても最後まで続けて欲しいという彼女の想いを受け、優しくゆっくりと挿入していく涼介。そして遂に夏希の処女は最愛の人に捧げられる。

【夏希】「瀬川じゃなくて、下の名前で呼んでよ」

【涼介】「下の名前…な…夏、希…？」

【夏希】「うん…涼介」

【涼介】「…夏希」

【夏希】「ふふっ…これでようやく半分だけ恋人同
士になれた気がする」

【涼介】「半分？」



もう半分は、ちゃんとエッチできてから…かな。ふふっ。



よかった…ふふっ…ちゃんと最後までできたし、
これで涼介と本当に恋人同士になれた気がする…うれしい。



07月06日

●夏希、予習の成果

日曜日の朝、夏希から今日も家に行ってもいいか？というコールを受ける。電話口で予習もしてあると言われており、勉強への熱意を感じた涼介はOKする。しかし夏希が予習していたのは勉強ではなく、なんとフェラチオのやり方だった！



あたしの予習したところ…
合ってるかどうか確かめさせて…涼介先生。

【涼介】「いや、問題解くの夏希の方だし。しかもそのご褒美がお前からの御奉仕って変じゃないか？」

【夏希】「…なんかそれって、あたし超肉食系ね…。ま、いいやー、ほら、ベッドに座って座って。や

ることやって、スッキリしてから勉強した方が、効率いいじゃない。ね？」

【涼介】「予習の成果を見せたくて仕方ないって感じだな」

07月22日

●夏希とハメ撮りプレイ

天文部の逢坂そらに頼まれて星座の写真を撮ることになった夏希と涼介。しかしその日は雲が厚く撮影には向かないことが判明する。時間が出来たふたりは夏希のカメラを使って自分たちの淫らな写真を撮りながら交接を重ねていく。

【夏希】「あー、撮った！ ちょっとこんなとこ撮ってどうすんのよっ」

【涼介】「大丈夫、デジカメなんだからあとで消せばいいだけだろ」

【夏希】「そうだけど、でも…」

【涼介】「夏希の裸がきれいだから、俺も創作意欲が湧いたんだ」

【夏希】「きれいって…そうかな？」



やだ…バカあ…
こんな顔撮るなあ…んっ、ああん…

07月31日

●水着で混浴露天風呂

七夕祭りの写真コンテストに応募する写真を撮るため、それから赤道儀をもう1日借りた夏希。キャンプ場で天の川の撮影を終えた涼介と夏希は、混浴になっていた露天風呂に入りそのまま野外セックスを始める。

【涼介】「夏希はエッチだな。と、でもゴムとってこないと…」

【夏希】「…やだ…そんな時間もったいない…」

【涼介】「え？ でもさすがに生で入れるのは…」

【夏希】「…たぶんね、そろそろ大丈夫な時期のはずだから…。それにね、一度あんたを直接感じてみたかったの…」



それ、涼介のせいだもん…。あたしがこんなにエッチになったのって。
あんたがあたしの体をこんなふうにエッチにしちゃったのよ。
あんたのおちんちんのせいよ。



【夏希】「ああっ…ひあっ…はあっ、はあっ…す、こい…まだ、出てる…こんなたくさん…んはあっ…溺れちゃうよ…」

【涼介】「くっ…夏希…夏希の中…最高だ…」

最後の一滴まで搾り出し、ようやく心地ついた。

【涼介】「はあっ、はあっ、はああっ…生で中出しするのってヤバイな…興奮でおかしくなりそうだ」

ん…あたしもお…
これクセになったら
どうしよう…





08月06日
●旧校舎でエッチ

盛況だった汐風学園の七夕祭りも閉会し、片付けをしていた涼介。旧館に置いてあったパネルを取りに行くところには夏希の姿が。早くふたりになりたかった彼女は涼介に抱きつき、どちらからとなくお互いを求め貪りあう。

【夏希】「後ろからされるの…好き、なの」
夏希は恥ずかしそうに頬を赤らめながら、お尻を揺らした。
【夏希】「涼介のが1番奥まで…深い部分まで届いてきて、あたしの中が全部涼介でいっぱいになるから…後ろからされるの好き…」

今日は…ちょっと乱暴にされたいの…
激しくしてくれていいから…だから…

あたしって、本当に変態かも…
こんな変態でエッチが好きなの
彼女で…本当にごめん…♪



08月08日
●夏希の願い事

コンテストの発表会場で夏希は驚きの声を上げる。彼女の作品は審査委員特別賞に選ばれていたのだ。涼介へ感謝の気持ちを伝えながら、写真と人の想いの力の素晴らしさを感じた夏希は“今”を心の中に残すようにウインクする。

【夏希】「えへへ…全部、ぜんぶ涼介のおかげよね」
【涼介】「そんなことないだろ。夏希の実力だ」
【夏希】「ううん、あんたのおかげ」



一瞬を永遠に変えることができるのが写真だけど、
永遠を胸に刻み込むのは、人の想いの力ね。



あなたを素敵な気持ちにさせることを!

私、全力で約束します。

About MISA

by 丘野塔也(シナリオ)

海を愛する、ふわっとした無邪気なお嬢様。最初は表現するのにかなり苦労していたようで、没デザイン案が一番多いキャラかもしれません。乙姫様系だったり、お嬢様寄りだったりと紆余曲折の末、すべての要素がまとまった現デザインになりました。屈託無く育ったことを示す、わがままボディも◎です。

水族館を愛する天真爛漫お嬢様

沖原 美砂

OKIHARA MISA

CV: 奏雨

学年	3年生	誕生日	7月24日
身長	164cm	体重	52kg
スリーサイズ	88 (E) / 55 / 89		
血液型	B型	原画	恋泉天音

海と魚、そして自然の雄大さをこよなく愛する少女。天真爛漫だが真面目でちょっぴり変なところもあるお嬢様。父親はかつて水族館の館長を勤めており、自身も大の水族館好き。ただひとりの自然科学部員であり、くらげの飼育観察に励んでいる。

Expression Collection



School



制服



水着



水着2



私服

キャラクターラフデザイン



MISA
Trivia

by 丘野塔也 (シナリオ)

美砂といえはくらげ、くらげといえは美砂、というぐらい目立っていますが、これは原画の恋泉さんのアイデア。くらげのゆるふわな雰囲気がキャラの性格ともマッチしていたので、シナリオでも積極的に取り入れていきました。最終的には、アフター編の最後まで絡んでくる、重大要素になりました。

06月03日

●深い青の世界へ

マリンピアしおなぎは経営難から閉館していた。せめて外観だけでも見られればと建物に近づいた涼介は美砂と出会う。どこかと連絡を付けた美砂に案内してもらい、ふたりは閉館した水族館に足を踏み入れる。



わたくしが、当館をご案内します。
よろしければ……深い青の世界へ、
ご一緒しませんか？

【美砂】「館内は、約1時間で一周できます。イルカショーはやっていないので、もうすこし短くなるかもしれませんが…ですがどうか、ごゆっくりご鑑賞ください。あなたが、この水族館の最後のお客さんでしょうから」

【涼介】「最後の客…」
そう言われると、途端に厳粛な気持ちが湧いてきた。しっかりこの光景を目に焼き付けたいといけないという使命感のようなものが生まれる。



遊びたくなる気持ちはわかりますが、
ちゃんと集中しないと、ダメですよ？

07月05日

●美砂と勉強会

試験勉強そっちのけで自然科学部のプレゼン資料を作っていた涼介。週明けから期末試験が始まるというのに勉強は手つかず。困った涼介に美砂から救いの手が差し伸べられるが、ふたりきりの勉強会は色々と刺激的で……。

【美砂】「えーと…ちょっと見せてもらってもよろしいですか？」

そう言いながら、身を乗り出すようにして体を寄せてくる。その時、先輩の豊かな胸が…当たる。

【涼介】「……………」

【美砂】「どうかನさいましたか？」

【涼介】「あ、いえ…」

気づいてないのか、それともわざとやっているのか…。いや、先輩に限ってわざとということはないだろうな。単純に無防備なんだろう。



涼介さんも、一緒に潜りましょう！



07月12日

●離島でバカンス

美砂とふたりきりのバカンスとして訪れたのは漁師町の沖にある浦島。美砂に教わりながら海に潜るとそこは色とりどりの魚が泳ぐ美しい世界が広がっていた。涼介は美砂の水着姿に見とれて思わず告白してしまう。

ああ…綺麗だな…先輩…。周囲の光景と相まって、本当に綺麗だ。魚たちと戯れる先輩か…。水中カメラでも持っていれば、俺も瀬川みたいに写真を撮りまくるのになあ…。この様子をファインダーに捉えたら…。きっと、誰もが息を飲む一枚になるに違いない。

…ん？

先輩がなにかサインを出してる。

「向こうに…移動…？」

えーと、了解するのは普通にOKサインでいいんだったよな。



【涼介】「……先輩…」

【美砂】「………」

じっと、俺たちは見つめ合う。その瞳に、吸い込まれそうだった。まるで惹かれあうように、視線を合わせて…。

【美砂】「……んっ…」

その唇に、そっとキスをした。なんの言葉も、確認もなかったけど…そうするのが、自然な気がした。その瞬間、先輩と気持ちが繋がったような気がして、心まで充たされるようだった。

わたくしも…好き…です。わたくしも…あなたのことが好きです…



【美砂】「一緒に…潜りませんか？」

【涼介】「ええ、どんな深いところにも、ついていきますよ」

【美砂】「じゃあ、あなたをお連れします！ 深く青い、海の世界へ。一番素敵な場所に…」

07月12日

● 離島でふたりきり

迎いの船が故障してしまい、離島で一夜を過ごすことになったふたり。ベッドで抱き合っているうちに歯止めが効かなくなった涼介は美砂の胸へ手を伸ばす。夢中で愛撫を続ける涼介だったが美砂のひと撫でて達してしまう。

【涼介】「俺…先輩のおっぱいを触りたいです」

【美砂】「あう………」

【涼介】「あ、もちろん、先輩がイヤだっていうなら…」

【美砂】「い、イヤではない、ですっ」

【美砂】「そう、望んで…くれるのなら…」

先輩は、恥ずかしそうに顔を伏せる。そして、ふっと体の力を抜いてくれた。

【美砂】「でも…恥ずかしいので…ゆっくり慣れさせてくださいね…？」



感じてくれたの…うれしいです。
わたくしのおっぱいで、気持ちよくなってくれて…
胸がきゅんとしました。



07月19日

● 興味津々の美砂

再び離島を訪れて午前は魚を採集し、迎いの船が来るまでは恋人同士の甘い時間を過ごすふたり。涼介のペニスに探究心が刺激された美砂は涼介の反応を見ながら手や口を使って奉仕してくれる。

【涼介】「亀…ですか。まあ、亀頭っていうくらいですからね」

【美砂】「まあ、本当に亀頭っていうんですね。うふふ、そう思ったら、ますますかわいく見えてきました。あの…触っても大丈夫でしょうか？」

【涼介】「はい、たぶん…」

この間のような、暴発だけは避けたいな。

【美砂】「では、ちょっと失礼して…うふふ…ちゅっ…」

先輩は、楽しそうにペニスに舌を伸ばしてきた。

アオウミガメ…みたいです。





わたくしも同じ気持ちです…
今日という今日は…涼介さんとひとつになりたいです…



07月24日

●美砂初体験

今日は美砂の誕生日。そして涼介と美砂の初めてのデートの日。ファミレスでバカップル気分を満喫したり、美砂が欲しがっていたくらのビッグぬいぐるみを見つけたりした後、ついにふたりは結ばれる。

【美砂】「そ、そんなところを、舐めてはあ…」
 【涼介】「先輩だって、俺のをいっぱい舐めてくれたじゃないですか。だから…お返し、です」
 【美砂】「んんうつ…!? あっ…ひゃ、う…ん…
 くうつん…ああつ…！」

続けざまに、何度も先輩の秘唇にキスをする。
 【美砂】「あ…あ、ああ…キス…されてます…わたくしのアソコに…キスを…ふあああつ…！ こ、こんなに恥ずかしいんですね…」
 【涼介】「でも…奥から、溢れてきています」





水着にシミが出来ちゃいますね…
あ、ああ…そんな恥ずかしいところも、全部…
カメラに撮られてしまうんですね…



07月29日

●美砂撮影セックス

今日の自然科学部の活動は部活紹介のビデオ撮影……のはずが途中から美砂の個人撮影会に。美砂の水着姿をビデオに収めたかったと漏らす涼介の言葉をきっかけに涼介の家でふたりだけの撮影会が始まった。

【涼介】「先輩は今…なにをされているんですか？」

【美砂】「あ…そ、それは、それはあ…ああ、答えてしまうと、それも記録が残ってしまいます…」

【涼介】「でも、教えてください。今、先輩は何をされているんですか？」

【美砂】「はい…これから…セ、セックスを…しようとしていまして…今は…その準備をしてもらってます…んんっ…」

【涼介】「準備っていうのは、どういうことですか？」

【美砂】「はい…おっぱいを…揉んでもらって…んんっ…そして…ア、アソコを…愛撫して…もらっています…はあっ…」

【涼介】「アソコじゃなくて、もうちょっと具体的に言ってください」

【美砂】「あ…はい…お…おまんこ…です…」

真っ赤に恥じらいながらも、先輩はカメラの前でハッキリとそう言った。



うふふっ、本当ですね…こんなに真っ赤になって…んっ
…苦しそうになってますよ…? おちんちんが、あっぷあっぷ…しています。



08月06日

●お風呂でパイズリ

自然科学部の「星空の海」は大成功。達成感に満たされて涼介の家に戻ってきたふたりは一緒にお風呂に。互いに身体を洗いっこしているうち、新しい経験をしてみたいという美砂に涼介はパイズリをお願いするのだった。

【美砂】「…もっと涼介さんを感じさせてみたいです。いっぱい、いっぱい…気持ちよくさせたいです」

美砂先輩、目が輝いてる…。

これ絶対に好奇心で言ってるんだろうなあ…。

【涼介】「じゃ、じゃあ…」

でもまあ、美砂先輩がせっかくそう言ってくれてるんだから、ここはぜひ一度やってもらいたかったことをお願いしてみるか。

【涼介】「あー…じゃあ、その…おっぱいで扱ってもらってもいいですか？」

【美砂】「え…おっぱい…ですか？」

【涼介】「パイズリっていうんですけど…知らない、ですよ」

【美砂】「パイズリ、パイズリ…なるほど、なんとなくわかります。つまり、おっぱいで、おちんちんを挟んで、しごくのですね！」





08月06日

●先輩のエッチなおねだり

パイズリに続く涼介のお願いを聞いた美砂は恥ずかしがりながらも秘部をさらけ出してペニスを擦り上げ続ける。しばらくして身体の昂ぶりに我慢できなくなった美砂はコンドームなしの生セックスをおねだりし……。

くいくいと腰を卑猥に振りながら、美砂先輩は真っ赤になった。

【美砂】「…入れて、ください」

【涼介】「え…？」

【美砂】「あ、うっ…ちゃ、ちゃんと…言い直しますね。おまんこに、おちんぼ…入れて欲しいです…」

そのまま入れてください…今から部屋に戻るなんて無理です…
もう我慢できません…今すぐにほしいんです…



08月08日

●美砂と七夕祭り

涼介と美砂は七夕飾りで鮮やかに彩られた街に繰り出した。子供の時に降久しぶりに着たという美砂の浴衣の絵柄は、星と魚にちなんだ金魚。はしゃぐ美砂の浴衣の着崩れを心配しながら祭りの屋台を回り、大いに楽しんだ。

【美砂】「今日のために新調したんです！ この浴衣に一目惚れしてしまいました」

【美砂】「わたくしが見たところですね、この金魚はコメット種だと思います」

【涼介】「コメット？ なんだか金魚らしくない名前ですね」

【美砂】「コメットはアメリカ生まれの金魚なんです。たなびく尾が流星のようなのでその名がつけられたんです。なんだか縁を感じてしまいました」



『星空の海』にぴったりだと思いました。
とってもかわいいです～



んっ…必要ありません…
今日もそのままで大丈夫な日なので…

08月08日

●美砂、浴衣でエッチ

帯を一度解かなければ直せないくらいに着崩れてしまった美砂の浴衣をどこかで直そうとしているうちに美砂が見つけたのはラブホテル。情欲に満ちた瞳で微笑む美砂はそこで起こることを確かに期待していた。

【美砂】「あ、ふうっ…ホテルに入るなり…おっぱいにしゃぶりつかれてしまいましたぁ…」

【涼介】「ごめんなさい…でも、もう我慢できなかつたんです。浴衣をはだけさせたとき、さらして窮屈そうなおっぱいが目の前にあったので…」



08月08日

●美砂と花火

ラブホテルで浴衣を直し、再び祭りの中へ戻ると七夕祭りの締めとなる花火大会が河川敷で始まるころだった。涼介と共に過ごす時間の中で得た大切なものと夢を語る美砂の顔は喜びに満ちていた。

わたくしはもっとたくさん勉強して、海と自然の素晴らしさを多くの人たちに伝えていきたい…この素敵な気持ちを、皆さんと分かち合いたいのです。



夜の闇を切り裂くように、打ち上げ花火がまた上がる。

【美砂】「お魚です！」

それは、大きな魚の形をした花火だった。

【涼介】「先輩にびったりの花火ですね。ほら、また上がりますよ！」

【涼介】「たーまーやー！」

【美砂】「さーかなやー！」



ひとりで弾きたいから弾いてるだけよ

理由なんてないわ。

About RIKKA

by 白矢たつき (シナリオ)

『誰もいない音楽室で、孤高と孤独の狭間でピアノを奏でる少女』というのが律佳のはじまりで、この女の子が一番映えるデザインは？ と考えたときに真っ先に浮かんだのが、黒髪ストレートロングの少女でした。この髪型は特徴づけるのが難しいのですが、秋野さんが凛とした美しさの中に、可愛さを上手く内包してくださいました。

自分の世界を奏でるピアノ少女

鳴沢 律佳

NARUSAWA RIKKA CV: 北見六花

学年	2年生	誕生日	6月29日
身長	167cm	体重	55kg
スリーサイズ	82 (B) / 55 / 81		
血液型	A型	原画	秋野すばる

隣の席のクラスメイト。ほとんど友達づきあいをせず、その交友関係はとても希薄。両親共に高名な音楽家であり、本人もピアノの腕前はかなりのもの。しかし部活動に所属する気はないらしく、放課後はいつも第二音楽室でひとりピアノを弾いている。

Expression Collection



School



06月03日

●ピアノを弾く律佳

行事委員会の手伝いに巻き込まれ、部活が行なわれている放課後の校舎を回っていた涼介たち。第二音楽室から聞こえるピアノの音に誘われて足を運ぶと、クラスで自分の隣に座る鳴沢律佳がピアノを弾いていた。

【涼介】「え…」

【夏希】「あははははっ！ くくく…あんたかっぺき忘れられてるみたいよっ！ ぶっ、くくっ！」

ショックだ…俺ってそんなに影が薄かったのか。

【夏希】「律佳、覚えてないの？ どっかで会ったことあるはずよ」

【律佳】「どこか…。…」

【涼介】「うっ…」

…美人にマジマジと見つめられると、妙な迫力があるな。手のひらに変な汗かいてきたぞ…

【律佳】「あ、思い出したわ。ナンパ男」

…あなた、誰？



日野くん？
…どうしたの？



06月08日

●びしょ濡れ律佳

川辺で夕涼みをしていた涼介と律佳。バランスを崩した律佳を抱き留め、一緒に川に落ちた涼介はワンピースから透けて見える律佳の下着や肌にドキドキ。そんな時、女性のグループが涼介たちのそばを通りがかり…。

【涼介】「ごめん！ ちょっと我慢してくれ！」

俺は鳴沢を隠すように、上に覆い被さる。相手が女性とはいえ、見知らぬ人に透けた格好を見られるのは嫌だろう。

【律佳】「ええっ！？ 日野くん…ちょっと…っ！が、我慢って、そんなのできるはずないじゃない…！ いきなり覆い被さるとか、一体なに考えてるのよっ…！？」

【涼介】「それはわかってるんだけど、やむにやま

れぬ事情が…」

【律佳】「事情ってなに！？ 男性的なもの！？ 大声上げるわよ！？」

【涼介】「それはちょっと勘弁して欲しいっていうか、ちょっと黙っててくれると嬉しい。目立ちたくないから」

【律佳】「黙ってるとか目立ちたくないって…犯行を隠すため！？ そんなの聞けるわけじゃないよ！」



ふふっ…嬉しい
 …私をはじめてあなたの魅力を
 伝えることができたんだもの。

06月23日

●手をつないで夕暮れの海へ

自分のピアノに自信が持てない律佳を見て、涼介は夕暮れの色が濃くなり始めた海水浴場へと律佳を誘う。波打ち際で手をつなぎ遊ぶうちに律佳の顔から不安は消えていった。



あなたのことが好きです。
 あなたの優しさに触れたときから
 私の心の音色はずっと心地よく
 鳴り響いてました。

07月04日

●星空の下で恋人繋ぎ

勉強会で律佳とのキスに水を差されて以来、期末試験の勉強が手につかない涼介は勉強の息抜きにと律佳を海へと誘う。星空の下でふたりはついにファーストキスを交わすのだった。

【律佳】「キス…してくれた」

【涼介】「うん」

【律佳】「私の初めてのキス、もらってもらえた。ふふ、初めてがあなたで嬉しい…」

【涼介】「俺もファーストキスが鳴沢でよかったよ」





07月13日

●律佳初体験

キスの先へ進むため涼介は律佳を自分の部屋へと招くが、お互いに初体験を意識してぎこちない。涼介の枕の匂いを嗅ぐ律佳を覗き見て、涼介の理性もついに吹き飛び……。



【律佳】「これから、あなたに私のはじめてをもらってもらえるのね、んふふ…」

照れくささと恥ずかしさの中に、緊張感が見て取れる。

【涼介】「怖い？」

【律佳】「痛いって聞いたことあるから、ちょっと不安だけど…あなただもの。ぜんぜん怖くないわ」

【律佳】「あの、ね…」

【涼介】「ん？」

【律佳】「ふつつかものですが、よろしくお願いします…」

【涼介】「こちらこそ」

あなたがキスして、
私の胸を揉んでくれて、
気持ちよくなっちゃったから……
ちょっと濡れちゃったの…



きっとあなたにもらってもらうために、
今日まで大切にとってたんだと思うわ、んふふ。

【律佳】「ねえ…お願いがあるの」

【涼介】「なに？」

【律佳】「もう1回…キス、してほしい」

【涼介】「いいよ。俺もしたい」

【律佳】「ん~~~~~……………っ」

軽く唇を突き出してくる。

【律佳】「…ん……ん、ちゅっ……」

俺は軽く首を持ち上げ、唇を重ねる。

【律佳】「えへへ…エッチのあとのキスって格別ね」



07月16日

●ソファで騎乗位

律佳の部屋でイチャつくうち、律佳はセックスでもオナニーでもイッたことがないと聞いた涼介。律佳が気持ちよくなる場所を一緒に探そうと騎乗位でのセックスを提案する。

【律佳】「あ、うう…この格好…まるで私がしたくてたまらないみたいだわ…」

【涼介】「律佳ってばエッチだなあ」

【律佳】「あなたがこの、き…騎乗位でしようっていったんでしょ？」

い、一緒に……
私の気持ちいいところ
探してくれるんでしょ？
…だから……
も、もう1回しましょ……？



あなはがいったんらない…。
あさふえらしてほひいっへ…

【律佳】「ふふ、綺麗になったわ。精液って少し苦いというか独特な味がするのね…」

【涼介】「嬉しいんだけど綺麗にするならティッシュとかでもよかったのに」

【律佳】「それはティッシュにあなたの精子を盗られたみたいで嫌。私のために射精してくれたものなのに…」

【涼介】「そっか、ありがとう。気持ちよかったよ」



07月17日

●朝フェラ彼女

律佳の部屋に泊まった翌朝、涼介が求めるのならとネットで調べ朝フェラで起こしてくれる律佳。本当にしてくれると思わなかった涼介は律佳の行動に驚くが……。

…おっぱいは小さくして
 こんなことさせて…
 辱めようとしてるの…?!



07月20日

●律佳と水着エッチ

秀一の提案で海へ遊びに来ていた涼介たち。律佳と一緒に食後に岩場を散歩しているうちムラムラしてしまった涼介は律佳にベニスを胸で挟んでくれるようお願いするのだった。

【律佳】「ひやああんっ!? えっ…う、嘘っ!? な、なに挿れたのっ!?!」

【涼介】「俺の指」

【律佳】「ゆ、指って…んくううんっ!? やあっ…お尻の穴っ、ほじほじしないでえっ…!」

尻穴の中は、入り口よりは広がった。けれど、指を少し動かすくらいが精一杯の狭さだ。

【涼介】「律佳はこっちの穴も、温かいんだな」

【律佳】「はうう…そ、そんなの、知らないっ…」



ひやああんっ!
 お尻でもっ…
 エッチしちゃってるみたいっ…!

あなたの前でならどんな
 恥ずかしい格好でもできるから…。
 うう…もつと…私の奥まで見て、
 エッチな気分になって？



08月03日
 ●音楽室で目隠しエッチ
 めぐるが仕事のため連弾はお休みとなり、音楽室は涼介と律佳のふたりきり。学校では周りが気になってエッチに集中できないという律佳の言葉に涼介は目隠しエッチを提案する。

彼女の目は完全にトロけきって愛おしそうに俺を見つめていた。なんかもう…たまらない。
 【律佳】「ん……ちゅっ。やっぱりあなたの顔が見えるほうがいいわ…」
 【涼介】「目隠しされるの、嫌だった？」
 【律佳】「あれも…ちょっぴりドキドキしちゃうけど…」

おかしい言葉まで教え込まれちゃうし…。私…もつとエッチで変態な子になっちゃったわ…」
 【涼介】「エッチで変態な律佳、大好きだよ」
 【律佳】「ん……私もあなたのことだあい好き」



08月06日

●律佳とめぐるの連弾

後夜祭最後の演奏を先輩に譲り、律佳とめぐるの連弾はなしになったかと思われた。だがふたりに演奏をさせたいという汐風フレンズの尽力で後夜祭終了後に連弾が実現する。

ときが止まった世界の中で彼女たちだけが楽しげに舞っていた。交差し、重なり合う音色は彼女たちの会話。

【律佳】(ねえ、めぐる)

【めぐる】(なあに?)

【律佳】(ピアノって、楽しいわね。とっても)

【めぐる】(うんっ!)

みんなの思いが詰まった最高のステージよ。
このステージに立てるだけでも夢のようだわ。



08月08日

●浴衣デート

汐風のお祭りも最終日。涼介は浴衣姿の律佳とお祭りを楽しんでいた。ひとつのリンゴ飴をふたりで分け合って食べる律佳はいつも増して積極的で、その顔は幸せそうだった。



【律佳】「あ…おもちゃの指輪」

律佳が見つけたのは幼い子供向けのおもちゃ屋だ。水鉄砲やお面など昔ながらの玩具が並んでいる。

【涼介】「まだああいうのって売ってるんだ」

【律佳】「小さい頃はすごく憧れてたわ。お母さんの薬指にはまった指輪がととても綺麗でつきたいっていったら、律佳も大切な人からもらいなさいって貸してもらえなかった」

【涼介】「大切な人…」

【律佳】「…プレゼントしてくれる？」

【涼介】「へっ? えっ、ええっ…!？」

【律佳】「ふふっ、焦ってる」

おいしい?
お祭りに夢中で、誰も私たちのことなんて見てないんでしょ? ふふっ。



08月06日

●律佳とめぐるの連弾

後夜祭最後の演奏を先輩に譲り、律佳とめぐるの連弾はなしになったかと思われた。だがふたりに演奏をさせたいという汐風フレンズの尽力で後夜祭終了後に連弾が実現する。

ときが止まった世界の中で彼女たちだけが楽しげに舞っていた。交差し、重なり合う音色は彼女たちの会話。

【律佳】(ねえ、めぐる)

【めぐる】(なあに?)

【律佳】(ピアノって、楽しいわね。とつても)

【めぐる】(うんっ!)

みんなの思いが詰まった最高のステージよ。
このステージに立てるだけでも夢のようだわ。



08月08日

●浴衣デート

汐風のお祭りも最終日。涼介は浴衣姿の律佳とお祭りを楽しんでいた。ひとつのリンゴ飴をふたりで分け合って食べる律佳はいつも増して積極的で、その顔は幸せそうだった。



おいしい?
お祭りに夢中で、誰も私たちのことなんて見てないんでしょ? ふふっ。



【律佳】「あ…おもちゃの指輪」

律佳が見つけたのは幼い子供向けのおもちゃ屋だ。水鉄砲やお面など昔ながらの玩具が並んでいる。

【涼介】「まだああいうのって売ってるんだ」

【律佳】「小さい頃はすごく憧れてたわ。お母さんの薬指にはまった指輪がとつても綺麗でつきたいっていったら、律佳も大切な人からもらいなさいって貸してもらえなかった」

【涼介】「大切な人…」

【律佳】「…プレゼントしてくれる?」

【涼介】「へっ? えっ、ええっ…!?!」

【律佳】「ふふっ、焦ってる」



08月08日

●林の中で浴衣エッチ

露店の影でリンゴ飴を舐めながらキスを繰り返すうちに我慢できなくなってしまったふたり。涼介は律佳の手を引き、祭囃子がまだかすかに聞こえる林の中へと律佳を連れ込んだ。

【律佳】「そ、そういうことじゃなくて……もう……絶対、私を恥ずかしがらせて喜んでてしょ……？」

【涼介】「否定はしないよ。いつもより律佳のマンコもお尻の穴も丸見えだ。お尻の穴、ヒクヒクしてる」

【律佳】「ま、またそんなところ見てえっ……やあっ……私のお尻の穴なんか見てなにが楽しいのおっ……？」



私がいるじゃない。
私がいなくてもあなたのおカズになつてあげるから……



んー……気が向いたらね。考えておくよ、**適当に**



About TOUKO

by にっし〜(シナリオ)

原画担当の唯々月さんからいただいたラフデザインを元に、僕のイメージを重ねて練り上げていきました。制服の初期デザインも他に色々ありましたが、最終的には満場一致でセーラー服タイプに決定しましたね。アフター編では、伸ばした髪で大人っぽさと可愛さを両立したビジュアルを目指しました。

気まぐれな、もうひとりの転校生

雪村 透子

YUKIMURA TOUKO CV: 有栖川みや美

学年	2年生	誕生日	12月10日
身長	160cm	体重	51kg
スリーサイズ	88 (D) / 58 / 87		
血液型	AB型	原画	唯々月たすく

主人公と近い時期にやってきた、転校生の女の子。ひとりだけ学園指定のものとは違う制服を着ており、その整った容姿と相まってとても目立っている。つかみ所のない性格も手伝ってどこか浮いた存在で、あまり周囲とは打ち解けていないが本人はまったく気にしていない様子。

Expression Collection



School

YUKIMORA TOUKO



制服+カバン



水着



私服

キャラクターラフデザイン



TOUKO
Trivia

by につし〜(シナリオ)

プロットの段階では、もっとワガママでヤキモチ焼きな、手のかかる子でした(笑) 実はホラー系が好きという設定もあり、ここぞとばかりに生き生きするエピソードもあるのですが…これはいつかの機会にお披露目できるといいですね。

ん？ …キミ、なにしてるの？
ここ、立ち入り禁止だよ？



06月03日

●旧館の主

行事委員会の手伝いで校内を回っていた涼介は、立ち入り禁止と言われていた旧館にひとりの女の子が入っていくのを見る。興味を駆られて彼女を追って教室に入った涼介は、そこでもうひとりの転校生雪村透子と出会った。

【透子】「んー…それじゃキミも共犯ってことにしよう」

【涼介】「…は？」

【透子】「転校生同士、周りに溶け込めなかったってことでさ。ここは疲れた2人を癒す愛の巣って感じ？」

【涼介】「いやいやいや、突然何を言ってるんだ」

【透子】「こういう設定にしておけばキミもバラしにくいかなーと思って。男女の噂ってなかなか消えないからね」



揉んだりしなければ
怒らないから！
もっとしっかりくっついて……！



06月11日

●用具入れの中で

透子を探して旧館へ足を運ぶと体育の授業を終えた透子が着替えていた。予想外の光景に瞬間固まるふたり。そんな時、旧館に新たな足音が。着替え途中の透子と一緒に慌てて用具入れに隠れるが……。

【透子】「シッ！ 静かにして！ 見つかったらから！」

【涼介】「え…？ 見つかる…？」

耳を澄ませてみると遠くから足音が聞こえる。

【涼介】「誰か来た…？ 俺達の他に誰か入ることなんてあるのか…？」

【透子】「わからないけど…とにかく隠れてやり過ぎさないよ」

【涼介】「あ、あの…雪村…？ す、スカート…！」

【透子】「し、知ってるよ！ 隠れるのが先なんだから仕方ないでしょ！？ そもそもキミが急に来るから…！」

06月16日

●居眠り透子

今日も旧館へ向かう涼介。透子への気持ちが好きへと変わってから透子の無防備な寝顔を見てドキドキしてしまう。だが、ふたりだけの秘密の場所を七夕祭りの展示に使いたいという意見が秀一の元に寄せられ……。

【透子】「すう…すう…つ…えへへ、おいでおいで〜」

【涼介】「っ!? な、なんだ…!？」

【透子】「キミ…カワイイね〜……よしよ〜し……」

こ、これひょっとして俺に言ってるのか…!? もしかして…雪村は俺のことを「カワイイ」なんて思ってくれてるのか…!?

【透子】「にや〜…んふふ…すう…」

【涼介】「…猫かよ」

…そんなオチだろうと思ったよ。

ちょっと期待しちゃった俺がバカだった。

【涼介】「全く…のんびりしたヤツだよな」



ん…んん…? あれ、来てたの…?



【透子】「…心臓の音、聞こえる。すっごくドキドキしてるよ?」

【涼介】「し、仕方ないだろ…!? 透子がこんなに近かったらドキドキするの当たり前じゃないか…!」

【透子】「えへへ、私も。ここに座るとね、ドキドキするけど落ち着くんだ」

【涼介】「…そうは見えないんだけど」

【透子】「あ、ちょっとドキドキが早くなった。なに考えてるのー?」

【涼介】「な、何でもないって! それよりいつまで俺に寄っかかっている気なんだ!？」

【透子】「私の気が済むまでー。んー…もうちょっと収まりいとこないかな」

【涼介】「ちょ、動くなっって! 危ないから!」

えへへ…もっかいおやすみなさーい…
一緒に寝よー…すう…



06月24日

●膝の上で甘える透子

旧校舎で涼介お手製のお弁当を食べ、ご満悦の透子。膝の上で甘えたあげく寝息を立て始めた透子に釣られて涼介もウトウトしてしまう。昼休み終わり3分前に目を覚ました涼介は……。



涼介くんも一緒にどう？ すっごく気持ちいいよ？



06月27日

●「楽しそう」を思いつくままに

すっかり暗くなった夜の学園をふたりで探検していると急に透子が走り出した。たどり着いた先は人気のない夜のプール。水面を眺めていた透子は何を思ったか制服のままプールに飛び込んだ。

【透子】「もう、ノリ悪いなあ。誰もいないだし、気持ちいいんだからいいじゃない」

【涼介】「そういう問題じゃないだろ！ そんなに濡れて…帰りはどうするんだ！？」

【透子】「ありゃ、ホントだ。どうしようかな…。ま、夏だしなんとかなるんじゃない？」

【涼介】「なんとかって…あのなあ」

06月29日

●もっとたくさん……

我妻先生の手伝いでお流れになったデートの埋め合わせとして涼介の家でケーキを食べたいと言う透子。甘い時間を過ごすうち、ふたりは抱き合っただけのキスをするだけでは満たされなくなり……。

【透子】「…うん。涼介くんがしたいこと…私に教えてよ。言葉じゃなくて身体で伝えて？ 私にわかるように…ゆっくり、優しく」

不安が少しだけ和らぐ。こうやって少しずつ不安を取り除きながら、ひとつずつ進めていこう。

【涼介】「触っても…いいか？」

【透子】「うん…でも、初めてだから…ゆっくり触ってね？」



恥ずかしいのに…うんっ！
もっとなんてほしい…のっ…
あうっ！ あはあっ！





06月30日

●欲張りなキス

行事委員会の買出しで商店街へ向かったはずが、遊ぶ気満々の透子によって制服のまま寄り道デートに。休日に改めてデートする約束を取り付け、触れ合うだけでは物足りなくなったふたりは唇を重ねるのだった。

【透子】「ん？ どうしたの？」

【涼介】「いや、1日をもっと長かったらいいのになーって思っ」

【透子】「…私も。こんなこと思うの、初めてだよ」心地良い風が吹く。夕陽に照らされた透子の横顔はキレイで…触れたい気持ちが抑えきれなくなる。

【涼介】「透子…」

【透子】「あ…」

優しく肩を抱き、瞳を見つめる。それだけで俺の意思が伝わって、透子も俺の気持ちを受け入れてくれる。



お昼にもキスしたのに。
もうガマンできなくなっちゃった…？



07月05日

●エッチな褒美

期末試験前の週末。涼介の家へお泊り勉強会にやって来た透子は、頑張って勉強していた涼介へのご褒美として一緒にお風呂に入ろうと誘う。ご褒美は透子のパイズリだった。

このコも…
涼介くんと一緒に
イタズラ好きなんだね。

【透子】「はっ…ん…まだ頑張るの…？ こんなにビクビクしてるのに…ちゅっ…このコも早く気持ちよくなりたいって言ってるよ…？」

【涼介】「あうっ…ぐ…！」

そんなことは俺が一番わかってる。本当は今すぐにも射精してしまいたい。

【透子】「それなら…ガマンできないようにしてあげるっ…！」

【涼介】「うあっ!？」



07月12日

●シャワールームでふたり

期末試験も無事終わり、この間話していた沙風公園プールに遊びに行くことにしたふたり。キスだけでは我慢できなくなった透子に誘われた涼介は、シャワールームで人目を忍んで身体を重ねる。

【透子】「…あ、カタくなってる」
【涼介】「し、仕方ないだろっ!? 透子水着だし、キスするのも1週間ぶりだし、先週は…その、ガマンしなきゃいけないし!」

【透子】「…えへへ、そうだね。キスだけのつもりだったけど私もその気になってきちゃった。シャワー浴びよっか。一番奥に入ってるから…。待ってるね?」



ひどい…よお…。
私だけ先に…イかせちゃう
なんてえ…っ…!!



07月17日

●いっぱいイジめちゃうから

引越しが決まってから涼介と離れ離れになることに悩み、逢うのを避けていた透子。だが愛し合うふたりには別れるという選択肢は存在しなかった。4日間のすれ違いを取り戻すようにふたりは求め合う。

…ね、私…今すぐ涼介くんがほしい。
ずっとガマンしてたんだから。もうガマンする必要、ないでしょ…?

【涼介】「うっ! ちょ、透子っ…! は、激しいって…!」

俺の言葉は聞こえていないかのようだ。何日もガマンしたという言葉に偽りはなく、ようやく望んでいた玩具を与えられた子猫のようにモノにじゃれつく。

【涼介】「ちょっと…落ち着けて…! そんな、したらっ…!」

【透子】「んっ…ぶは、あっ…! だって…! ずっと触れたくて、触れてほしくてっ…! 寂しかったんだもんっ…!」



07月18日

●重なり合った気持ち

コンドームを忘れてフェラまでで我慢した翌日。涼介はタイミングを見て自宅に誘おうと考えていた。だがお預けになっていたのは透子も同じ。スイッチの入ってしまったふたりは、そのまま校内で心と身体を重ねる。

【透子】「えへへ…不思議だよな…あんっ！手を繋いだり…抱き合ったりするの…あうっ…こんなに違う、なんてっ…！」
【涼介】「そりゃ、そうだろうっ！こうして透子と繋がるのは特別だからっ…！」

【透子】「あんっ！うん、私も…特別、だよっ…！こんなやつ…涼介くん以外となんて…想像できないから…！ふぁあっ！」



いいよっ…！！
涼介くんになら…
なに、されてもっ…！！



07月26日

●料理上手への道

みんなでお弁当を持ち寄るお弁当会に触発され、涼介に料理を習いたいと告げた透子。エプロンを持ち込んで野菜炒めを作ろうと張り切る透子だったが、料理上手への道は険しいのだった。

あはは、このコとは仲良くなれそうな気がする。
よーし、サクサクいっちゃおっと！

【透子】「…玉ねぎって、切ると涙出てくるんですよ？泣いちゃうってわかってるのに、やだなあ…」
【涼介】「大丈夫、涙の出ない切り方ってのがあるんだよ。前にTVで見たから、そいつを伝授してやるよ」

【透子】「へ～、すごい！そんなのあるんだ！？教えて教えて！」
【涼介】「一気にサクッと切るんじゃなくて、ゆっくり切るんだ。包丁の刃を押し当てて、ゆっくり押し引いてを繰り返すんだよ」
【透子】「んと…こんな感じ？ゆっくり、ゆっくり…押し、引いて…！」
【涼介】「そうそう、上手い上手い。ケガする心配も減るし、上手くできるだろ？」
【透子】「うん。わ、ホントになんともないや。これなら全然怖くないね」





07月27日

●リクエストはエプロン

昨日に引き続き、透子に料理を教える涼介。レシピ片手にひとりでがんばった透子のご褒美はいつもの通り涼介を背もたれにして膝の上。甘える透子に涼介は再びエプロンを身につけてくれるようお願いして……。

【涼介】「…それじゃ、俺からもリクエストしていいか？」

【透子】「…なあに？」

【涼介】「透子のエプロン姿、すっげーかわいかったから…もう1回見たい」

【透子】「…いいよ。涼介くんだけに見せてあげるんだからね…？」



んふ、たくさん褒めてもらっちゃった…。
んんっ…繋がって甘えるの、
気持ちいいね…？



【透子】「なに、これ…？ セタのお願い事…？」
 【涼介】「そうだ。みんな準備の追い込みで忙しい中、俺が頼んで作ってもらった」
 【透子】「どういうこと…？ どうし

て、これを私に…？」
 【涼介】「この短冊な、全部透子へのお願いが書かれてるんだ。笹飾りは瀬川に提供してもらった。飾り付けするの、すっげー苦労した」

もう…置いていけないね。
 こんなにたくさんの想い…
 置いていったら、怒られちゃうよ。

08月06日

●浴衣でラブラブエッチ

後夜祭も終わりに差し掛かり、透子と過ごせる時間ももう残りわずか。みんなからのメッセージを、忘れられない思い出を受け取った透子。彼女の口から出たのは大切な人への真っ直ぐな気持ちだった。



離れちゃダメえっ！
 今は…1秒も、離れたくないのおっ…！



【透子】「ね、時計…見て？」
 【涼介】「え？ 時計って…？」
 時計の針は深夜0時を回っていた。それは、俺と透子が約束した時間が終わったことを意味している。
 【透子】「今日から…本当の恋人同士として涼介さんと一緒にいたい。私のワガママかもしれないけど…叶えてくれる？」



あ、日野先輩って呼んでもいいですか？
お義兄さん？…は、少し早いですよね。



エプロン



ドレス



アフター編私服

世界で羽ばたくピアニスト

鳴沢 めぐる

NARUSAWA MEGURU

CV:くすはらゆい

職業	ピアニスト		
身長	159cm	体重	49kg
スリーサイズ	85 (C) / 54 / 83		
	原画	秋野すばる	

律佳のひとつ年下の妹。幼い頃、国際コンクールのアジア大会で金賞とソリスト賞を受賞したのを皮切りに国内外の数々のコンクールで高い評価を得てきた。現在は両親とザルツブルクに移住し、新進気鋭のピアニストとして演奏活動を行なっている。

Expression Collection



Other Characters



よし、そんな悩める子羊くん
俺と香織さんの甘々
ファーストチッツス
エピソードを特別に教えてやろう

行事運営委員会の委員長

菲沢 秀一

NIRASAWA SYUICHI

CV: 堀川忍

学年

2年生

原画

秋野すばる

一見、秀才風の優等生。肝心なときに熱い想いを空回りさせへられる憎めない男。主人公の涼介とは小学生の頃に地域のサッカー部でチームメイトだった仲。2歳年上の大学生、香織さんとラブラブ交際中。



私服



水着



アフター編スーツ

Expression Collection



Other Characters



私服



水着

いつも和やかで軽妙な性格の主人公

日野 涼介

HINO RYOUSUKE

学年	2年生	誕生日	10月7日
身長	178cm	体重	68kg
原画	恋泉天音		

お調子者ながら責任感が強く、決めたら一直線に突き進む性格。建築士になりたいという夢を持っており、手先の器用さを生かして転校前は親戚の建築事務所で住宅模型を作るバイトをしていた。

汐風市に居を構える、気鋭の建築家

我妻 盛夫

AZUMA MORIO CV: 星一人

職業	建築家	年齢	52歳
原画	秋野すばる		

主人公が目標として憧れている建築家のひとり。繊細な作風とは裏腹にざっくばらんで快活な性格。「マリンピアしおなぎ」は初期の代表作として知られている。



スーツ



Expression Collection



星織ユメミライ

HOSHI ORI ★ YUME MIRAI
The memories of that day, memories of you, I wish upon a star
to be always with you.

アートワークス

After
Part



Short Story

Marika Short Story ★ Touko Short Story

「真里花、二十歳になりました」

文 丘野塔也

絵 恋泉天音

「は〜……うう〜……」

桜の舞い散る、陽気な春の日差しの下。
なんとも気の抜けたため息をついて、真里花はがっくりとうなだれた。

こんな表情を見せるのは、とても珍しいことだ。
真里花はあんまり落ち込まない、というよりも落ち込んでいる姿を見せようとしなない。

いつもニコニコ笑っていて、どこかふんわり軽い足取りをしている。本人も多少が自覚があるらしく、この間は街で見かけた小型犬をじっと見つめて「なんだか、わたしと似ている気がする……」と呟いていた。

そんな真里花が、深く落ち込んでいる。
「さっきのことがそんなにショックなのか？」

「だって〜……」

桜の花びらが、ふわりとその髪を撫でる。
じっと河川敷を見つめていた瞳を、そっところらに向けた。

「子供に、間違われたんだよ……？」

ちょっぴり涙目だ。

「わたし、もう二十歳なのに、大学生なのに……」
そしてまた、力なく不満げな声を上げる。

「もうずっと涼介の彼女なのに〜……！」



この日は、久しぶりのデートだった。

真里花の通う大学では、二年生の終わりに保育士資格を受験することになっている。こしばらくは、そのための勉強会が多く、なかなか時間が取れずにいたのだ。毎日LIMEで話していたし、たまに夜自宅を訪問してくれていたの、まったく会っていないわけではないのだけど、やはりゆっくりとふたりの休日を過ごしたい。

重い冬の空気が消え、清々しい風が漂うころ。勉強も一段落して、晴れ晴れとした顔の真里花と共に、市街へと出かけることにしたのだ。

久しぶりの休日は、陽だまりにつつまれた暖かな日だった。

もう桜は満開で、河川敷の両端を薄桃色に染め上げている。厚いコートを脱ぎ捨てて、薄手の上着を羽織った俺たちふたりは、足取りも軽く木々の下をくぐっていた。

やってきたのは、レトロな雰囲気のカフェだ。昔ながらの木造建物をそのままに保存し、内装を喫茶店に改装してある。有名なお店らしく、汐風第一学園に通っていた頃から話は聞いていたのだが、これまでは足を向ける機会がなかった。最近になってまた雑誌で特集されていたのを目にして、桜並木を散歩がてら休憩してみようということになったのだ。

上品な雰囲気のおばあちゃん店員さんに案内されて、木漏れ日の落ちる窓際の席に腰掛ける。
「見ろよ、真里花。ここから桜が見えるぞ？」
「わ〜……きれいだな〜……」

窓辺からは、通りに咲く桜を眺めることができた。絵画のようなその光景を、真里花は瞳をまる

くして魅入っている。

「こういうところでお茶すると、絶対においしいよね」

「空間っていうのは、いろんな感覚に影響を与えるからな」

「素敵な場所で、涼介と一緒に飲めば、なんでもおいしいと思うな」

真里花はご機嫌らしく、にこにこ笑っている。

「俺も、真里花と一緒にならなんでもおいしいよ」

「あう……て、照れるな〜……」

「さて、なに注文する？」

メニューを開いて、ふたりのでぞき込む。

「ここお酒もあるじゃん。ちょっと飲んでみようかな」

「あ、また飲む気なんだ。ずるーい」

「なにせ、新成人だからな。新しく手に入れた権利は、使わないと」

「でも、わたしもうへっちゃんらだもんね」

「ついこの間、誕生日のお祝いしたもんな」

「そうでーす。立派な大人なんだからね」

真里花はふふんと誇らしげに鼻を鳴らす。

つい先日、3月3日。真里花は晴れて二十歳になったのだ。

「涼介と乾杯してみたいな〜……わたしも、一杯だけ試してみようかな……？」

はじめてグラスを鳴らしあえるのが嬉しいのか、屈託なく目を細めて笑いかけた。

「ご注文はおきまりですか？」

そこへ、ちょうどおばあちゃん店員さんがやってきた。

「じゃあ俺は、グラスビールお願いします」

「わたしは、えーっと、えーっと……あつ、これおいしー！」

真里花はちょっと目を泳がせて、やがてメニューを指さす。

「さくらフィズをお願いします！」

そして、期待と緊張が入り交じる眼差しで注文した。

「あら……」

だが、店員さんは困った顔を浮かべて、じっと真里花を見つめた。

「ごめんなさいね、これアルコールが入ってるの」

そして、ご機嫌な真里花を、どん底に突き落とす一言を放った。

「だから、子供は飲んじゃダメなのよ」

「こ、子供……!？」

「うーんと、そうね。妹さんには、さくらミルクなんてどうかしら？」

「い、い、妹——！」

さらに、追い打ち。

まさかの展開に絶句した真里花は、そのまま店員さんの勧めに従うまま、さくらミルクをオーダーしていた……。



「さくらミルクはおいしかったけど……」

その時のショックを思い出したのか、小さく肩

をすくめる。

結局、真里花は敗者のようにさくらミルクを啜り、合間に「意外とおいし……」などと呟きながら、ただ打ちひしがれていた。

やがて俺たちは喫茶店を後にして、河川敷に腰を落ち着けたのだ。

「でも、わたしが飲みたかったのはさくらフィズなんだよ……！」

ちょっぴり口をとがらせて、真里花は不満を漏らしていた。

「たまにはそう言うこともあるって。店員さん、結構おばあちゃんだったしさ。あんまり年齢は判別できなかったんだよ」

「でもこれは、ゆゆしきちぢたいだよ！」

「囁んでるぞ」

「あう〜……でも、大変だよ？ わたしが小さく見えるってことは、そのう……涼介が年下趣味に見られるってことだもん」

「別に俺は、気にしないけどな」

「だけど、わたしは涼介と同じ年だもん。二十歳……なんだもん」

そう呟いて、真里花は前髪をいじった。

「やっぱり髪を切りすぎちゃったせいかもしれないけど、子供っぽかったかなあ」

「真里花はどっちかっていうと可愛いほうだし、似合ってるって」

「だけど、でも……これからは伸ばすことにする」

なにやら決意を込めて、そして真里花はそっと姿勢を正した。

「わたしは、涼介にふさわしい彼女でいたいんだよ」

その澄んだ瞳に、じっと見つめられる。

「誰が見てもお似合いですわって言われる——そんな彼女でいたい」

「……………」

その言葉は、きっと真里花の本音なのだろう。そんな姿は誰よりも愛らしく、抱きしめたくなるほどいとおしかった。

「お困りのようね」

その時、ふと人影が目に入った。

「この声って……瀬川!？」

「ええ？ どーして……？」

ふたりして顔を上げると、タイミングを待っていたかのようにシャッター音が響く。

「シャッターチャンス！」

そこでファインダーを覗いているのは、やはり夏希だった。

「うーん、我ながらい写真が撮れたわね」

早速先ほど撮った写真を確認しながら、うんうんと頷いている。

「さしずめ、仲のよい兄と妹ってところかしら」

「うううっ……」

「瀬川……お前は、傷口に塩をすり込むようなことを……」

「あははっ！ 冗談よ、冗談」

「……というか、どうして兄妹のこと知っているんだよ？」

「何言ってるの！ こんなLIMEもらっちゃったら、いてもたってもいられないでしょ？」

夏希から見せられたスマホの画面。

そこには、真里花からのメッセージが映し出されていた。

「さっきのこと、ついLIMEしちゃって……ほら、涼介がトイレ行ってたとき」

真里花のショックを、他の誰かにも聞いて欲しかったらしい。

「そういうこと。河川敷でデートするって話は、前から聞いていたから、もしかしてと思ったわけ」「それで、俺たちを見つけれられるのがすごいな」

「瞬間は逃さない、それがあたしよ」

カメラを片手に、夏希は胸を張る。きっとその中は、桜と、それを楽しむ人々のデータでいっぱいだろう。

「さて、事情が分かったところで……大人っぽくなれる方法、おしえてあげましょーか？」

「え、えっ？ どうすればいいのかな……？」

「そんなの簡単よ！ ほら、まずスマホを用意して。カメラは自分のほうに向けて」

「えっと、こう……かな？」

「もっと高く！ カメラを高くすることで、自然と上目遣いになるの。目も大きくなるし、フェイスラインもすっきりするのよ。後は頬の近くに手を添えて……そう、シャッター切って！」

「あ……すご、かわいい。違う人みたい……」

「うーん、いい感じに撮れたわね～！ あとはアプリを使って補正すれば完璧よ！」

「それは、詐欺写メというんじゃないか？ きれいになるとはまた違うと思うぞ」

「いいじゃない。これも写真の可能性でしょ？」

「それは、そうだけだよ」

「あたしが撮りたかったんだから、いいの」

どうやら、そういうことらしい。

「どう真里花？ これで気持ちがすっきりした？」

「うーん、写メはかわいいけど、根本的解決にはなっていない気が……」

「仕方がないわねえ。じゃあ今度のお花見で、みんな話合いましょー！」

「え、えーっ！ みんなでー？」

「これは、いいお酒の肴になりそうね！ 楽しみだわ～！」

夏希は楽しそうに笑って、やがて軽やかに手を振って去っていった。

いつもながら、嵐のようなやつだ。一瞬巻き込まれた俺たちは、しばらくぼつんとその場に立ちつくしていた。

「あの……」

真里花が遠慮がちに、服の裾を掴んだ。

「……詐欺写メ、いる？」

「おう……ありがとう。可愛く撮れてるよ。でも俺は、いつもの真里花のほうが好きだけど……」

「もうっ、照れるよう……！」

真里花はぼつと頬を桜色に染めると、俺の背中を叩いた。

舞い散る桜が、栗色の髪に落ちる。

そっと取ってやると、くすぐったそうにはにかんで、俺の手を握るのだった。

★ ★ ★

「あはははは！ お花ちゃん、妹に間違えられたのー？ かわいいそうにー！」

夜桜の下、透子が腹を抱えて笑い転げた。

見事にライトアップされた桜の下では、かつて

一緒に学園生活を送った仲間たちが顔を揃えている。

卒業して二年経つが、いまだに連絡を取り合っており、たまにこうして全員で顔を合わせては、近況を報告し合っているのだ。

「いやー久しぶりに帰ってくるって面白いわがいろいろ聞けるね。やっぱり汐風は楽しいよ」

二年生の終わりに、引越していった透子。

それでも、この季節になると、彼女は春風に誘われるように汐風へ戻ってくるのだ。なんだか気まぐれな猫のような行動は、なんとも透子らしかった。

「メガネくんも、別れちゃったらしいしー」

「ちょっ、いきなり俺の話かよ？」

すると、急に秀一の話になった。話題も気まぐれな透子だ。お酒が入っているせいもあるけれど。「メガネくんにはもったいない美人ちゃんだったのになー」

「いや違うって！ 喧嘩してるだけで、別れてはいない！」

「でも海外留学しちゃうんでしょ？ それって結局別れるパターンだよな」

「ぐぐぐ……」

透子に責められて、秀一はビールを一気に煽った。

「そうなんだよー！ 香織さん、俺を置いていかないでくれー！」

そして、そのまま俺に抱きついてきた。

「わかった、わかった。可哀想にな」

「うおおおおおーっ……！ 香織さあーん！」

そんな様子を見ながら、また透子は腹を抱えて笑い転げた。

昔とは比べものにならないくらい、朗らかな笑顔だ。こんな顔が見られるのなら、秀一に抱きつかれるくらい我慢できるかもしれない。

「さっきから、話を聞いているけど……」

すると、透子の隣にいた律佳が話題に入ってきた。

「それの、何がいけないの？」

「うーん、と言うと？」

「だから、子供に間違われることよ」

律佳は、ベーコン巻きチーズに手を伸ばしながら、真里花を見つめる。ちなみに今日のおつまみは、律佳が中心になって用意してくれたものだ。「私なんか、大学の同級生にずっと敬語を使われていて……ある日どうしてって聞いたら、先輩だと思ってたって驚かれたのよ」

学園にいた時から彼女は独特の世界というか、雰囲気を持っていて、確かにすこし近寄りたいたところはあつた。

「うん、でも……分かるかも。わたしも最初そう思ったもん」

真里花は申し訳なきように呟いた。

「それって、ちょっと老けているってこと……？」

「ううん、違う違う！ 大人っぽいんだよ。わたしからしたらすごく羨ましいよ。憧れるもん」

「そうかしら……」

小さくため息をついている律佳。ちなみにお酒はほとんど飲んでいないようだ。「まあ、ピアノやってるからってのもあるんじゃないか？」

「なによ、それ」

俺の言葉も臍に落ちないようで、律佳は首を傾げた。

「なんとなく、そんなイメージないか？ ピアノとかバレエとかやっている人って大人びて見える

というか……」

「あー、でもわたし、子供の頃ピアノやってたよ？」

「マジで？」

「うん、でも喘息ひどくなって、結局やめちゃったけど」

「あー……」

どう答えていいかわからず、言葉を詰まらせる。

しかし真里花は気にしていないようで、ピアノを弾くように指を動かす。

「あのままピアノを続けていれば……もしかしたら大人っぽくなれたのかも。ドレスとか着こなせるようになりたいな」

「それは、どうかしら……」

律佳は俺を一瞥すると、ふっと力を抜くように笑った。

たぶん、真里花がピアノを続けていたとしても、やっぱり大人っぽくはならなかつただろう。

「いまも習ってるけど、お遊戯の曲ばかりだしな～」

飽きずに、ピアノを弾く真似をしている。

なんだか微笑ましくなって、律佳とふたりで頬をほころばせた。

「真里花さんは、そのままでとても可愛いですよ」

すると今度は、たらふくお酒を飲み続けている美砂先輩が話に割り込んだ。

「動物には、生まれ持った姿があります。そのまままで生きることが、なにより素晴らしいのです」

そういつて、胸を張る。

美砂先輩のたわんな膨らみが、俺たちの前に突き出される。思わず凝視してしまいそうになって、そつと視線を逸らした。きっと美砂先輩は、そんなこと気にしないだろうけど。

「そりゃあ、美砂さんはスタイルがいいですから～……」

同性の強み、真里花は美砂先輩のバストをじつと見つめながら、ちびりとさくらフィズの入った紙コップを傾けた。ちなみに、コンビニで買ったものだ。

「それは、私の方がひとつ年上ですからね」

「あと1年で埋まる差とはとても思えないんですけど……」

「そんなことはありません！」

すつかり劣等感を覚えている真里花に、美砂先輩はぐぐと迫る。

「女性ホルモン分泌により、女性のおっぱいは二十五歳まで大きくなるんです！ マグロの赤身を食べるのが、とっても有効なのだそうです。そこで、こちらの鉄火巻きはいかがですか？」

「あ、おいし……」

「日本酒と合わせると、さらに進みますよ！」

おちょこを丁寧に両手で持って、おいしそうに飲み干している。その傍らには、空になった瓶が転がっていた。美砂先輩はお酒が大好きで、その飲みっぷりには見事だった。

「私も、マリは子供っぽくないと思う」

それまで黙っていた、そらが声を上げた。ちなみにまだ未成年なので、ひとりオレンジソーダを飲んでいる。

「むしろその程度……私からすれば、羨ましい悩み」

「え？ というと～……」

「こないだ県外のプラネタリウムにいったら、子供料金のチケット渡された」

「えええっ！？ それって……」

「学生証を見せるまで信じてもらえなかつた。お嬢ちゃん扱いで胎までくれた」「……上には上がいるな……」

しかしそれはいつも通り飄々としていて、あまり気にした様子はない。
「身長や見た目を変えることはできない。だから、仕方ない」
「うん、そうだよな……」
「でも立ち振る舞いで大人っぽい印象を与えることは出来る」

その言葉に真里花はハッとした。
「内面から大人になれば、きっと大人として扱ってもらえる。私も、ちゃんと係の人に説明すれば分かってくれた」

まさに、その通りだ。
「逢坂、意外といいこと言うな」
「意外とじゃない。私、結構いいこと言う」
俺に褒められたのが嬉しいのか、微かに口元を緩めると、親指を立ててみせた。

真里花も感じるどころがあったのか、同調するように頷き返す。

ふたりの和やかな空気に、これで一件落着だと安堵の息を漏らした。

——が、ここは酒の席。
これで終わるはずはなかった。

「つまり！」
俺と真里花の間から、にゅっつと顔が出てきた。
「おわっ！ 驚かすなよ、瀬川」

だいたい酔っばらっているだろう夏希が、何やら企んだ顔で出てきたのだ。

「内面……それは下着から大人っぽくなればいってことね！」

「どう解釈したらそうなるんだよ」
「真里花、あんたは下着が子供っぽいよ。まずそこがダメなの」

俺の言葉を無視して、夏希は切々と熱弁を振るいはじめる。

下着メーカーの回し者かと突っ込みたくなるくらい、デザイン的重要性や、色と与える印象について語り続ける。

「そんなに、子供っぽいつもりはないんだけど……」

「本当？ どうせライムグリーンとか、パステルピンクばかりなんじゃないの？」

「そ、それは……」
「どうなの、涼介？ あたってるとでしょ」

「ああ、まあ……って、どうして俺に聞くんだよ！」
「そりや、彼氏が一番詳しいに決まっているからね」

「まあ……お盛んなんですね」
さらに、美砂先輩まで追い打ちをかけてくる。

「は、恥ずかしいな……」
俺の隣で、真里花も下を向いたまま赤面していた。

しばらくは冷やかさるがままに、甘んじて受け入れる。それはまるで学園にいた時のようなノリで、少しだけ懐かしい気がした。

……が、昔との違いは酒が入って手をつけられないことである。

「まったく、もう……みんな酔っばらって好き勝手言うんだから……」

すこし落ち着いてから、真里花も呆れたようにため息を吐いた。

だが、一方では思うところがあったみたいだ。
「でも……一理、あるかも」

「そ、そう……なのか……？」
泣く秀一を適当にあしらいつつ慰めている透子と、それを眺めている律佳、陽気にお酒を注ぎ

あう、美砂と夏希、横でちびちびとオレンジサイダーを飲んでいるそら。

季節の移り変わりを惜しむように桜の花びらが風に舞っている。

真里花の飲んでいたさくらフィズにも、ひとひらの花びらが浮かんでいた。



——新学期。

冴え渡った空は、始まりの日に相応しかった。
大学への通学前。真里花の家へ寄ると、玄関のチャイムを鳴らす。

いつもならすぐ出てくるはずなのだが、変わりに顔を出したのは、真里花のお母さんだった。

「ごめんさいね、ちょっと時間がかかっているらしくって。ちょっと様子見てくるわね」

軽い足取りで、真里花の部屋がある二階へとあがっていく。遠くから、ふたりのやり取りが聞こえてきていた。

「真里花ー」
「あー、うー」

もともと、扉越しらしく、真里花の声はこもっていてよく聞こえない。

「涼介くん来てるわよー。今日は一緒に行くんでしょー？」

「うへ……」
しばらく、なにやらやり取りがあつて。

やがて、お母さんは首を傾げながら戻ってきた。
「涼介くん、真里花が来て欲しいんですって？」

「どうかしたんですか？」
「さあ？ 相談したいことがあるんですって」

促すのに従い、家へとお邪魔した。
お父さんは仕事ですでに出かけた後みたいだ。

それでも、ちょっぴり緊張しながら真里花の部屋へと向かう。

すると足音に気付いたのだろう、僅かに開けたドアの隙間から、真里花が顔を出した。

「まだ準備できてないのか？」
「そーなの……」

その頬は、なんだかほんのり赤い。
「まあ、まだ時間があるからいいけどさ。えっと、お邪魔していいか？」

「ど、どーぞ……」
真里花の部屋へと通される。

まだパジャマ姿の彼女は、いつもより無防備でどきどきする。

わずかに開いた窓からは、春風が吹き込み、時折レースのカーテンが風に舞う。

「そのう……」
どこかもじもじした様子で、真里花が声をかけてきた。

背後に、何か持っているようだ。
「実は……下着選びで迷っちゃって……」

「下着？」
「うん、実はあの花見のあと盛り上がりつつあって……みんなの意見を参考にした結果、ですな……」

真里花は隠し持っていた下着を見せた。
黒いレースの下着は、いかにも大人っぽいデザインで、普段の真里花ならまず選ばない1枚だろう。

「や、やっぱり、わたしには派手すぎるかなあつて……思うんだけど……そのっ……感想いってもらつて、いいかな……？」

そう言う真里花は、もう真つ赤になっている。その恥じらいを押し込めて、上擦った声を上げて

いる。

遠慮がちにいうその姿がなんだか可愛くて、気がつくとその頭を撫でていた。

「はう……」
「見たい。……ってというか、こっちこそ見せて欲しいくらいだ」

「わっ、ほんとっ。じゃ、じゃあ……着てみませ……」

俺の返事に、真里花の表情がぱつと和らいだ。
「……どーぞ」

それから部屋の外で待つこと、数分。
遠慮がちな声が、室内から聞こえてきて、再びドアノブを回した。

「どーかな……」
そこにいた真里花は、普段とは全く違っていた。

「派手かな……？ それともやっぱりおかしいかな……？」

いつもならパステルの淡い色を好む彼女が、どこか艶めかしい下着をつけている。ほどよく膨らんだ胸を包む黒いレースが大人の女性を思わせ、瑞々しい真里花の肌を際立たせている。

きゅつと締まった可愛いお尻は、これまた薄いレースで覆われている。小さくあしらわれたリボンが、余計に色気を感じさせた。

「どうって……その、いいと思うぞ」
見とれてしまつて、一瞬かける言葉を失ってしまった。

その姿を、いつまでも飽きずに見つめてしまう。
あどけない真里花の顔立ちと、挑発的な下着はアンバランスで、とても扇情的だ。

体のラインをそのまま出す下着は、布の面積もとても少ない。

少し指で引っ張れば大事な部分が露わになってしまいそうなほど危うく、後ろからは柔らかな尻がみ出ている。

「……きれいだ」
その様子を表す言葉はたったひとつで、ただそれだけを伝えた。

「わ、わへ……嬉しいな……」
目の前の彼女がふんわり笑う。

緊張から解き放たれてなごやかに笑う姿は、いつもの真里花のものだった。

なんだか愛おしくて、ますますその存在に触れたいと思った。

「わっ……わへ……」
だから、すぐにぎゅつと下着姿の真里花を抱きしめた。

「似合ってる。真里花、大人っぽいぞ？」
「えへへ……よかったあ」

窓から爽やかな朝の風が吹き込んできた。
首筋を撫でる風は柔かい。

真里花の柔らかな匂いと混ざり合つて、いつまでもこうしていたかった。

「大学終わつたら、またあのカフェにいこうよ」
真里花はそつと俺の胸にすり寄つて、優しい視線を投げかけた。

「今度は恋人同士ですってアピールするんだ」
「ようし、そうするか」

「うんっ」
季節が巡る。

新しい季節が始まる。
葉桜が、また夏の訪れを告げようとしていた。

END



「特別な応援を、キミだけに」



文 につし〜
絵 唯々月たすく

夏の暑さがまだ残る、9月。
俺達行事委員会の面々は、明日に迫った体育祭のための準備を進めてきた。
「いいか、今回も絶対に成功させるぞ！」
委員長の秀一が声を上げる。
「おおーっ！」
俺達もやる気と共に、声を返す。
気合いの入れ方も板に付いてきて、委員たちのまとめ方もずいぶん上手くなったものだ。
「よし、それじゃお疲れ！ 今日これで解散！明日の集合時間に遅れるなよ？」
委員たちは、それぞれ帰宅の準備。
いくつものグループがこの後の予定を合わせる相談を始めて、行事委員会室は賑わいを見せていた。
「さ、俺たちも帰ろうぜ」
俺は当然、隣の透子に声をかける。
「うん。帰ろう帰ろう！」
笑顔で返ってくる声と、温かくて柔らかな手の感触。
俺からも笑顔返して、委員会室を後にした。

夕暮れの帰り道を、透子と並んで歩く。
こうして歩くのも、もうすっかり慣れたもので。お互いの歩調も距離も、何も言わず自然と合わせられるようになっていた。
「なあ透子、結局何の競技に出るんだよ？」
「んー？ ナイショだよ。明日になればわかるってば」
「そりゃそうだけど。あ、サボって保健室で寝るとかはナンだからな」
「あはは、昔の私ならあり得る話だね。それでそのまま行方不明」
笑いながら、人差し指をピコピコ振って答える透子。
今でも十分にあり得る話だと思っただけど……。
「フラッと姿を消すクセ、いつになったら直してくれるんだよ……」
「えー？ ちゃんと涼介のところに戻ってくるんだからいいでしょ、別に」
俺を振り回すのがよっぽど楽しいんだろうか。スキップをするように一歩前に踊り出て、オレンジ色に焼けたアスファルトの上に影を弾ませる。
「ん〜……じゃあ、いつこだけ教えてあげる」
一歩先を歩いていた透子は、くるっと振り向いて。
「明日の応援合戦、楽しみにしててよ」
楽しそうな微笑みを浮かべながら、そう言った。



ついに迎えた、体育祭当日。
天気も快晴、絶好の運動日和だ。
「みんな、絶対勝つわよ！ 白組を倒して勝利を掴むのは、あたしたち赤組よっ！」
目の前には、いつも以上にやる気に燃える瀬川の姿があった。

こういうイベントに燃えるのは、何とも瀬川らしい。
「ちょっと日野、聞いてるっ！？ あんたのこと頼りにしてるんだから、しっかりしてよねっ！」
「大丈夫、ちゃんと聞いてるって」
「透子が敵だからって、手を抜くんじゃないわよ!？」
そう。
今回の体育祭、俺と透子は敵同士。
公平を期すためか、学年ごとにクラス代表がくじ引きをして、組分けが行われた。
その結果、俺のC組と透子のE組は、赤組と白組に別れてしまったのだ。
「俺と透子が直接勝負するわけじゃないし。手を抜いたりなんてしないよ」
「どーだか。『ねー涼介、あたしのために負けてくれない?』なんて言われたら、あんた負けそうだもん」
ふんっ、と鼻を鳴らす瀬川。
俺は瀬川から、どれだけ透子に甘い男だと見られてるんだろうか……？
「心配するなって。しっかり勝利に貢献するから」
「頼むわよ。あんた、足速いんだから」
俺の出場する予定競技は、100m走・200m走・800mリレー・部活委員会対抗リレーの4つ。
加えて、男女別選抜対抗リレーにも出る予定だ。最大5つの競技に出ることが出来る規定だから、俺は上限いっぱいまで走ることになる。
「はあ……憂鬱だわ」
隣で溜め息を吐く鳴沢。
運動が得意ではない鳴沢は、この世の終わりを迎えたような表情をしている。
「どうしたんだよ、暗い顔して」
「日野くんはいいわよ、運動が得意なんだから。私の気持ちなんて、一生わからないんだわ」
「参加することに意義があるって言うだろう？」
「私は参加すること自体に意義が見出せないのよ……」
どこまでもネガティブな鳴沢。
きっと昨日の夜は、心から雨を願っていたんだろう。
「任せとけて。鳴沢の分まで、俺が挽回するよ」
「お願いするわ。私は出来るだけ目立たないようにするから」
「こら、そこのふたりっ！ イチャイチャしてる透子にチクリわよっ!？」
「せ、瀬川さん！ 別にイチャイチャなんてしてないでしょ!？」
「甘いこと言ってるんじゃないわよっ！ 出るからには絶対に勝つつもりで走りなさいっ！」
「うう……だからイヤなのよ、体育祭なんて……」
瀬川の気合いに気圧される鳴沢。
最低でもひとつは競技に参加しなければいけない規則だから、鳴沢も相当悩んで競技を決めていた。
「借り物競争なら勝ち目あるわよ。頑張って、律佳!」
「ピリにならないように頑張るわ……」

瀬川が励ますも、鳴沢のテンションは上がらない。
せっかくの体育祭だ。
みんなが楽しめるように、俺たちが頑張って、どうにか勝たせてあげたい。
『間もなく、開会式を始めます。生徒の皆さん、グラウンド中央に集合してください』
「お、始まるみたいだな」
開会式の始まりを告げるアナウンスが流れる。
今日一日、最後までしっかり頑張ろうと心に誓いながら、グラウンドに歩みを進めた。

「や。涼介、調子はどう？」
開会式を終えて、いよいよ競技が始まるという時。
透子が俺のところに来て来た。
「おう。絶好調だ」
「それはそれは、私もね、今日は調子いいみたい」
勝負事にこだわる透子のことだ。
思いっきり負けず嫌いを発揮してくるだろう。
「チームは敵同士だけどさ。涼介のカッコいいところ、たくさん見せてね？」
「はは、期待に応えられるように努力はするよ」
「うん。私も活躍して、涼介にいいところ見せなきゃ」
「張り切るのはいいけど、ケガだけはするなよ？」
「ありがと。涼介もね」
笑い合って、拳を軽く突き合わせる。
お互いに気合は十分だ。
「ね、どっちがたくさん勝てるか……勝負しよっか？」
「一着をたくさん取った方の勝ち、ってことか？」
「そう。それで、負けた方は勝った方の言うことを一日何でも聞くの」
「へえ、自信あるんだな？」
「まあねー。部活荒らしの雪村さんの力を存分にらせてあげよう」
ふふん、と不敵な笑みを浮かべる透子。
俺だって、彼氏として情けない姿は見せられない。
「いいぞ、わかった。全勝して、一日俺のメイドさんとして透子を雇ってやるからな」
「あははっ！ それじゃあ私は、涼介のことを一日執事として雇っちゃおうかな」
それはいつもとあまり変わらない気がするけど。
とにかく、これで負けられない理由がもうひとつ増えたわけだ。
「それじゃ、また後でね。あ、そうそう。お昼ごはんは一緒に食べよ？」
「おう、また後でな」
手を振って、透子と別れる。
『第一種目、100m走を開始します。出場する生徒の皆さん、選手控え場所に集合してください』
さあ、そろそろ開幕だ。
思う存分、活躍してやろうじゃないか！
『現在の途中経過を発表します。赤組182点、白

組191点。白組が僅かにリードしています」
「うそっ!? ちょっと、負けちゃってるじゃない!」

「でも、ほとんど差はないからな。大丈夫、次で逆転は十分に可能だろ」

「あたしも日野も一着だったのに……。白組もなかなかやるじゃない」

短距離競技を消化した時点では、俺たち赤組の劣勢。

次の競技は、午前中の山場・借り物競争だ。
「頼んだわよ、律佳! 前半戦の折り返しをリードで迎えられるかどうか、あんたにかかっているんだから!」

「わ、私に期待しないで! 篠崎さんの方がきつといい結果を出してくれるわよ!」

「もう、仕方ないわね……真里花一! ちょっと、真里花一!」

「どうしたの、瀬川さん?」

瀬川に呼ばれた篠崎が駆け寄ってくる。

ちなみに、篠崎も同じ赤組の仲間だ。

沖原先輩と逢坂、秀一の三人は、透子と同じく白組のメンバーとして参加している。

「真里花、絶対に勝つよっ! 期待してるからね!」

「が、頑張るよー……」

「律佳も、いい!? 借りる物で迷ったら、あたしのとこに来て! 何とかしてあげるわっ!」

「わ、わかったわ」

「さあ、行ってらっしゃいっ!」

元気良くふたりを送り出す瀬川。

短距離に出て疲れてるだろうに、勝つために全力を尽くす姿は、すごく輝いていた。

「日野も協力してよね。あ、そういえば……他のみんなも出てるのかしらね?」

沖原先輩も逢坂も、短距離競技には出ていなかった。

ということは、この借り物競争に出てくる可能性は十分に考えられる。

「かもな。みんな一緒に棒で勝負になったら、面白いことになるんじゃないか?」

「あ、それ見たいかも」

四人の中だと……逢坂が一番早そうかな。

毎日望遠鏡を持って、屋上まで昇り降りしているその脚力は、意外と侮れないだろう。

それに、小さな身体ですばしく動く動きそうだし。

「日野、始まるわよ!」

「鳴沢は……三組後のスタートか」

不安そうに俯いている鳴沢を見つめる。

その隣にいるのは……篠崎と、沖原先輩、逢坂。

「ホントにみんな一緒にレースじゃない」

「これは見ごたえがありそうだな」

「っ!? ちょ、ちょっと! そらの隣、見て!」

「え?」

逢坂の隣。

そこにいるのは——透子っ!?

「どうして透子も一緒になのよ!?!」

「し、知らないって! 俺、透子がどの競技に出るのか教えてもらってないんだよ!」

透子は100m走にも出場して、見事に一着だった。

陸上部から勧誘の手が緩まないのも納得の走りを見せていたが、まさかここでも出てくるとは……。

「短距離に出てたから、完全に油断してたわ……!」
「まだ勝負はわからないだろ。借り物競争は、足の速さだけで決まるもんじゃない」

「そ、そうね。あたしたちも全力でサポートしましょ!」

瀬川と話している間に、前の二組がレースを終える。

次は、いよいよ鳴沢たちの番だ。

「位置について、よーい——スタート!」

スターターの掛け声が響く。

同時に、透子が一步抜け出した。

「速っ!? ちょっと、透子メチャクチャ速いじゃないのっ!?!」

同じ短距離競技に出ている瀬川は、透子の走りを見ていなかったんだろう。

瀬川が驚いている間にも、透子はグングン後ろを離していく。

そして、あつという間に借り物を指定する紙が用意されている机の前に到着していた。

「あの紙って、何が書いてあるのかしら」

「定番モノだと、バットとかメガネとかそのあたりだろうけど。確か、あれ仕切ってたの秀一なんだよな……」

どうせ妙なネタを仕込んでるに違いない。

前の組も、指定された借り物を探すのに結構苦労してたみたいだし……。

「ん? 日野、透子こっちに来るわよ?」

一直線に俺と瀬川のところに走ってくる透子。

「涼介、来て!」

軽く息を切らせながら、透子は俺の手を掴む。

「は? お、俺? 何で……うわっ!?!」

透子に手を引かれて、走る。

俺の走る速さを透子も理解しているからだろう、遠慮なく全力でゴールを目指していた。

「わー! ふたりとも、はやーい!」

「あいつら、借り物競争でも一緒かよー!」

耳に届く黄色い歓声。

俺たちのことは、学園内でも有名であることは自覚しているけど。

全生徒の前で、これはさすがに……恥ずかしい。羞恥心を感じながらも走り続けて、俺たちは指定されたレース復帰ポイントに辿り着く。

「涼介、抱っこ!」

突然、両手を伸ばして俺を求める透子。

「は、はあっ!?!」

「早く! お姫様抱っこ!」

わけも分からず、透子の首と膝裏に手を誘導される。

これのどかが借り物競争なんだよっ!?

「早く早くー! みんなが追い付いてきちゃう!」

「ああもう、どうにでもなれっ!」

急かされるまま、透子の身体を勢い良く抱え上げる。

「きゃー! すごーい、何あれー!」

「いいなー、お姫様抱っこ! 羨ましーい!」

同時に、歓声が最大ボリュームに。

こんなことをすれば、どうなるか。

考えるまでもなく、こういう結果になる。

もう羞恥心も何もあったもんじゃない……!

「涼介、行けー! このままゴールにダッシュ!」

「おうっ!」

自然と首に巻きつく、透子の腕。

慣れ親しんだ重みを抱えて、ゴールを目指す。

周囲の黄色い声援に包まれながら、ふたりで一緒にゴールテープを切った。

「おめでとう、おふたりさん。こっちに並んでね」
案内係の行事委員女子が、ニヤニヤと俺たちを迎える。

好奇の視線に思いつき晒されて、ゴールして冷静になった俺は、いたたまれない気持ちだった。

「おい透子、何なんだよさっきのは……」

「だって、紙に書いてあったのこれなんだもん」

俺の目の前にヒラリと紙を突き出す透子。

透子の引いた、借り物を指定する紙。

そこには『好きな人のお姫様抱っこ』の文字が。

「……これ、透子の字じゃないか……?」

「いやー、偶然偶然。自分で用意した紙を引いちやうなんてねー」

「ウソ吐け、絶対仕込んだらろっ!?!」

「さー、どうでしょう?」

ペロリと舌を出して、イタズラっぽい微笑み。

気付けば、行事委員の面々が『してやったり』という笑顔で俺を見ていた。

「お、お前ら……全員グルかっ!?!」

「七夕祭りの時のお返しで一す。私に隠しごとした涼介に、サプライズプレゼント♪」

……見事にしてやられた。

準備の時、秀一と協力してやたらと積極的に動いてたけど、こういうことだったのか……。

★ ★ ★

「さへて、お昼お昼〜♪」

順調にプログラムを消化して、昼食の時間。

涼しくて人気のない場所に移動して、借り物競争からずっとゴキゲンなお姫様と並んで弁当箱を広げる。

「今日のためにすっごい練習してきたんだよ。涼介、たくさん食べてね?」

今日の昼食は、俺と透子の合作だ。

お互いに準備してくるメニューを決めて、弁当を持ち寄った。

「いや、それにしても……」

透子の弁当箱には、大量のから揚げ。

全部食べたなら、確実に胸焼けしてしまう量だ。

「美味しくできたんだよ? おにぎりもね、愛情込めてたくさん握ったから。全部食べてね?」

「……お、おう」

いつもより大きめの弁当箱。

張り切るのはいいんだけど、限度がある。

昼からも出場する予定の競技はあるんだし、加減しておかないと……大変な目に合いそうだ。

「はい涼介、あーん」

「は……?」

「ほら、あーん。美味しいよ?」

当たり前のように、口元に運ばれるから揚げ。一口サイズに切り分けられていて、見た感じはすごく美味しそうだ。

「……あーん」

求められると、応えてしまう。

透子のペースにすっかり慣れてしまった自分がちょっと恐ろしい。

「どう、美味しい?」

「ん、美味しいよ。味もすっかりついてるし」

「やったー! うんうん、大成功だねー!」

夏休み中の修行の成果だろう。

ひとりでも隠れて練習していたらしく、文句のつけようもない仕上がりがだ。

「それじゃ、次はおにぎりだよー。はい、あーん」
今度はおにぎりが口元に運ばれる。

まさか、これ全部食べさせられるんだろうか……?

「……あーん」

ここで拒否すると、せつかく成長している透子

の努力を否定することになってしまう。

それは俺の本意ではないし、努力の成果を認めあげなきゃいけないところでもある。

「具は梅干しと昆布、それから当たりも作っておいたんだけど。中身、何だった？」

「……から揚げ」

「あ、それ当たりだー！ いきなり当たりなんて、涼介運がいいねー！」

メインのおかずから揚げなのに、何でおにぎりの具もから揚げなんだ……。

バランスを考えない、透子らしいチョイスだった。

「ねー、今度は私の番だよー？」

「はいはい、何が食いたいの？」

「卵焼きー！」

瓜楊枝で切り分けた卵焼きをひとつ突き刺して、透子の口に運んでやる。

今日の卵焼きは甘さが絶妙な仕上がりで、ちょっと自信作だったりする。

「んー、美味しい！ さすが涼介、上手だねー！」

「だろ？ 今日のは特に上手くいったんだよ」

「おにぎりの具は何かなー、楽しみ楽しみー！」

当たり前のように、口を開けておにぎりを待つ透子。

「まったく……おにぎりな。ホラ」

リクエスト通り、おにぎりを食べさせる。

透子に合わせて、小さめに握っておいて正解だった。

「ん、しぐれだー！ 私、これ大好きー！」

「そうか、そりゃ良かった」

「次はミートボールがいい！ 早く早くー！」

楽しそうにはしゃぐ透子。

ふと、旧館で弁当を食べていたことを思い出す。

こうしてお互いに食べさせあって、俺たちは甘い時間を過ごしていた。

懐かしくなって、思わず笑みがこぼれる。

「ん、どうしたの？」

「いや、ちょっと前のこと思い出してさ。旧館で一緒に弁当食った時のこと」

「あはは、懐かしいね。そういえば、あそこでも同じようなことしてたっけ」

早いもので、透子と出会ってからおよそ3ヶ月。透子と一緒に過ごす毎日は、今までにないくらい時間の流れを加速させていた。

「きつと、すぐ冬になって……新しい年を迎えて。春になって、夏が来ても……私、涼介と同じことしてると思う」

「俺たち、ずっと食べさせあってるのか？」

「そうだよ？ お腹が空いたら、いつでも涼介の隣に行くんだから」

幸せそうな透子の笑顔がくすぐったい。

作った弁当の味も、それだけで何倍も美味しくなる。

「ほら、早く食べなきゃ時間なくなっちゃう！ ミートボールー！」

「わかったわかった、引っ張るなって！」

透子のおねだり攻撃は続く。

昼休みの時間ギリギリまで、俺たちはこのままふたりきりの時間を楽しんだ。

★ ★ ★

午後からも、プログラムは滞りなく進んで。最終競技となる、男女別選抜対抗リレーのひとつ前。

体育祭の目玉、赤組・白組それぞれの応援合戦

だ。

「さあ律佳、真里花！ 行ってらっしゃい！ 審査員に思いっきり愛嬌振り撒くのよ！」

「イヤよ！ 出来るだけ目立たずに終わらせたいの！」

「うー……恥ずかしいよー……」

俺と瀬川は高見の見物。

この後のリレーに出るための準備もあるし、ここは他のメンツに任せることになっていた。

そして、その中には篠崎と鳴沢の姿が。

「ふたりとも、似合ってるぞ？」

「どこがよ！ 褒められても全然嬉しくないわ……」

応援団らしく、学ラン姿のふたり。

ちょっとサイズが大きめなところがフェチっぽい。

「わたしより瀬川さんの方が絶対似合うのに……」

「なに言ってるの。真里花みたいな娘が恥ずかしがりながらやっているとポイント高いんだから」

瀬川の嗜好は男目線での射っていた。

鳴沢のファンも、今頃喜んでいることだろう。

「たくさん写真撮ってあげるからね、ふたりとも！」

「「やめて！」」

赤組応援団員の息はビツリだった。

顔を真っ赤にした篠崎と鳴沢が戻って来て。

続いて、白組の応援が始まる。

「楽しみにしててって、これのことだったのか……」

俺の視線の先には——チア姿の透子。

「彼氏様、顔がニヤけてますわよ？」

「う、うるさいっ！ 仕方ないだろうっ！」

瀬川に肘でつつかれる。

予想通り、瀬川の顔には意地の悪い微笑みが浮かんでいた。

「まあねー。可愛いもんね、チアガール」

「……瀬川、頼みがある」

「はいはい、何かしら？」

「ベストショットを頼むぞっ……！」

「あははっ！ オッケー、任せときなさい！」

カメラ片手に駆け出す瀬川。

頼りになる友人の背中を見送って、再び透子に注目。

「白組一、ファイトー！」

「絶対勝つぞー！」

短いスカートで翻して、元気良く飛び跳ねる。

ボンボンが青空に映えて、花が咲いたようだ。

「わたしもあつちがよかったな……」

「そうね、どうせならチアの方がマシだったわ……」

「あ、あそこに逢坂さんがいるよ！ 可愛いー！」

「沖原先輩は……何て言うか、反則ね……」

友人たちの姿を見つけて、一喜一憂。

そんな中、俺の視線はずっと透子の姿を追いかけ続けていた。

「雪村さんは……どうなのかな、日野くん？」

「はっ！？ な、何で俺に聞くんだよっ！？」

「日野くんが答えなきゃ、意味ないじゃない」

篠崎も鳴沢も、楽しそうに微笑む。

ようやくこっちの番だ、と言いたそうに俺を見つめていた。

「雪村さんも、一番褒めてほしい人にキチンと褒めてもらいたいでしょー！」

「うん、そうそう。日野くんの感想は、私たちがちゃんと雪村さんに伝えてあげるから」

「い、いって！ どうせ後で本人にしつこく聞かれるから！」

ふたりにからかわれながら視線を透子に戻すと、ふと目が合った。

ジッと俺の方を見つめて、ボンボンを振りながら、笑顔でボンボン飛び跳ねる透子。

「あ、雪村さんがこっち見てるよ？」

「こっち……というか、日野くんを見てるわね」

……めっちゃくちゃ恥ずかしい。

俺が視線を感じるだけなら、勘違いかもしれない。

篠崎と鳴沢もそう感じてるってことは……自意識過剰というわけじゃないんだろう。

しかし、正直言って——すごく可愛い。

透子によく似合う、健康的な色気のチア服。

……あの衣装、体育祭が終わったらどうするんだろう。

できれば、個人的にじっくり見たい。

「いいなあ、羨ましい」

「え？」

篠崎の言葉で我に返る。

「雪村さん、最近どンドン可愛くなってよ。きつと日野くんの影響だよ」

「俺、別に何もしてないぞ？」

「もー、ダメだよ？ 女の子の努力にはちゃんと気付いてあげないと」

篠崎の言葉に鳴沢も無言で頷く。

女の子には理解できる何かがあるらしい。

「きつと今も、日野くんのために頑張ってるんだから」

「そうね。白組の応援というより、日野くんの応援をできるように見えるわ」

「ふふっ、だよ」

恥ずかしさと嬉しさが混じりあった気持ち。

声に出すのは難しいから、せめて心の中で感謝と喜びの想いを告げる。

ありがとう、透子。

★ ★ ★

最後の競技、選抜対抗リレーも終盤を迎えていた。

抜きつ抜かれつの大接戦で、盛り上がりも最高潮だ。

「今のところは……こっちがリードしてるな」

俺たち、赤組の作戦。

選抜メンバー内の特に速い選手を中盤に入れて、先にリードを稼いでおく。

終盤はリードを守って逃げ切るというプランだ。

「……そろそろ出番か」

そして、何の因果か。

俺はアンカーを任されてしまった。

少し緊張しながら、スコアボードを見る。

現在の得点は、赤組305点、白組329点。

このリレーに勝てば、赤組は見事逆転勝利を取める。

これは……責任重大だ。

「よう、調子はどうだ？」

「お前が相手だもんな……」

隣——白組のアンカーは、秀一。

本当にどういう組み合わせなんだ。

「涼介には悪いが、ウチが勝つぞ」

「サッカーやってた時、短距離だとお前に勝てなかったからな。今度こそ、俺が勝つ」

「アホ言え、そう簡単に負けるか。雪村の前で恥かかせてやる」

自信満々に微笑む秀一。



事実、秀一は強敵だ。
それに、リードを守りきるプランもちょっと危
うい。
中盤で稼いでおくはずだったリードが、予想よ
りも少ない。
およそ1、2秒のリードとあったところか。
「この分だと……俺がちよっと早くスタート——
あっ！」
脚がもつれたのか、赤組の選手が転倒する。
少しだけあったリードは、あつという間に失わ
れて、白組が前に出た。
転んだ選手も、すぐに立ち上がって追いかける。
が——差は縮まらない。
「おし、もらったっ！」
白組の選手が目前に迫る。
秀一がスタートを切って、バトンを受け取った。
「っ……赤組は……？」
赤組の選手も遅れてすぐに飛び込んできた。
テークオーバーゾーンをギリギリまで使うた
め、少しだけ早めにスタートを切る。
「すまん日野、頼むっ！」
「任せろっ！」
後ろ手にバトンを受け取り、ギュッと握り締め
て。
前を見上げて全力で駆け出した。
「はっ……はっ……！」
秀一の背中が、まだコーナーに差し掛かる前。
アンカーは他の選手よりも少し長い距離を走る
から、これならまだ何とか追いつけるはず……！
腕を思いっきり振って、背筋を伸ばして。
大きなストライドで、走る。
「はあ……はあ……くっ……！」
思うようにスピードが上がらない。
少しずつ差は縮まってる。
でも、このままじゃ——捉えきれない。
コンマ数秒、足りないだろう。
午前も午後も、レースばかり出てたから。
身体の疲れも溜まっていて、脚が重く感じる。
差が詰まらないままコーナーを駆けていた、そ
の時。
「頑張れ、涼介っ！」
「カッコいいとこを見せてよっ！」
確かに聞こえた。
俺を後押ししてくれる、透子の声。
「っ……！」
視線の先に飛び込んでくる、透子の姿。
白組応援団のチア衣装のまま、俺を応援してく
れた。
「負けられる……かあっ！」
重かった脚が、ふっと軽くなる。
力強くグラウンドを蹴って。
グッと身体を前に押し出す。
透子にカッコ悪いところ——見せられない！
「うおっ!? 涼介っ!？」
「はあっ、はあっ……！」
ゴール前、最後の直線。
秀一を捉えて、一気に横に並ぶ。
あと一歩、前へ——！
「ゴールっ！」
グラウンドは、今日一番大きな歓声に包まれた。
「よくやったわ、日野っ！ エライっ！」
「すごかったよー！ ゴール前、ぐんって早くな
ったよね！」
リレーを終えた俺は、赤組の控え場所に戻る。
瀬川、鳴沢、篠崎が笑顔で迎えてくれた。

「おうっ！」
赤組の仲間たちの祝福を受けて、俺も笑顔を返
す。
最高に気持ちのいい、大逆転勝利だった。
「さすがね。雪村さんの応援が効いたのかしら？」
「ああ。あれがなかったら、負けてたかもな」
「……そこまで言い切られると、何も言えないわ」
「ホントね。イジリ甲斐がないわよ、全く」
鳴沢と瀬川の呆れた顔。
それすらも祝福に受け取れるほど、今の俺には
勝利が心地良かった。
『両組の最終結果を発表します。赤組355点、白
組329点。優勝は——赤組です！』
「やったあーっ！」
歓声が響き渡る。
ハイタッチをして喜びを分かち合う中、俺たち
もその輪に加わる。
俺が汐風に戻ってきて初めての体育祭は、こう
して幕を閉じた。

★ ★ ★

「あ〜、疲れた疲れた〜。お疲れさまだね〜」
「透子、大活躍だったもんね」
片付けを終えて、ふたりっきりの帰り道。
透子と互いの健闘を称え合い、笑顔を向け合う。
「それで、勝負の話だけどさ。私の勝ちだよ」
「ぐ……」
赤組の勝利で終わったもの。
出場競技での勝利数は、俺よりも透子の方がひ
とつだけ上回っていた。
「くっそー、800mリレーは先行されてなけりゃ
勝ってたはずなんだよ……」
「リレーは仕方ないよ。涼介ひとりの力じゃどう
しようもないんだし」
「……さては透子、それも見越して個人種目に絞
って出場したな？」
「あ、バレちゃった？」
透子は、チーム戦の種目を避けていた。
出場競技を事前に教えてくれなかったのも、作
戦のうちだったというわけだ。
「こうすれば、涼介との勝負にも勝てるかなって
思ったからね。ふふっ、私の作戦勝ちだよ」
「ったく……敵わないな」
勝ち誇ったように微笑む透子に、白旗を掲げる。
試合に負けて勝負に勝つとは、このことだ。
「それじゃ、涼介には一日私の言うことを聞いて
もらうからね？」
「はいはい、わかりましたよ」
「さっそく明日、使っちゃおっと。涼介のお家に
遊びに行くから、マッサージよろしくね」
ゴキゲンな様子で、明日のスケジュールを話す。
体育祭の予備日として割り当てられていた休日
は、どうやら透子のワガママに付き合う一日にな
りそうだ。
「お昼からはお出かけしよ？ 行きたいところ
があるから、付き合ってもらわなきゃ」
「ホントにこき使うつもりだな……」
夕暮れの陽射しの中、笑顔を浮かべる透子。
嬉しそうに微笑む透子の顔が見れるなら、それ
も悪くはない。
「ねえ、それでさ。私のチア服、どうだった？」
「メチャクチャ可愛かった。あのチア服って、後
でもらえるのか？」
「うん。手芸部の人がね、欲しければどうぞって。
せっかくだから、もらってきちゃった」

「……明日、着てくれない？」
「あははっ！ そっか、気に入っちゃったんだ？」
「気に入ったって言うか、グッときた」
「あ、今エッチな顔になったー。そういう人には
見せてあげませーん」
緊い手はバツと離して、逃げていく透子。
クルッと飛び跳ねながら逃げる姿が、今日のチ
ア姿を思い起こさせた。
「い、いいだろっ!? 健康的な可愛さって言う
か、その……！」
「うん、嬉しいよ。涼介が喜んでくれるかなって
思ったから、応援合戦に出たんだもん」
「え？」
「みんながね、私が出るって聞いて……ビックリ
してた」
「……そっか」
「練習も楽しかったんだよ。こうやってね、跳び
ながらクルッと回るところが意外と難しいんだ」
本当に楽しそうに告げる透子の表情は、とても
満たされているように感じられる。
「……篠崎と鳴沢の言う通りだ」
「何それ？ お花ちゃんとピアノちゃん、何て言
ったの？」
「ヒミツだ。透子に教えないように、後でふたり
に口止めしとかないとな」
「あー、ひどーい！ 仲間はずれだ〜！」
スルリと指を絡めて、手を繋いできた。
ついさっき逃げていったかと思えば、今度はビ
ックリ擦り寄ってくる。
「そんなことしたら、キライになっちゃうんだか
ら」
「それは困るな。じゃあ、ふたりに上手くごまか
しといてもらわないと」
自由奔放な透子に、振り回される日々。
それが楽しくて、仕方がない。
「いいよーだ。それなら、カメラちゃんに今日の
写真は涼介に渡しちゃダメって言っちゃうから」
「はっ!? それは卑怯だろっ!？」
「ふんっ！ 知ーらないっ！」
笑いながら、俺の手を引く透子。
しっかりと手を握り合いながら、俺もついて行
く。
「応援合戦の時にさ。透子が応援してるのって、
本当に白組なのかなって言われたんだよ」
「ああ、そういうこと。ふふっ、涼介はしっかり
気付けてくれたでしょ？」
臉にしっかりと焼き付いている。
キラキラと輝く、俺が大好きな透子の笑顔。
「私が特別な応援するのは、涼介だけだよ。涼介
が落ち込んだ時は、いつでも応援してあげるから
ね」
「その時は、今日のチア服着てくれよ？」
「あははっ！ んー、そうだね。気が向いたらね」
いつものように、透子はイタズラっぽい微笑み
を浮かべる。
一生の思い出に残るこの夏も、そろそろ終わり
だ。
透子と一緒に過ごすこれからの季節を、少しだ
け想像しながら。
手を繋いで、俺たちはゆっくと帰路を歩いて
いった。

END

Chapter

★
2

After Part

Sora Ousaka

Marika Shinozaki

Natsuki Segawa

Misa Okihara

Rikka Narusawa

Touko Yukimura



10年もつきあっていれば当然。
リヨウの性格はほぼ完璧に把握している



School

School編では髪留めをしていたそら。After編では独立後、初めての報酬を得た涼介がホワイトデーのプレゼントとしてそらに贈った「星のイヤリング」を付けている。



After

SORA
School and After

星の魅力を伝えるナビゲーター

逢坂そら

OUSAKA SORA

CV: 桐谷華

職業	プラネタリウム職員	誕生日	1月5日
身長	152cm	体重	43kg
スリーサイズ	76 (A) / 57/80		
血液型	O型	原画	武藤此史

学園卒業後、市立科学博物館の中にあるプラネタリウムで解説員として勤務中。星の魅力を多くの人に伝えるという自身の夢を叶えた。施設の老朽化に伴って来場者が減ってきていることが最近の悩みらしい。涼介との結婚に備えて母親から料理を習ったりもしている。

Expression Collection



After



スーツ



私服



裸



★SORA After Story

そらと涼介が付き合い始めて、10年の月日が過ぎようとしていた。涼介は大学を卒業後、我妻盛夫の事務所へ入社して資格を取り、実績を重ねて独立することが決まっていた。一方、そらは学芸員の資格を取得し、市立科学博物館の中にあるプラネタリウムでナビゲーターをしていた。そらが提案したプログラムは好評でプラネタリウムの主任候補に挙

がるまでになっていた。そんな中、科学博物館の老朽化に伴い閉館が決定し、建て直しのコンペが開催される事になる。その話をそらから聞いた涼介は、主任を目指すそらに自分の設計した新しいプラネタリウムで働いてもらいたいと思う。こうして、そら、涼介共々確固たる想いを胸に、お互いを助け合い目標へ向かって進んでいく。



★ ★ ★ 大吉 ★ ★ ★



全体的に人運に恵まれている。ここ1番という所で勝負に出ると良い。失敗したと思ってもそれは思わぬ形で成功への鍵になる。問題無い。

- ☆☆ 計ろ。
- ☆☆ 来る。
- ☆☆ 見つかる。
- ☆☆ 新しい出会いがある。
- ☆☆ 望む結果が出る。
- ☆☆ 思いがけない収入がある。
- ☆☆ 隅の沈む方向が良い。
- ☆☆ 問題無い。

そらのひとこと

大吉、今度は良いことがありそう。万事問題無い。大吉と書けば幸せと信じて、他にも幸せの星という物がある。身近なものだ。2-3年に1回1ヶ月の間に2度満月になる事をフルムーンといったら半世紀になれるという。他にもいろいろの一等星、カノープス。中国では南極老人星と呼ばれて七福神の青老人に繋がる星。長寿を招く縁起物の星でもある。あと……(止まらなかったため削除)





あ…あ…ずるい…
 背中を流しっこするだけって…言ったのに…
 んくうう…

10月24日

●そらのお風呂エッチ

我妻建築事務所からの独立まであと一週間となった涼介。引き継ぎや独立の準備で忙しい中、久しぶりにそらとの時間を過ごせることに。一緒にお風呂へ入ったふたりは会えない間に溜まった欲求不満を爆発させる。

【そら】「あぁっ…気持ち…いい…気持ちいい、よ…あぁっ…はっ…ふうっ…おまんこっ…気持ちいいっ…！」

突き入れるたびに、そらの口から大きな悦びの声が漏れる。

【涼介】「そら…今日はすいぶん声大きいな。久しぶりだから興奮しちゃってるんだろ…？」

【そら】「んう…ちが…違う…お風呂場だから、反響してるだけ…あんまり大きな声を出すと、隣の部屋にも聞こえてしまう…我慢しないで…んんんっ…！」



11月13日

●ふたりで温泉

そらの有給が取れたので温泉旅行へと向かうことに。混浴の温泉に浸かりながら、最初に出会った時の思い出と共に、月の話をするそら。久しぶりにゆっくりと流れる彼らの時間は大切な1ページを新たに刻んでいく。

【涼介】「月か…そういえば、初めてそらに天体望遠鏡を覗かせてもらった時も、月を見たんだよな」

【そら】「…コクリ」

【涼介】「あの時は、生で月のクレーターが見られて、メチャクチャ興奮したなあ…あの感動は、今でもよく覚えてる。たぶん、一生忘れないだろうな」



…じゃあ、月の話、もっとする？



追い詰められたうさぎは、なにもできない。
…だから、オリオンがしたいことをしていい…



【涼介】「じゃあ、どうして欲しいか言ってくれ。お尻を振りながら」
【そら】「く…う…——…い、れて…ほしい…」
そらは目を細め、恥ずかしそうに続ける。
【そら】「…ここに来た時から、うずうずしていた…。この服に着替える前から、下着は濡れていた…。エッチなウサギは…ずっと発情している…」
【涼介】「やっぱり、もうエロモードか」
【そら】「…コクリ。…すぐにリョウのがほしい…ほしくて、たまらない…だから…早く入れて…」

02月03日

●バニースーツ姿のそら

独立後、師匠に紹介された初めての仕事を無事終わらせた涼介へのご褒美として、そらがバニースーツを持って事務所へとやってくる。恥ずかしがりながらも感じ始めてしまった彼女に対して、涼介は言葉で責め立てていく。





どうしよう…聞かれちゃう…私たちの声…
エッチな声…全部…聞かれちゃうかもしれないのに…
でも…もう我慢できない。



11月23日

● 浴衣姿のそらを後ろから

師匠の出した難題もクリアし、そらの悩みも解決させた涼介。次の目標である、そらの働く科学博物館のコンベに向けて鋭気を養うために温泉へ行くことに。恋人ふたりの時間は濃密なバトスに満ち溢れていく。

【そら】「…お尻…当たってる」

【涼介】「ん？ ああ…」

【そら】「…熱くて…もう硬くなってる…」

【涼介】「おう…そらとエッチするときは、いつもギンギンだけ」

【そら】「…私は、リョウとエッチするときは、いつもドキドキする。もう何度もしてるのに…」

03月19日

● プロポーズで涙を流すそら

科学博物館のコンベを勝ち抜き、自分のデザインした博物館でそらが働くという夢を確定させた涼介。その日の夜、すべての始まりとなった母校の屋上にそらを連れて行き、涼介は星空の中で彼女にプロポーズをする。

【涼介】「…逢坂そらさん、俺と結婚してください」

【そら】「……………」

【涼介】「これまで、ずっと恋人として過ごしてきた。でも、これからは結婚して…人生を一緒に歩んでいきたい。すっげー待たせて、ごめんな」

【そら】「…ふるふる」



私…、私でよければ
…ずっと…リョウの側にいたい。…たいです。



幾星霜変わることのない星々のまたたきと同じように、私の愛も変わることはない。
永遠に：この想いはあなただけのもの。
幸せをありがとう。

09月13日

●ハワイでの結婚式

科学博物館が改装のため封鎖され、建築が終わるまでの3年間、そらは大学で講師をすることに。大学が始まるまでの夏休みの間に、ふたりはハワイで結婚式を挙げる。そこで永遠の愛を誓い、共に人生を歩み始める。

【涼介】「そら、綺麗だよ」

【そら】「…真面目な顔で言われると照れる」

【涼介】「本当の事だからしょうがないだろ」

【そら】「…リョウも…すごく格好いい」

【涼介】「…真面目な顔で言われると照れるだろ」

【そら】「本当の事だから、仕方がない」



エピソード

●マウナ・ケアの山頂で星を見るふたり

式を終えた涼介とそらは、もうひとつの目的であったマウナ・ケアの山頂へ向かう。そこで見る満天の星空に涙するそら。圧倒する星空の下、ふたりは互いの存在を確認する。

【涼介】「…よく『満天の星空』なんて言うけど、これがそういうことなんだな」

【そら】「…本当の『満天の星空』…」

すべての星たちが瞬いて見える。漆黒の闇の中、光輝く星座が、古の銀河から俺たちに微笑みかけてくる。俺たちは、自然とお互いの手を握っていた。

【涼介】「ヤバイ…俺、感動して泣きそうだ…」

【そら】「…コクリ。…私はもう泣いてる」

本当にそらは涙を流していた。



たくさんの星の中から、私を見つけてくれてありがとう。
私だけを好きになってくれて……ありがとう。
こんなにも、愛してくれて……ありがとう。

頑張っているのはわかるけど、身体は壊しちやダメだよ？



School

髪型を大きく変えたりはしていないものの、肩にかかるくらいに髪を伸ばした真里花。大人の女性らしさがアップしている。



After

MARIKA
School and After

将来を“やくそく”した幼なじみ

篠崎 真里花

SHINOZAKI MARIKA

CV: あじ秋刀魚

職業	保育士	誕生日	3月3日
身長	156cm	体重	44kg
スリーサイズ	84 (C) /56/86		
血液型	A型	原画	恋泉天音

涼介と同じ大学の教育学部に進学して保育士の資格を取り、現在は地元の保育園で働いている。母性を増したその包容力で、お昼寝の時間にはむずがる子供を相手に大活躍。一人暮らしする涼介を通い妻のように甲斐甲斐しくサポートしている。

Expression Collection



After



私服



裸



私服+バニー耳



★ MARIKA After Story

同じ大学の違う学科に進学した涼介と真里花。涼介は当初からの目標を目指して建築学科を卒業し、その後、我妻盛夫の事務所へ就職する。

一方、教育学部を卒業した真里花は保育士の資格を取得し、現在は地元の保育園で働いていた。共に仕事で忙しい日々を過ごしながらも、ふたりの仲むつまじい関係はずっと変

わっていなかった。そんなある日、一級建築士の一次試験に合格した涼介は、二次試験である製図の試験に合格したら自分と結婚して欲しいと真里花にプロポーズをする。その後、最大の難関と思われた真里花の父からも了承を貰い、試験に合格も果たした涼介たちは、これからの人生を共に歩むため婚姻届に判を押す。



星占のおみくじ

★ ★ ★ 中吉



一年間お疲れさまでしたー！
あなたの来年の運勢はなんと
中吉です！程よい！？
きっと、とってもいい1年を
過ごせると思うな？

- ☆☆ あともう一步！頑張り続けられます！
- ☆☆ うーん…すぐ近くで待っていると、そう思うな？
- ☆☆ 一緒に探せば、あつという間に見つかるよ。
- ☆☆ 天気の良い日に、ピクニックがお勧めだよ～
- ☆☆ 試験や受験はバッチリ。絶対合格です！
- ☆☆ そんなに貯まらないかも…。出費には要注意。
- ☆☆ 狭くても、居心地のいいお部屋がいいと思うよ。
- ☆☆ 小さくても、ほんわかした幸せに気付くかも…？

★ ★ ★ 真里花のひとこと

ふ、普通って言わないで欲しいな～！
「中吉」は大吉と吉に次ぐ、3番目にいい運勢なんだよ！1番には少し足りないけど、その差は、きっと頑張りて埋められるよ。絶対だいじょうぶ！
わたしが保証します！





また…わたしのあそこで、射精して欲しいな…？
 何度でも味わって…何度でも、気持ちよくなって…

07月03日

●不思議の国の真里花

一級建築士の勉強をしていた涼介は、家に来た真里花に起こされ寝ていたことに気がつく。真里花が用意してくれたご飯を食べた後、彼女がお遊戯会の資料で買ったアリスのコスプレをしてくれ、そのままエッチに突入する。

【真里花】「あ…これ…涼介の、せーえき…」
 その指には、俺の精子がついている。

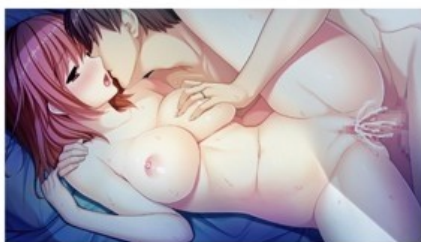
【真里花】「すっごく青臭いよう…なんだか興奮しちゃう…べろっ…」

もう一度、真里花が自分の指を舐める。

【涼介】「出したものをそうやって舐めてるのが、なんだか…すごくエロく感じる」



今日は…エッチ、したいです…
 おちんちんが…ほ、欲しい…です…



07月29日

●新婚初夜

婚姻届を提出し、まだ片付け切れていない新居での新婚生活が始まったふたり。新婚生活のシミュレーションをしているうちに気分が盛り上がり、涼介と真里花は熱い抱擁を交わす。こうしてふたりは記念すべき新婚初夜を迎える。

【真里花】「こんなに、いっぱい…いつも中に出してもらってたら…赤ちゃん作るとき、きっとすぐにできちゃうよね…」

【涼介】「ああ、たぶん」

授かり物だっつのはわかってるけど…俺と真里花の間なら子供なら、すぐにでもできる気がする。

【真里花】「ん、ああ…わたしたちの赤ちゃん、かわいいかな…？」

【涼介】「俺と真里花の子供なんだから、絶対かわいいだろ」

いちばんきれいな格好で…お嫁さんになりたいから。

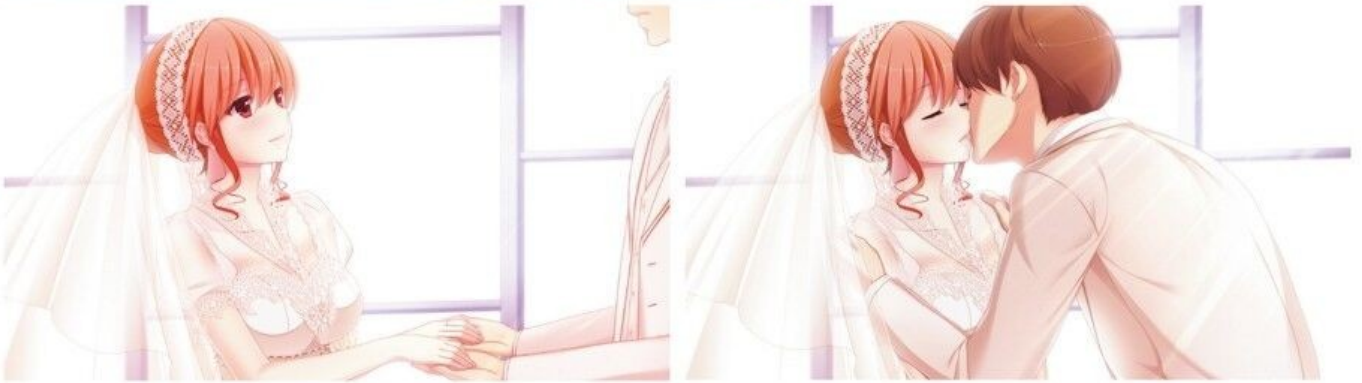


08月04日

●ふたりの結婚式

結婚式当日、昔のメンバーが勢揃いして彼らの前途を祝福してくれた。真里花が読み上げる両親への手紙は感動を呼び、義父・義母は号泣していた。ふたりの想いはひとつとなり、ここから新しく共に歩む人生が始まる。

【涼介】「…真里花。結婚してくれてありがとう」
【真里花】「それは、わたしの言葉だよ。うれしい、よう…」
そっと唇を重ねる。そして、愛を封じ合った。
【真里花】「…………ん…」
この瞬間…俺たちは本当の意味で夫婦になったんだと、そう強く感じる事ができた。



お父さん、お母さん。
大好きな人と、幸せになるね。

【真里花】お父さん、お母さん、わたしを産んでくれてありがとう。お父さん、お母さん、わたしを育ててくれてありがとう。
今日、わたしはお嫁に行きます。お父さんとお母さんがわたしにくれたいっぱいの愛情を胸に新しい家庭を築いていきます。お父さんとお母さんがわたしにくれたこのたくさんの愛を、夫である涼介やそしてこれから生まれてくるであろう子供た

ちに注いで行こうと思います。
お父さんとお母さんが伝えてくれた愛情、幸せな気持ちを、今度はわたしがたくさんの人たちに伝えて行きます。だから旅立つわたしをどうか見守っててください。真里花より。大好きなお父さんと、お母さんへ。
真里花は笑顔浮かべて、だけど子供のようにポロポロと泣きながら手紙を読み終えた。会場があ

たたかな拍手で満たされる。
【浩二】「っ……………ううっ……………ううううっ…」
【由美】「…ぐすっ……………あっ……………」
聞いていたお義父さんもお義母さんもポロポロ泣いている。とくにお義父さんは滴る鼻水も拭えないでいるくらいだ。

★ 見て、ください…わたしの、おまんこ…



【涼介】「いくぞ…？」
割れ目に指を当て、左右に広げてやる。ぱくりと、割れ目が開いた。とろりとそこからは潤滑液が溢れ出す。

【涼介】「すごい濡れてる…奥まで覗けちゃうぞ…？」

【真里花】「あ、ああっ…奥まで、見られちゃってる…よう…あ、あの…あの、あのっ…わ、わたしのあそこ…おまんこ…昔と比べて…もっとエッチになってる…？」

08月25日

●より綺麗でいるために

ムダ毛のお手入れを手伝った後に、一緒にお風呂へ向かうふたり。風呂上がりに真里花は結婚式の時に身につけていた下着を着用し、寝室で涼介を迎え入れる。始めて赤ちゃんを意識したふたりのセックスは何度も何度も絶頂を迎え終了した。



は、はいっ…そ、そのう…
わたしのこと、召し上がれ…

10月07日

●バニーガール真里花

誕生日を祝ってくれると言われ、一目散に帰宅した涼介は、ウサギの耳を着けた真里花の出迎えに驚く。シャンパンに酔ったふたりはエッチをしようということになるが、真里花のバニー衣装は全身分があると分かり……。



【涼介】「今日は誕生日だから、うさぎさんは何でもしてくれるんだろ？」

耳元に囁きながら、乳首をつまんでこね回す。

【真里花】「はう、ああっ…そ、そうだよ…今日は、何でもするよ…何回でもしていいから…いっぱい中に出してね…？ あ、ふうっ…おっぱい、しびれちゃう…んっ、ああ…！」



【真里花】「そこも…おっきくなったお腹も…撫でてくれると、守られてる気がして…なんだか、心地いいよ…。ふふっ…でも、ごめんね…？ いまは、ちょっとだけいい子でいてね…？」
そっと慈しむように語りかける。

【真里花】「んちゅっ…れる、ふはあっ…こ、これから…子供には見せられないこと、しちゃうから…」

おちんちん…ほ、欲しいな…
赤ちゃん、まだ寝てるから…
今のうちに…



03月
●子供には見せられないこと
念願の赤ちゃんが真里花のお腹の中に宿り、早くも7ヶ月が過ぎた。子供の名前を考えながらも、安定期に入った彼女とマタニティセックスに興じる涼介。大きくなった真里花の乳房からは母親の証である母乳が溢れ出す。



エピローグ
●星に願いを
真里花の退院当日、車を借りて迎えに行く涼介。彼女と娘のみらいを乗せて帰途を急いでいると、外の異変に気がつく。車を降りたふたりの目前には、幼い日に一緒に見ようと約束したペルセウス座流星群が流れていた。

【真里花】「それじゃ…これから毎年、こうして家族でペルセウス座流星群を見ようよ。来年も、再来年も、そのまた来年も…」
【涼介】「うん、毎年みんなで見て来よう。“みらい”にも早くこの星空を見せてやりたいな」



…やっと、一緒に見られたね、ペルセウス座流星群。子供のころの約束、これで全部果たせた気がするよ。

日野夏希様、かー
 …この名前、まだ慣れないわね



School

NATSUKI
 School and After

学生時代、肩まであった髪はもう少しで腰に届くほどに。長くなった髪をシュッシュでサッとまとめ、カメラを構える姿はもうすっかりプロカメラマン？



After

人の笑顔が大好きなカメラマン

日野 夏希

(旧姓:瀬川)

HINO NATSUKI

CV: 桃井いちご

職業	カメラマン助手	誕生日	11月30日
身長	160cm	体重	47kg
スリーサイズ	88 (D) / 58 / 85		
血液型	O型	原画	秋野すばる

カメラマンとしての道を志し、写真を扱う専門学校を卒業して早4年。現在は汐風町にある西岡フォトスタジオで写真の技術を本格的に学ぶため女性写真家の助手として活躍中。涼介とは入籍を済ませ、新婚生活を満喫している。

Expression Collection



After



私服



部屋着



裸



★NATSUKI After Story

大学の時からインターン制度を使って我妻盛夫建築事務所に入りをしていた涼介は、卒業後に正式雇用して貰い念願の師匠の元で働けるようになっていた。また、夏希の方は二年制の専門学校を卒業し、涼介よりも先に社会人となり、高名なカメラマン・西岡陽子のスタジオで働いていた。そんな中、ちょっとした勘

違いも後押しして、涼介と夏希は籍を入れることになる。そして、学生時代と変わらぬラブラブな生活を送っていたある時、夏希が汐風第一学園の同窓会を開きたいと言い始める。卒アル委員だった夏希は自分が作った卒業アルバムの中に、卒業生全員に宛てた、あるメッセージを込めていたらしいのだが……。



★未吉★



焦らない焦らない。行動する前に一呼吸おいてみなさい。そしたら運氣が上がるかも。人のサポートに徹すれば、結果オーライって感じね。

- ☆☆ 恨じていれば叶う…はず!
- ☆☆ 一歩で良いから近づくときがしらね。
- ☆☆ 忘れた頃にでも現れるといいわねえ…
- ☆☆ 遠くへ行くほど運氣が上がりそうな予感
- ☆☆ 全てが裏目。最後は自分の勘を信じましょ。
- ☆☆ 無駄遣いが増えそうね。
- ☆☆ 今の場所に住まの方がよさそうよ?
- ☆☆ 攻めるが吉。時には大胆に!

★夏希のひとこと★

…だ、大丈夫、何にも問題ないわ…。「未」って未広がりってことで、可能性の塊なわけだし…。因しなかったから、まだセーフよセーフ…。写真撮りに行くよ。





夏希の手が、俺のペニスを握っていた。

【夏希】「こっちもしっかり起きちゃってるみたいね」

【涼介】「ね、寝起きがいいんだよ」

【夏希】「これって朝立ち？ それとも普通に興奮しちゃったの？」

【涼介】「一応両方だけど…でも、どっちかという、興奮してるかな」

06月01日

●起きざまにエッチ

楽しい学園生活から6年が経ち、涼介と夏希は入籍していた。朝勃ちした彼のペニスを優しくしごき上げる夏希。仕返しにとお尻を愛撫し彼女の敏感な場所を弄る涼介。こうしてラブラブなふたりの1日が始まるのだった。

うん、おはよ…あ・な・た♪



あ…すごい…
朝からこんなに…あはあっ…♪

【夏希】「ねえ、あんた、なんかまた元気になってない？」

【涼介】「…あれ？ 結構出し尽くしたと思ったんだけどな…？」

【夏希】「…しちゃう？」

【涼介】「…しちゃうか」

ニコリと、ふたりでおでこをくっつけながら笑い、またキスをした。



あたくし〜？ あたくしはもう
ヌレヌレになってるわよ〜
ほら、分かるでしょ？



06月25日
● 酔った勢いで情熱エッチ
給料日ということで涼介と夏希は外食をすることに。元々お酒に弱い夏希はふとしたことでビールを吞んでしまい酩酊状態に。何とか連れ帰った涼介だったが、突然、夏希が“エッチしたくなった”と服を脱ぎ始める。

【夏希】「今日は、あたしの方から動くから、涼介はそのままね」
【涼介】「え…俺、動いちゃダメ？」
【夏希】「ダメ。あたしの好きなようにするんだから〜」
そう言うと、夏希は自分から腰を大きくグラインドさせ始めた。



んっ…やっぱり溢れちゃったあ…
ああん…もったいない…せっかく注いでくれたのに…



【夏希】「ね、知ってる…？ キスにもたくさん種類があるのよ」
【涼介】「ん…ディープキスとか？」
【夏希】「あのね…今あたしたちがしてるのは、いわゆる普通のキスで、プレッシャーキスっていうんだって」
【涼介】「へー…そういう名前があるんだ？」

あたしが好きなのはね…
こうして…舌を…んふうっ…
絡めるのが…好き…



06月29日

●初キス記念日

涼介が帰宅すると机の上には少し豪華な夕飯が用意されていた。夏希曰く、今日はふたりが初めてキスをした記念日とのこと。大切な思い出と共にふたりの気持ちは加熱し、様々なキスを交わしながらお互いを求め合う。



06月29日

●卒業アルバムを見るふたり

いつになく濃厚なエッチをした後、身を寄せたまま卒業アルバムを見ていたふたり。アルバムの中にある夏希の撮った写真を眺めながら、あの頃の記憶が蘇っていく。そして夏希の意見により同窓会を開こうということに。

【夏希】「この写真に写っているのは、あたしにとってとても大切な時間だから」
【涼介】「大切な時間？」
【夏希】「行事委のあんたがいて、卒アル委員のあたしがいて、そこに七夕祭りがあったから、今のあたしたちがあるわけじゃない？ あの時間が、まさにあたしたちの未来を決定付けたと言っても過言じゃないと思うの」
【涼介】「ああ…そうだな」



これは思い出を繋いでいくアルバムよ。
この最後のページには新しい思い出の時間を
貼れるように、あえて空白にしてあるのよ。

えへへ…言葉だけで濡らされたの、初めてかも…

【夏希】「じゃあ、ついでに教えて。あたしたちは、これからどうなる運命なのか」

【涼介】「そんなの決まってる。俺たちは、これからもずっと一緒だ。過去も今も、そして未来も…変わらずずっと、俺は夏希の側にいるよ」

【夏希】「本当に側にいてくれる？」

【涼介】「もちろんだ」

【夏希】「ふふっ…ありがとう…」



08月06日

●運命という当然の結果

コンテストに出す写真を撮影しに汐風学園の七夕祭りへ行ってきた夏希。涼介とふたりで写真を選びながら自分らの記憶が蘇っていく。“あたしの人生をこんなに素敵にしてくれてありがとう！”彼女の言葉が優しくふたりを包み込む。



エピソード

●ウェディングドレスの夏希

夏希が集合写真を撮影し、同窓会は閉幕するかと思われた。しかし、みんなのサプライズが涼介と夏希を待っていた。タキシードとウェディングドレスに着替え、参加者に祝福されるふたりは今まさに最高の瞬間を迎えた。

【夏希】「あたしたち、こんなことしてもらっていいのかな？ みんな恩返して言ってたけど、あたし、ここまでしてもらえるようなことなんて、何もしてないよ…？」

【涼介】「…いや、きっとしてたんだよ。昔も今も、んでこれからも、夏希に感謝してるんだと思う」



やばい…どうしよ、
あたしすっごくうれしくて…
なんか涙が出てきそうなんだけど…





未来のマリンピアを……きつと再現してみせます

あの日、わたくしに見せてくれた、



School

仕事中は長い髪を編みこみアップにまとめるようになった美砂。部屋でくつろぐときはロングヘアをそのまま流している。



After

MISA
School and After

魚に情熱を注ぎ続けるお嬢様

沖原 美砂

OKIHARA MISA

CV: 奏雨

職業	北桜大学 研究員	誕生日	7月24日
身長	164cm	体重	52kg
スリーサイズ	88 (E) / 55 / 89		
血液型	B型	原画	恋泉天音

涼介より1年先に学園を卒業後、北桜大学の海洋学科へと進み、現在は大学の研究員に。卒業後も自然科学部の後輩たちと一緒に毎月「海のいきもの教室」を開催している。研究に夢中になるあまり研究室に泊り込むことも多いらしい。

Expression Collection



After



スーツ



白衣



水着



裸



★ MISA After Story

美砂とつきあい始めてから8年後。涼介は大学の建築家を卒業し、念願叶って我妻設計事務所に勤め始めて3年が経っていた。美砂は北桜大学の大学院で海洋学を学ぶ傍ら、汐風学園の後輩たちと一緒に「海のいきもの教室」を開催するなど海と自然の素晴らしさを多くの人々に伝えるという夢を実現しつつあった。

そんな時、一度は閉館したマリニアおなぎの再開を知らせる記事が新聞に掲載される。リニューアルオープンに伴う改装工事には設計者である我妻が協力することになり、美砂の夢の実現をサポートすべく涼介も奮闘する。この仕事で成果を残せたら美砂にプロポーズしようと涼介は考えていた……。



星占いおみくじ

吉



なんて素敵なんだろう！
ご覧の通り、あなたの運勢は吉。
どんな嵐にも負けることない、
素晴らしい1年になるでしょう。
夢に向かって、出航しましょう！

- ☆☆ 恐れることはありません、大海原を進みましょう！
- ☆☆ 予期しないところに、ひょっこり現れるかもです。
- ☆☆ いまは見つからなくても、必ず巡ってきます。
- ☆☆ 海がお勧めです！ 冬の日本海なんて如何でしょう？
- ☆☆ 時間が取れないかも…教科書を読み直しましょう。
- ☆☆ 好きなことに熱中すれば、悪になりません。
- ☆☆ 思い入れのある場所に、じっと止まるのが吉です。
- ☆☆ 素敵な想いを言葉にすれば、きっと結ばれます！

美砂のひとこと

魚類に吉と書いて「はまぐり」と読みます。 ぴたりと合った二枚貝は、いまでも縁起物とされる良縁のシンボルです。 素敵な縁を結ぶ、そんな1年にもなるでしょう！





03月24日

●美砂、スーツでエッチ

北桜大学本部棟改築工事のサーチで大学を訪れた涼介は最近、些細なすれ違いから連絡が滞っていた美砂と再会する。仲直り記念に居酒屋で乾杯後、酔った美砂を連れてアパートへ戻ってきた涼介は……。

【美砂】「だ、だから、生のおちんぼ…くださいね…？」

可愛くせがまれ、俺の興奮は最高潮に達した。

【涼介】「美砂…！」

【美砂】「あ、ああああっ…！？」
そのタイツの股間部分に手をかけ、

無理矢理引き裂いた。

【美砂】「あっ…はっ…おまんこ、丸見えになっちゃいました…」

タイツの破れた部分から見える美砂の秘唇は、すっかりトロトロに出来上がっていた。



うふふっ…愛された証ですっ…
中に出されるのって…
とっても、心地いいですねえ…



07月24日

●ビキニの日焼け跡

有給を利用して沖縄へバカンスにやって来た涼介と美砂。サンオイルを塗り合い、南国の海での一時を楽しんだ後はホテルへ。美砂の白い肌と日焼け跡のコントラストに興奮した涼介は少し意地悪に美砂を攻め立てる。

【美砂】「あ、あのう…焼けているのはお嫌いでしょうか…？」

【涼介】「いいや、すごくエッチでかわいい」

【美砂】「あ、ああっ…そんなかわいいだなんて…」

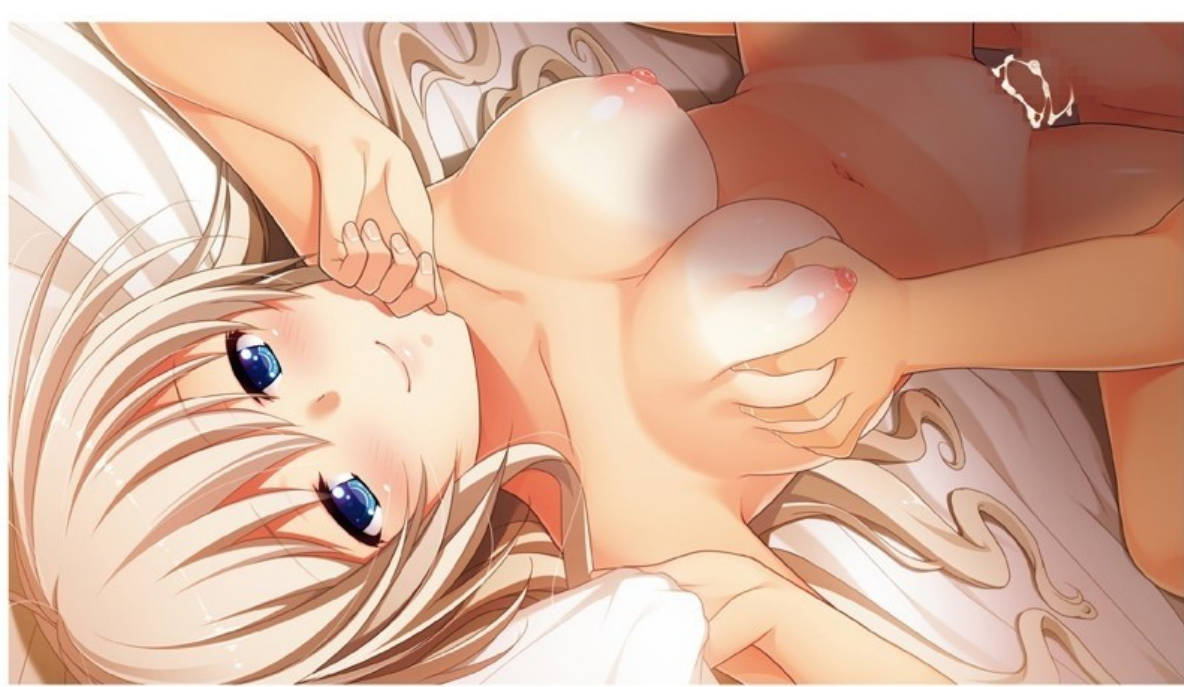
【涼介】「このぐらいの日焼けならすぐ元通りだよ。」

だから…いまのうちにたっぷり眺めておきたいんだ」

【美砂】「はい…わたくしも、見ていただきたいです。エッチになったわたくしの体を…」

ぴったりと密着している股間から、くちゅりとめめった音が響く。

うふふっ…
今日意地悪でしたけど…
ですが、とっても素敵なエッチでした。



あ、ああううっ…
見ちゃダメです…
わたくしのエッチなおっぱい…



06月07日

●エッチな下着で……

明日が休みということで涼介のアパートに美砂が泊まりで遊びに来る。泊まる支度はしてきたものの下着を忘れていた美砂。涼介の家にはふたりが酔った勢いで以前注文したという白いレースのエッチな下着があり……。

射精後で敏感になっているペニスは、美砂のそんな刺激に、またすぐに復活していた。

【美砂】「ふうっ…うふふっ…まだまだ元気ですね…」

【涼介】「ああ…まだ、全然萎えないよ。もっと美砂のことを味わいたい。

おまんこにも…挿れたいんだ」

【美砂】「んふうっ…うれしいです…ぜひお願いします…わたくしのおまんこにも…おちんぼほしいです…」

甘えるような目でペニスを見つめる。
【美砂】「今度はおまんこに飲ませて下さい…熱い精液…♪」

はあ…涼介さんの味がします…
んっ…とってもおいしいです。





美砂はうっとりとした瞳で、じっとその指輪を見つめる。くらげりうむの光を反射して、きらりと輝いた。

【美砂】「素敵、です…。うふふっ…こんなの、素敵すぎます…。くらげの光を受けて…きらきら輝いています…。ああ…輝きすぎて、視界が滯んできました…」

美砂は、ぼろりと涙をこぼしていた。

04月04日

●美砂へプロポーズ

マリンピアしおなぎの再スタートが翌日に迫ったその日、なんとか小ホールでの展示「くらげりうむ」も完成した。自分に任された仕事をやり遂げ一人前になれたらプロポーズしようと思った涼介は美砂へ指輪を贈る。



あ、あなたと一緒に
いられるなんて…
ずっとずっと一緒に
いられるなんて…
それは、なにより…素敵なことです…



エピソード

●水族館で結婚式

今日は海の日。そしてマリンピアしおなぎで結婚式を挙げられる新サービスが始まる日。10年の大恋愛の末、涼介と美砂は友人たちに祝福されながらジンベイザメや多くの魚が泳ぐ大水槽前で誓いのキスを交わすのだった。

【秀一】「では人前結婚式の最後に、誓いのキスをお願いします！」

【夏希】「さーて、あたしの出番が来たわよー！ 新郎新婦、もっとくっついて！」

【涼介】「あ、ああ…。美砂、だいじょうぶか？」

【美砂】「わたくしのほうは、いつでも。いつだって平気です」

【涼介】「じゃあ…いくぞ？」

【美砂】「はい…」

俺は、そっと美砂の肩を抱き寄せた。

【涼介】「愛している、美砂」



わたくしもです…ずっとずっと。
あなたのことを、愛しています

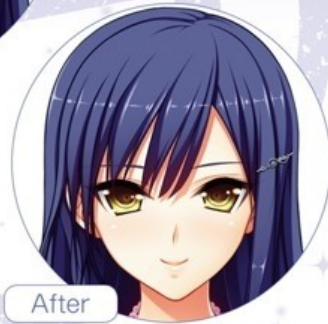
でも、彼と住める
場所はひとつしかありませんから…

ピアノは他でも弾けます。



School

ひと房だけ垂らした三つ編みをまとめる髪留めがリボンに変わったほか、ピアノを弾く際に髪が邪魔にならないようにト音記号をモチーフにした髪留めを着けるようになった。



After

幸せの音を奏でるピアニスト

鳴沢 律佳

NARUSAWA RIKKA CV: 北見六花

職業	ピアニスト	誕生日	6月29日
身長	167cm	体重	55kg
スリーサイズ	82 (B) / 55 / 81		
血液型	A型	原画	秋野すばる

涼介と同じ国立大学へと進学し、プロのピアニストを目指して勉強中。涼介との交際はトントン拍子で両親公認となり、進学を機にこの春から同棲を始めることに。勉強の傍らで音楽カフェで給仕やピアノ演奏などのアルバイトをしている。

Expression Collection



After



部屋着



部屋着+エプロン



デート服



裸



★RIKKA After Story

七夕祭りのコンサートをきっかけにもう一度ピアニストを目指し始めた律佳。幸い師事する先生も決まり、地元の国立大学へ通うことが決定。涼介も同じ大学に通いながら我妻の元で建築について学ぶことに。結婚を見据えて律佳と付き合うと決めた涼介はお互いの両親へ、その決心を伝えるとアパートを借りて同棲を始

める。大学に通いながら世界各地で行なわれるコンクールの賞を次々と獲得し、世界的なピアニストとして羽ばたきつつある律佳。卒業後も我妻建築設計事務所に就職し、一流の建築家になりたいと思っていた涼介に我妻が出した課題は「10年後に住んでいるであろう家の図面」を引くことだった。



小吉



希望の年になりそうね。
新しいことに挑戦するのもいいんじゃないかしら？
でも結果を求めすぎるのはダメよ。
まずは、去年の反省からね。

- ☆☆ すぐに成果を求めてはダメよ。動めば吉ね。
- ☆☆ 音楽室がおすまよ。
- ☆☆ 思わぬところから、見つかるわ。
- ☆☆ 恋人との旅行で、進展があるんじゃないかしら？
- ☆☆ 努力は必ず報われるもの。がんばりましょ？
- ☆☆ 大きな出費があるわね。
- ☆☆ 結婚とか人生の転機と訪れたものは、即決すればいいわ。
- ☆☆ 諦めずに何度もアプローチすれば、道が開けるわ。

律佳のひとこと

…どうしておみくじまで小なのよ…
せめて中にくれても…
でも、おなたと1つ1つ
小さな幸せを積み重ねていくん
って考えたら、これもいいわね





05月

●朝の支度の前に

学園卒業と同時に同棲を始めて1ヶ月が経過。今日も涼介の朝勃ちを見た律佳がきっと溜まっているだろうと朝フェラで起こしてくれる、そんな幸せな日々を過ごしていた。

【涼介】「ん……っ、っあっ!? り、律佳……」
突き抜けるような腰の快感に目覚めると、律佳が俺のペニスをしゃぶっていた。

【律佳】「おはよふ」

【涼介】「お、おはよう……って、潜り込んでくるの、いつぶりだっけ」



06月29日

●エロ下着でソフトSM

今日は律佳の誕生日。部屋に汐風フレンズの面々やめぐるを呼んで誕生日パーティを楽しんだ後、律佳にプレゼントしたのはエッチな下着と真っ白なワンピースだった。

ねえ、お願い……お願いだから……
私を、イカせて……
思いつきり、イカせてほしいの……



【涼介】「律佳…誕生日おめでとう……ちゅっ」

【律佳】「…ちゅっ、もうなによ、エッチし終わってすぐに……」

【涼介】「二人きりの時に、もう一度いっておこうかと思ってさ。交際3年目突入だな」

【律佳】「ふふっ、覚えててくれたのね…」

【涼介】「そりゃな。律佳の誕生日で覚えやすいのもあるけど、そうじゃなかったとしても覚えてるよ」

俺にとって、人生の転機……生忘れられない記念日だ。

【涼介】「来年も再来年も、ずっと祝おうな」

【律佳】「うん……あ、でもエッチな下着は禁止よ? ローターつけて縛られるとか…こんな変態的なエッチ…これ以上おかしいことに目覚めさせられたら困るもの…」





すっごく激しいエッチっていったでしょ？
1回じゃ、とても物足りないわ…。
どっちでも楽しみたいの…。あなたは…？



07月
●律佳と両穴セックス
律佳がピアノコンクールで家を空けてから1ヶ月。その間は涼介もオナニーすらせずに禁欲生活を送っていた。離れていた時間を取り戻すかのようにふたりはお互いを求め合う。

【律佳】「最初はお尻の穴なんて信じられなかったのに。ふふっ、あなたに完璧に仕上げられちゃったわ」
【涼介】「何年も付き合っればそうなるよな。俺も律佳と尻でエッチするのが好きだぞ」
【律佳】「うん…私もお尻エッチ、好きい…」
【涼介】「もっと俺に尻の穴わかるように見せて」
【律佳】「ふえっ…？ え、わかるようになって…くばあって？」
【涼介】「律佳が大好きなお尻エッチ、してほしいんだろ？」





06月

●律佳と結婚式

今日はふたりの結婚式。家族や友人、お世話になった人たち皆が祝福してくれる中、誓いの言葉を宣誓したふたりは五線譜にも見える線が刻まれた指輪を交換し、キスするのだった。

律佳の腕をとって、薬指に指輪を通す。

【律佳】「えへへ」

嬉しそうに顔を綻ばせている。律佳からも指輪をはめてもらい、いよいよ…

【涼介】「律佳……これからもずっと大切に
するから、一生一緒に歩んでいこう」

【律佳】「一生でいいの？」

【涼介】「え？」

私は死んでからも、生まれ変わっても、ずっと
あなたと一緒に連れ添っていきたいわ。



危険日に中出しして、
子作りエッチ…しちやっ
たわね、えへへ。



06月

●全裸で子作りセックス

結婚式も無事終わり、次は涼介との子供が欲しいと告げる律佳。結婚式の準備でここ1週間お預けだったこともあり、涼介も律佳を孕ませようと情熱的に応える。

【律佳】「ねえ……あのね。今日は絶対……生で、
中出ししてほしいの」

【涼介】「え…あれ、でも今日って…」

【律佳】「うん、危ない日…」

【涼介】「っ。それは……いい、のか？」





07月

●ピアノリサイタル

律佳の初めてのリサイタルが汐風文化ホールで行なわれた。観客を魅了する律佳のピアノと鳴り止まない拍手。最後の曲として選ばれたのは律佳が作り続けていた曲だった。

私の世界は、こんなにも
幸せで溢れています。

【律佳】「ピアニストを諦めなくてよかった……心からそう思える毎日を過ごさせていただいています。まだまだピアニストとしても1人の母親としても未熟な私ですが、これからもあたたかく見守っていただけますようよろしくお願いいたします」

律佳が一礼すると、拍手が会場を包み込む。

【律佳】「今日最後の曲は彼と、これから産まれてくる子供…私を支えてくださった皆さんへのありがとうの気持ちを込めた曲です。この場で弾かせていただくことをどうかお許してください」



エピローグ

●律佳と子供たちと
幸せな家庭を

あれからさらに数年後、律佳とふたりで考えた家に涼介たち家族は住んでいた。彩音と咲音の双子を授かり、笑顔で過ごす幸せな生活。律佳の奏でるピアノの音のように涼介たち家族の未来も広がって行く……。

【彩音】「わたしもママみたいにピアノできる？」

【律佳】「ピアノに興味あるの？」

【彩音】「ママのピアノとってもきれいだもん！ ピアノしてる時のママかっこいいし！」

【咲音】「わたしもわたしもー！」
咲音も、負けじとばかりに手を挙げる。

【律佳】「あらあら、咲音もなの？
ふふふ、じゃあ一緒に弾いてみましょうね」



私の音色と共に……——今も私の世界は広がり続けている。



涼介と一緒に、同じ世界を見てみたいから……
精一杯、頑張りたいの



School

TOUKO
School and After

髪留めの代わりに、やや長くなった髪をリボンを使って軽く後ろでまとめた透子。大切にしていた旧館の鍵を思わせる、錠前モチーフのネックレスにも注目。



After

幸せな夢を追う寂しがりやの恋人

雪村 透子

YUKIMURA TOUKO CV: 有栖川みや美

職業	大学4年生	誕生日	12月10日
身長	160cm	体重	51kg
スリーサイズ	88 (D) / 58 / 87		
血液型	AB型	原画	唯々月たすく

涼介と同じ大学の英文学科に進学したのをきっかけに涼介との同棲生活を始める。野菜を切るのにも戸惑っていた昔の姿は跡形もなく、好きな人に美味しい料理を食べさせてあげたいと料理の腕もメキメキ上達。喫茶店のアルバイトでも戦力となり、新人教育を任されるほどになっている。

Expression Collection



After



私服



スーツ



裸



★ TOUKO After Story

転校せずに汐風に留まれるようになった透子と涼介が大学進学と同時に同棲生活を始めてから、4年が経とうとしていた。英文学科で学んだ透子は旅行代理店への内定をもらい、建築学科へ進んだ涼介は透子とのエッチも我慢して大学在学中に二級建築士の資格を取得しようと猛勉強を続けていた。そんな彼の頑張り

を一番近くで見て甲斐甲斐しくサポートしていた透子は旅行代理店の内定を辞退し、涼介の隣で同じ世界を見ながら支えられるインテリアコーディネーターの資格試験を受けると言い出すのだが……。試験日は10月13日。果たして透子は愛する人の傍で夢を叶えることができるのだろうか。



星占いおみくじ



あれ、ちょっと気持ちしてる？
キミはこういうの、あんまり気にしないと思っただけだなあ……。
ちょっと新鮮かも。
ち……しょうがないなあ……。
じゃあ後で、元気になることとしてあげるから。特別だよ？

- ☆☆ まずは小さな願いを1つだけ、頑張ろう？
- ☆☆ 待つより、言いかけてたほうがいいんじゃない？
- ☆☆ 大切な物はちゃんと仕舞わなくちゃ。なくさないように、ね。
- ☆☆ 色んなところをフラフラするのも、楽しいよ？
- ☆☆ 新しいことを始めてみても、いいかもね。
- ☆☆ パーツを使っちゃおう！ いまを思いっきり楽しもうね！
- ☆☆ もしもしたら、キミだけの居場所が見つかるかも。
- ☆☆ ん……まずは、親交を深めるところからだね。

透子のひとこと

ちゅーちゅー…ちゅっ…
あはは、もうサービスはおしまい、
無理イジワルなキミを、可愛がっちゃった。
これからは、もう上がっていくだけ。
つぎはキミにとって、最高の1年になることだよ！
ついていって、同じ世界を見たいから。





【透子】「この前、私とえっちしてる夢見てたでしょ？ あれ、ちょっとジェラシー。寝言で私の名前呼びながら大っきくしてるんだもん。隣に私が寝てるのにさ、夢の中の私と仲良くしちゃって…すごく寂しかったんだから」
【涼介】「はっ！？ いや、エロい夢見てたかどうかなんて覚えてないって！ ただの朝勃ちだろ！？」
【透子】「手つきがやらしかった。おっぱい揉む時とおんなじ手の動きしてたもん」

…負けないもん。ちゃんとホントの私を可愛がってもらうんだから。

07月07日

●夢の中の私に嫉妬

当面の目標としている二級建築士の一次試験が終わった日。涼介の夢の中に出てきた自分に嫉妬するくらい寂しがっていた透子は、根を詰めようとする涼介に対して今晚くらい自分を可愛がって欲しいとおねだりする。



はあ…はっ…あは…頑張ってくれたね…？
…涼介の気持ち、たくさん伝わってきたよ…？



05月02日

●透子とネコミミプレイ

インテリアコーディネーターを目指して勉強
漬けの日々を送っていた透子のストレスが爆
発し、ふたりは久しぶりにデートすることに。
最後に寄ったラブホテルで扇情的な下着を身
に着けたネコミミ透子に誘惑され、涼介は透
子が満足するまで精液を注ぎ込む。



優しく撫でてくれるの、好き…んんっ…！
もっ…と…たくさん気持ちよくしてほしいにやあ…？

【透子】「あんっ…！ イタズラっこはね、根気
よく舐けてくれなきゃ…。きょうっ…懐かない
んだよ…？」

発情したネコそのまんまだ。まだまだ満足して
いないのか、情欲に蕩けた瞳のままで再び俺を
激しく求めてくる。

【涼介】「ぐっ…根気よくって、もう長い付き合
いだろっ…！」

【透子】「んふふ、だあめ…もっとほしいんだも

んっ…！ もっとたくさん、ペロペロして…甘
えて…私が満足するまで、いっぱいほしいにや
あ…？」

【涼介】「っ…！」
くっそ、汚いぞ…！ こんな誘惑、逆らえるわ
けないだろっ…！

【透子】「まだお腹いっぱいにしてもらってない
よ…？ …ね、涼介のミルク…もっとたくさん
ちょうだい…？」

もう、強引なんだからあ……
そんなに興奮しちゃったの？



02月18日

●スーツ姿に興奮して

涼介と一緒に夢を追いかけてほしいという願いを叶え、我妻建築設計事務所に就職した透子。ささやかなお祝いの後、お酒に酔って乱れたスーツ姿の透子に興奮した涼介はいつもより強引に求めるのだった。

【透子】「私をどうしたいの…？ こんな風に抑えつけて、自由に動けなくて…それから、私のこと…どうしたい…？」

艶のある挑発的な言葉。残り少ない理性は一瞬で押し流されてしまって、普段は抑え込まれている欲望が一気に溢れ出る。

【涼介】「…思いつき、乱れさせたい…！ スーツ姿の透子、メチャクチャに汚してやりたい…！」

【透子】「んっ…そうなんだ…？ いいよ、ガマンしないで…？ あんっ…涼介のキモチ、全部受け止めるから…！」



…せんぱいも悪いコだね？
お仕事中に襲われられないように
気をつけなきゃ。

10月07日

●大切な宝物

涼介の誕生日にお祝いをしてくれた透子。彼女の想いの深さを改めて知り、涼介は勇気を出して指輪と共にプロポーズの言葉を送る。相手のすべてを愛し、自分のすべてを捧げるべくふたりは身体を強く寄せ合う。

【涼介】「俺を支えてくれて、毎日俺のために頑張ってくれて…ホントにありがとう」

【透子】「うんっ…えへへ、どういたしまして。毎日お料理したり、お掃除したり、お洗濯したり…涼介のため、楽しいもん」

【涼介】「透子の気持ちに甘えてばかりじゃダメだよな。俺も透子のためにできること、もっとしてあげたい」

【透子】「あんっ…もう、たくさんもらってるよ…？ 私を笑顔にさせてくれる、大切なもの。毎日、私と一緒にいてくれてありがとう。涼介と一緒に積み重ねていく時間が…私にとって、大切な宝物だよ」



ほしいのっ…!!
涼介のこと、ぜんぶっ…!!
気持ちも、身体もっ…!!



エピソード

●夢の続き

プロポーズから1年。涼介の目の前には純白のウェディングドレスに身を包んだ透子が座り、結婚式がもうすぐ始まろうとしていた。自分の隣で幸せそうに微笑む透子の笑顔をこれからも守っていこうと涼介は心に誓った。



【透子】「涼介はこれからの夢、続きってある？」
【涼介】「え？ これからの夢の続きか…。一級建築士の資格を取って、いつか独立して…」
【透子】「その先のお話が聞きたいな。なんでもいいからさ、聞かせてよ」
【涼介】「そうだな…人を笑顔にできる建築設計がしたいって気持ちは今も変わってない。その理想

をどんな形で実現させるのか、これから探していくのが…夢の続きだな」
【透子】「まずは試験に合格するところからだね。忙しくてもちゃんと勉強してるもん、きっと大丈夫だよ。それじゃ、私の夢のお話…聞いてくれる？」

私の夢はね、涼介を支えること。嬉しいことも悲しいことも。楽しいことも辛いことも……ぜんぶ半分こして涼介の夢を支えるの。ずっと隣で一緒に歩いて……涼介の夢を大切に守ってあげることが今の私の夢なんだ。

汐風市フォトアルバム

★Shionagi City Photo-Album★

涼介やヒロインたちが作品中で歩き回った
汐風市のさまざまなスポットをまとめて一挙紹介。
あの夏の日、彼女たちと思い出を作った場所を探してみてね。

汐風第一学園

正門前



★中庭



★グラウンド



リョウ、来てくれる？



★廊下



★教室



屋上



私は吹奏楽部じゃないの



第二化学室



★行事委員会室



★第二音楽室



旧館外観



キミはなにをしに
ここまで来たわけ？



旧館廊下



★「天体水族館」(真里花ルート)



旧館教室



★「星空の海」(美砂ルート)



★「しおなぎのうみ」(夏希ルート)



通学路

バス停



通学路



日野家

日野家外観



★玄関



★リビング



★涼介の部屋



★風呂場



マリンピアしおなぎ

マリンピアしおなぎ外観



★回遊路



★回遊路 (改修作業中)



★浦島の研究施設



わたくしが
ご案内します

海水浴場



海辺の岩場



周辺施設 & スポット

商店街



我妻建築設計事務所



★室内プール



★キャンプ場



★海浜公園



んじゃ、さっそく
挨拶代わりに1枚♪



遠慮
しないで、
どうぞー

★ファミレス



★ラブホテル



★律佳の部屋



★真里花の家・居間



★真里花の部屋



★真里花の家・風呂場



After編で登場するスポット

★北桜大学会議室



★居酒屋



★温泉旅館・露天風呂



日野建築設計事務所



★涼介のひとり暮らし部屋



★ヒロインとの同棲・新婚部屋



Chapter

★
3

Official Artworks

Magazine Cover&illustration,
Privilege, Goods, etc...





TECH GIAN 2014年6月号
(株式会社KADOKAWA / エンターブレイン)







コミックマーケット87
クリアポスター

特典タペストリー (げっちゅ屋)



BugBug 2014年7月号
(富士見出版株式会社)

電撃HIME 2014年7月号
(株式会社KADOKAWA / アスキー・メディアワークス)





TECH GIAN 2014年4月号
(株式会社KADOKAWA / エンターブレイン)



特典テレホンカード(メディアオ!)





特典タペストリー (メロンボックス)





電撃HIME 2014年6月号
(株式会社KADOKAWA / アスキー・メディアワークス)

電撃HIME 2014年5月号
(株式会社KADOKAWA / アスキー・メディアワークス)





特典タペストリー (とらのあな)





TECH GIAN 2014年7月号
(株式会社KADOKAWA / エンターブレイン)



星織ユメミライ
Vocal Collection ジャケット





電撃HIME 2014年3月号
(株式会社KADOKAWA / アスキー・メディアワークス)

電撃HIME 2014年4月号
(株式会社KADOKAWA / アスキー・メディアワークス)





TECH GIAN 2014年5月号
(株式会社KADOKAWA / エンターブレイン)



電撃HIME 2014年8月号表紙
(株式会社KADOKAWA / アスキー・メディアワークス)

特典タペストリー (ソフマップ)





特典タベストーリー (グッドウィル)



コミックマーケット87
デスクマット



星織ユメミライ
マスターアップイラスト



Character1
初恋+星織ラブ原画集 表紙



PUSH!! 2014年7月号表紙
(株式会社マックス)



CONCEPT 表面はまだ恥ずかしさに頬を染める沙風学園時代の少女。そして裏面はずっと隣で支え続けてくれた最愛の女性があなたを切なげに求める瞬間を切り取りました。



CONCEPT

表面は汐風学園の制服を着た、まだ初々しい表情を。そして裏面はあなたのお嫁さんになってたっぷり愛し合いたいと願う一瞬を切り取りました！



オフィシャル抱き枕





CONCEPT 表面は恋を育む沙風学園時代。少し恥ずかし
そうに微笑む姿は色褪せない思い出。そして裏面は愛を確か
め合う情熱的な肢体。左手薬指に光る指輪が永遠の証です。



オフィシャル抱き枕

CONCEPT

表面は汐風学園の制服を着たはにかむ姿を。そして裏面は仕事帰り。あなたの部屋にお泊まりしてスーツを脱いだ艶めかしい姿をお楽しみいただけます。





CONCEPT 表面はあなたの恋人になったばかりの恥ずかしげに見つめる表情を。そして裏面はあなたのお嫁さんになった証であるブライダルインナーで旦那様を大胆に誘う一瞬を切り取りました。



電撃HIME 2014年8月号 付録抱き枕
(株式会社KADOKAWA /アスキー・メディアワークス)



tone work's開発BLOG 第12回イラスト(3/3)



tone work's開発BLOG 第21回イラスト(8/11)



発売日イベントサイン色紙



tone work's開発 BLOG 第20回イラスト(7/25)



特典色紙(ソフマップ)

Chapter

★
4

Extra Contents

Staff Talk

Credit

Songs, etc...



スタッフインタビュー



——「星織ユメミライ」の企画が動き始めたのはいつ頃だったのでしょうか。

丘野：tone work'sデビュー作の「初恋1/1（以下初恋）」を発売後、幸せな後日談を描いたアベンドストーリーを配信したのですが、それが予想以上に好評だったんです。そのアベンドを制作中に、次回作はヒロインとの恋愛の始まりから結婚までを描いたら面白いんじゃないかと作品の方向性が何となく見えてきて、2作目の企画としてまとめることになりました。

——では「初恋」で好評だった部分を活かして次回作を、という流れだったのですか。

丘野：そうです。ストーリーは明るく爽やかに、アフター編を盛り込んでタイトルも「夏恋サマーラブ」とか(笑)

——現在のタイトルからは微塵も想像できませんが(笑)。「星織ユメミライ（以下星織）」のタイトルはどうやって決めたのですか？

どんまる：「初恋」の時にシリアス部分が苦手だというユーザーがいたので、今回は明るいお話を前面に押し出そうとした結果が……。

丘野：「夏恋サマーラブ」でいいじゃん。バカっぽくていいよね、みたいな。

どんまる：でも、このままなし崩しに「夏恋サマーラブ」のまま進めてしまうのもマズいだろうとスタッフを集めて改めてタイトルについて話し合ったんです。

丘野：前作の「初恋」の時はプログラマーがアイデアを出してくれて、即決で採用されたんです。

恋泉：前作のタイトルがブランドイメージにも作品にもハマり過ぎるほどハマっていたので、今回もそんなタイトルを、とかなり難航しました。

丘野：僕たちはキャラを先に作って、そのキャラに合わせて物語やその他の部分を決めていくやり方でゲームを作っていくのですが、この時点で「そら」というキャラができていて彼女をメインに据えることが決まっていた。そらと夏のイメージから「星」、幸せとドキドキ感に溢れた明るい話と長い期間を表す時の流れをイメージさせるものとして「夢」「未来」というワードが浮かび上がってきました。

——残りの「織」を考えたのはスタッフのどなただったんですか？

恋泉：丘野さんですよ。私、覚えてます。

丘野：7月で七夕だから織姫と連想して。そういう具合にタイトルは決まっていきました。

——明るい夏の物語にしようというお話ですが、それ以外にゲームに盛り込みたかった要素としてはどんなものがありましたか？

丘野：実は意図的に起伏の少ないゲームにしようとしたんです。分かりにくいかもしれませんが、要は何でもないような「普通の幸せ」をそのまま描いてみよう、と。作っている自分たちも不思議だったんですが、実際にそうしてみたら予想外に「泣

けた」という反応をいただいたりもしました。泣かせよう、感動させようとはまったく意図していなかったんですが、人の生き様を実直に描くと感動するものができあがるのかと思いました。

——本来は物語に山場や急展開の部分を作るのがセオリーですから「星織」は珍しい例ですね。

丘野：もちろん「真里花の手紙」のように感動させようと思図した部分もありますが、あえて大きな山場を作らないような構造にしています。

——汐風市のモデルとなったのは仙台だそうですか、それはなぜですか？

恋泉：七夕祭りが理由です。なぜ仙台かといえば七夕祭りで有名だから(笑)

丘野：日本三大七夕祭りといえば仙台の名前が真っ先に挙がるくらいの知名度なので仙台にしました。アーケードに七夕飾りや短冊が下がっているというイメージもありますし。

恋泉：あと水族館ですよ。マリニピア松島。

丘野：海が近くて七夕祭りがあって、と絞り込んでいくうちに自ずと決まっていた記憶があります。もちろんモデルとしただけなので実際の風景とゲームの背景は全然違いますけれどね。

キャラ設定を固めてるとヒロインが増えて6人に!?

——次にヒロインの設定についてお話を聞きたい

tone work's
ディレクター



丘野 塔也

OKANO TOUYA

tone work's / Frillのディレクター。「星織ユメミライ」ではディレクターとして全体統括のほか、篠崎真里花・沖原美砂のシナリオを担当。幼なじみにはこだわりが……？

原画家



恋泉 天音

KOIZUMI AMANE

ビジュアルアーツ所属の原画家。「星織ユメミライ」ではグラフィックチームを勤める傍ら、篠崎真里花・沖原美砂のキャラクターデザインと原画を担当。

サウンド
ディレクター



どんまる

DONMARU

ビジュアルアーツ所属のサウンドディレクター。「星織ユメミライ」ではBGMや歌曲、ボイスなど音に関するもの全部のディレクションを担当。

と思います。そらが「星」といった要素は先ほどもチラッと出ましたが、キャラクターの設定はどのように決まっていたのですか？

丘野：そらが星で、真里花は「初恋」で幼なじみを描ききれなかったリベンジだったんです。

——幼なじみをもう一度推したいと。

丘野：ヒロイン属性としては幼なじみが一番強いという幼なじみ最強説を僕は唱えているんですが、どうしてもゲームでは幼なじみキャラは二番手に甘んじがちなんです。なので、二番手になってでも実は一番ヒロイン性が高いキャラクターをやりたくてそういう設定にしました。

どんまる：最初はホントにモブみたいな「地味子」でしたものね。

恋泉：そうですね。難しかったです。

——デザインも色々出されてましたね。

恋泉：はい。でもどちらかといえば真里花よりは最初、美砂の方が迷走していた気がします。

丘野：デザインはそうでしたね。それから真里花ルートでは結婚式のシーンを一番やりたかったんです。結婚式ってなぜか感動するじゃないですか。特にふたりが会ってから恋人になって、結婚するまでを映像にしたビデオメッセージ。それをゲームにしたら出会いから結婚、未来に繋がる物語ができるんじゃないかと思ったわけです。

恋泉：真里花は結婚式のCGが多くて。みんな結婚式の資料のために雑誌を買ったりするんですが、開発室にセク〇イがどンドン溜まっていた



▲方向性が決まった後の美砂のラフデザイン。ぬいぐるみだけでなく髪飾りもクラゲになっている

りもしました。

——そらと真里花以外のキャラの設定が固まるまではどんな経緯でしたか？

丘野：夏希は「初恋」の月島叶の人气が高かったので、担当した魁(かい)さんに叶の要素を残しつつ、別のアプローチをお願いしたんです。彼はまずアイテムと要素を決めてからキャラを作っていくタイプなんですけど、今回はカメラがいいんじゃないかと。カメラを持ったヒロインはウザがられがちでヒロインなので不安だったんですが……。

恋泉&どんまる：すぐスクープだ〜みたいな。

丘野：なのでその辺はウザがられないようにうまく具合にしてくれとオーダーしたらいい感じになりました。積極的なのに付き合いやすいヒロインになったと思います。

美砂は作品が夏ならば、やはり海に關係するヒロインを作りたいと思ったんです。当時、色々調べているうちに学生が運営する水族館みたいなものやっている学校がありまして、これは面白いと。水族館が好きでヒロイン、水族館をやりたいヒロインを作ってみようと思ひ、できあがったのが美砂です。ただ、美砂は「お嬢様」で「海が好き」で「巨乳」で「ふわっとして」というビジュアル的な要素が多いキャラだったので、それがキャラデザで悩まされる結果になりました。

恋泉：キャラが固まるまでは描きにくかったんですよ。最初、見た目は乙姫みたいなイメージにしかたかったんですけど……。

どんまる：あ〜。

恋泉：結局、マリンな感じの、海沿いのお嬢様みたいなイメージにまとめてみたら意外に描きやすいキャラになりました。

丘野：最初は単に水族館が好きというヒロインだったんですが、恋泉さんから上がってきたラフが左の大きなクラゲを抱えている絵で、その理由を聞いたら「クラゲが可愛かったから」と言うんです(笑) この絵によって美砂のクラゲ好き設定ができたんですが、この絵をどこで使おうか悩みました。最終的に急速クラゲのぬいぐるみイベントを差し込んで目の目を見る結果になったんです。

その次は律佳ですが、シナリオ担当は白矢たつやくん。彼には「初恋」からシナリオを手伝ってもらっているんですが、今回初めて本格的にメインキャラを丸ごと担当してもらいました。

どんまる：自分でイチからキャラをデザインするというのは初めてでしたね。

丘野：彼は黒髪ロングのキャラが好きで、「とにかく黒髪ロングのキャラがいいんです！ ピアノを習っていて……」という黒髪ロングへの深い思い入れがあって(笑) スパッと決まりました。

どんまる：これは最初の会議で一番決まった記憶があります。

丘野：「星織」自体、シナリオのボリュームが凄いですけれど、律佳は白矢くんの思い入れが強くて特にシナリオのボリュームがドカーンと爆発しました。音声収録の都合上、ワード数のリミットがあって特に後半部分を削るのが大変でした。

——そんなに多かったですか。

どんまる：多かったです。他のヒロインの1.5倍くらいありました。ただイチイチチャしているだけなんです(笑)。そこがいいんですけど、さすがに多過ぎたので削ってもらいました。

丘野：僕や魁さんは2ヒロインを担当していて力が分散するのでシナリオの分量もほぼ同じくらい

に落ち着くのですが、担当が1ヒロインだけだとひたすら書き続けるという1ヒロインライター弊害といいますが、彼の黒髪ロングヒロインへの思い入れが如実に現れる結果となりました。

——透子も決まるまでに何かありましたか？

丘野：透子は、最初の構想段階では別のキャラでした。原画担当の唯々月たすくさんとアイデアを出し合いながら作り上げていったキャラなんですけど、気まぐれなネコっぽい性格で自分の居心地のいい場所を守っているというコンセプトがあって、そこから鍵の設定が生まれました。実は透子というキャラが生まれるまでは汐風学園には旧校舎はなかったんです。透子が生まれて、旧校舎に勝手に入り子にしよう、それならみんな旧教室を利用しようとお話の設定も広がっていった結果、今の話になりました。

——「初恋」では5人だったヒロインが「星織」では1人増えて6人となりましたが、それには何か理由があったんでしょうか。

丘野：実は最初はヒロインは5人だったんです。色々ヒロインについて設定を盛り込んでいくうちに途中で透子が生まれて、でもその設定を捨ててしまうのは惜しい。作品全体のボリュームアップもやりたかったんで、じゃあ1人増やしちゃうと(笑) 歌曲も5人の想定で作っていたんで予算のやりくりが大変でした。

どんまる：全体のオープニング曲が1曲に、ヒロイン5人それぞれの挿入歌とエンディングで合計11曲と考えていたところ、丘野からいきなり「ヒロインが増えました。歌曲を2曲増やしてください。でも音楽の予算は変わりません」と言われて「え〜っ!」という感じでした。

丘野：この5人から6人への仕様変更は最後まで色んな部分で尾を引いたという(笑)

記号や小道具に見るヒロインの個性とスタッフのこだわり

——tone work'sさんの場合、原画家さんを起用する基準はどういったものなんでしょうか。

丘野：ブランドイメージを統一したかったんで、秋野すばるさんと唯々月たすくさんには「初恋」から引き続き原画をお願いすることになりました。恋泉さんが描くキャラに頭身が近くてかつ可愛いキャラを描ける人となると意外にいないんです。

——なるほど。統一感が大切なんですね。

丘野：恋泉さんがまず誰を描くか選ぶわけですよ。

どんまる：真里花と美砂は自分で選んだの？

恋泉：そうですね。

どんまる：奇しくも丘野ラインじゃないですか。それは意図した結果なんですか？

恋泉：そこは慣れた感じ(笑) 一緒にお仕事するの長くてやりやすいです。

丘野：夏希は、原画についても「初恋」の葉からそのまま持ち越しが決まっていたんです。

どんまる：この頃はまだ透子はいませんでしたね。

丘野：律佳を唯々月たすくさんが描くという可能性もこの時点ではあったので、もしお願いしていたらどうなっていたか興味はあります。

恋泉：「星織」は「初恋」の布陣をあまりいじらずに持ち越したんですが、そらは今までのtone work's作品にはいないキャラだったんです。

丘野：そらのイメージに合う原画家さんを探して探して、武藤此史さんをお願いしたという。武藤

さんは「初恋」もプレイしてくださっていたのですが、お忙しくてスケジュールがなかなか合わなくて……。1度は断られたのですがこちらも何とかやりくりして改めてお願いしたんです。

どんまる：でも、そのラフが上がってきた段階で「そらはこれしかない！」となりましたね。

恋泉：もうパッチリでしたね。

丘野：そのイメージと武藤さんの個性みたいなものがピッタリ合致した結果でしたね。

——そのイメージとはどんなだったんですか。

恋泉：魁さんは、水色のショートカットの不思議ちゃんがほしいという希望でしたね。

丘野：そう。そらは絶対パーカーっ子で、と指定が。水色ショートカットの子がど真ん中にあるなんて、と周りからは発表当時よく驚かれました。

——でも作品を象徴するキャラになりましたね。

丘野：そうですね。屋上でひとり、いつも望遠鏡を覗いている女の子がいて、ある日、主人公が転校してくるとその子と出会うというコンセプトが綺麗で最初のシーンにしようと思っていました。

恋泉：名前はどうか決まったんですか？

丘野：最初は「昴(すばる)」ちゃんでした。原画の秋野さんと名前がかぶっているという話になって、髪が空色なので「そら」と。

——ビジュアルがパッと決まったキャラというと、そら以外には誰がいますか？

丘野：そらも何案もありましたが、髪が長いかわいか、帽子をかぶっているかわかぶっていないかわの違いでほぼ方向性は見えていました。

——真里花のデザインで恋泉さんが悩まれたのは難しい部分があったからなのでしょうか。

恋泉：真里花は当たり障りのない髪形で、萌え記

号も極力落として花のヘアピンだけという状態だったので、ちょっと髪の長さが違うと真里花にならないという、そういう難しさはありました。

丘野：何で花なんてでしたっけ？

恋泉：名前に「花」が入っていたからですよ(笑)
——そんな真里花とは逆に美砂は防止やチョーカーなどアクセサリがたくさんですね。

丘野：美砂は「星織」の中でも描き方や小道具が一番「萌え」っぽいんですね。

恋泉：学園に大きなアクセサリを着けていてもお嬢様だから許されるという(笑)

どんまる：でも、言うほどお嬢様でもないですけどね。閉館した水族館の館長の娘ですし。

丘野：超お嬢様ではないです。

恋泉：美砂もこんなに天然キャラだと思わなかったんで、最初はもっとミステリアスな感じかなと思っていたりもしました。

丘野：夏希はスッと決まりましたね。

どんまる：髪の色が違ったくらいで、最初のラフからほぼ決定稿のままでしたね。

丘野：ポニーテール、カメラ、活動的なキャラクターという具合にビジュアルもスッと決まって、本当に夏希は手のかからない子です(笑)

——物語の色々なところで動いてくれるキャラですものね、夏希は。

丘野：各シナリオライターは、自分の担当に合わせてヒロインのセリフ数を一定の範囲に収める必要があるんです。他のルートでも会話はあるのでセリフ数が増えるのは仕方ないのですが、場を動かすために夏希は使い勝手が良くてセリフ数が予定からドカンと超過してしまっただけで、

どんまる：「夏希を使いすぎやねん！」って魁さ

んが頭を抱えていましたね。

丘野：「星織」にはコミュ能力が高い子があまりいないので場を動かすににくいんですよ。

どんまる：場を動かせるヒロインは夏希だけなんですよ。真里花がギリギリ……。

丘野：あとの4人はコミュ障なんで……(笑)

キービジュアルをよく見ると、夏希が律佳を引っ張っていたりするくらいですから。

——律佳は黒髪ロングが一番の記号でしょうか。ピアノもあります。

恋泉：律佳は初稿で「ああ、律佳ちゃんだ」とスルッと通ってしまったので……。

どんまる：収録のことしか覚えていない(笑)

律佳はピアノを弾いたり、主人公に音楽のトレーニングをしたりと音楽の話が多いんですが、その中で主人公は音程がズレているけれど、他のヒロインはみんな音程が合っているのよ、と全員に言わせるシーンがあったりして……。

丘野：それを収録するため、声優さんに音程を取ってもらうのが大変だったんです。

どんまる：それ以外にも、これは自分の提案だったんですが、同じピアノ曲でも弾いている場所によって音の響き方が違うので少しずつ変えようとして提案して、後々作業が大変になりました。

丘野：自分で自分の首を絞めていましたね(笑)

律佳は通常でもエッチシーンでも背景にピアノがあって作画が大変という苦労もありました。

——音楽関係の細かな知識についてシナリオライターさんから相談を受けたりしたんですか？

どんまる：そうですね。ただ、音楽専門といっても自分もクラシック畑の人間ではないので、色々調べて回答することもありました。

風で髪がなびく表現もパーカーで代用できるからショートカットでいいんだと魁さんが謎の力説をしていました(丘野)

LIMEスタンプコレクション 1



ウサギ



ハムスター



ペンギン



クマ



THE SECOND FLOOR TO 20 CATS

透子 Tシャツロゴ

丘野：思い出した。美砂シナリオも水産大学出身のライターさんにシナリオを監修してもらったりしましたね。水槽を立ち上げる…水を作る過程や水族館に就職した後でおかしな点はないかなど。

—では透子は？ ひとりだけ制服が違ったりビジュアル面でも目立っていますが。

丘野：唯々月さんから「制服がひとりだけ違うのはどうですか」と提案があって。主人公は転校生ですが、もうひとり転校生がいてもいいかなというところでそうになりました。

—透子は私服でもロゴプリントが入ったTシャツを着こなしているなど、ヒロインたちの中でもオシャレな子ですね。

丘野：グラフィックTシャツみたいなものを着ていますね。私服は絵描きさんにお任せ状態なんです。透子の私服も唯々月さんのデザインです。

—そうするとヒロインの下着などのデザインも原画家さんにお任せなんですか。

丘野：ライターからだいたいイメージは伝えるんですけどね。たとえば律佳だったら下着は基本、黒にしてくれというリクエストがあって、そこから先は原画家さんにお任せです。

恋泉：そうそう！ 白矢くんは、律佳が水に濡れるシーンで白いワンピースの下に黒い下着を着させようとしたんですよ。

どんまる：透けるっていう話がありましたね。

恋泉：黒い下着に白い服を着ていたら水に濡れなくても透けますよ、と言っても「黒い下着がいいんです」と。まるつきり痴女じゃないですか(笑)

—男性が考えるロマンと女性の考えるリアルは違うということですね。

恋泉：たぶんそうだと思います。それは一生懸命論じた覚えがあります。

どんまる：エロマンガなどでは良く見るんですけど、リアルでは見かけませんね。

丘野：律佳以外では透子でも濡れ透けのシーンがありましたね。

恋泉：印象的なビジュアルにしたいとなると濡らしたり、透けさせたりするんです。

丘野：夏っぽさを出すために濡れたり、透けたりと涼しげなシーンが多いです。その結果グラフィッカーが死ぬという(笑)

—そういえば真里花も最初のイベントCGはお風呂でしたね。

丘野：今回はリアルとエロゲ的演出のどちらを取るかというせめぎ合いが多かった気がします。

—律佳の下着以外にもですか？

丘野：陰毛を描くとか描かないとか、コンドームを物語のどこまで着けるかなど。

どんまる：そうそう、それですよ。

丘野：コンドームはユーザーさんからもいろんな意見があるんですが、今回はアリエで健全な方向で行こうという方針になりました。

どんまる：コンドームを買う時の主人公の心理描写を書きたいと魁さんと言ってましたね。

涼介がサッカーを止めて 建築士を目指した真相は

—「星織」の主人公は非常に前向きなキャラですが、どうやって決まったんですか？

丘野：リア充でイケメンの主人公にするという大前提がまずありました。

恋泉：暗部をなくして心に闇を抱えていないキャラにしようと言っていたのに……。

どんまる：主人公をカラっとした性格にしよう、挫折感を覚えるようなシーンはなくしようという話合っていたんですが……。

恋泉：丘野さん、すぐ心を折るんですよ(笑)

どんまる：丘野さんが最初に出してきた主人公の案では、野球をやっていた主人公が怪我で野球を続けられなくなり、失意のうちに汐風学園に転校してくるという始まりだったんです。

恋泉：明るく始めようと言っていたのに物語の最初から暗いという(笑)

—では建築家という目標はどこから？

丘野：みんなから暗い暗いと言われたので、じゃあ新たな夢を見つけたのでスポーツはいったん止めたことにしよう、と路線変更しました。学生の頃から目指しても突飛ではない夢で、なおかつイケてる感じの職業として建築士にしました。建築士という職業は男性のイメージがありますし、ヒロインを手助けする職業としても適しているだろうと意見もまとまったんです。

どんまる：「俺、将来エロゲライターになるんだ」ではアレでもんね(笑) 建築士なら女の子もキョん☆と来ますよ。

丘野：主人公の夢が建築士という設定はそうやって決まりました。ちょうどその頃、会社の近くに新しいビルが建つことになったり、書店で建築家の安藤忠雄フェアがやっていたことなども建築士とした理由のひとつです。

—ルートによっては一級建築士になって設計事務所を立ち上げるまでなっていますよね。

どんまる：白矢さんはプロットで主人公が建築士にならない「未来」を書いたりもしていましたよね。マネージャーになるという。

—え、それはどういうことですか？

丘野：構想段階での話なんですけど、律佳がピアニストとして大成するためには海外に行かないとダメだから、主人公は建築家への夢をあきらめさせてマネージャーにしましょう、と(笑)

どんまる：律佳のマネージャーになって世界を回っていましたね。悪くはないんですけど、建築士を目指していたのに律佳のマネージャーでは夢破れた感があるというか……。

—そんな驚きの未来図もあったんですか。すると我妻先生というキャラが生まれたのは、やはり主人公の夢を明確にするためですか？

丘野：アフター編を作ると決まった時に、主人公の就職先をあらかじめ作っておいて最初から主人公に絡めようと思ったんです。主人公に対して人生の助言をさせよう、と。

どんまる：我妻先生は最初、悪人面でした。

恋泉：かなりのチョイ悪オヤジだったよね。ピアスしてたし。

丘野：そんな先生も最終的にはいいおっちゃんになりました。我妻先生が職業としている建築士というキャラ付けに説得力を持たせるために、建築士を目指す人たちの進路ガイドや先ほど名前が出た安藤忠雄さんの本を山のように買い込んでリアリティを上げる努力もしました。

—そう言えば序盤で我妻先生と主人公が構造建築について語っているシーンがありましたね。

丘野：あのやり取りの部分はもっと長々と書いてあって、実は音声も収録してあったんです。ただ、体験版用にシーンを組んでみたら延々と構造建築設計について語っていて、「いったい何のゲームをやっているんだろう」という状態になって(笑) これでは誰も読んでくれないだろうと削って削ってあの程度になりました。

—残るキャラは秀一とめぐるですが。

丘野：秀一は主人公を邪魔しない、格好いいけれど適度に抜けているというキャラにしようと思っていました。香織さんという彼女がいる設定したのは、ヒロインが秀一とくっつくかもしれないという可能性を潰すことでもできるうえに年上好きアピールをすることでさらに補強するという。

恋泉：めぐるは律佳が持っていないものを全部持っているキャラだね。

どんまる：律佳の暗部を描くには必要不可欠のキャラなんですよ、めぐるは。律佳とは決して不仲ではなくボタンの掛け違いであって、めぐるはそれを気に病んでいて、律佳は律佳でめぐるに対してそれをすくすく申し訳なく思っている、それが分かるようなシナリオになっています。

恋泉：もし主人公が律佳ルートに行かなかつたら律佳がどうなっていたかと考えると(笑)

どんまる：真里花なんかどうなるんですか！

恋泉：真里花は常に主人公の幸せを願って続けているキャラなので、主人公が幸せなら私も幸せってきつと言いますよ。

丘野：真里花は初期状態では主人公と自分が釣り合うとは思っていないんです。自分が主人公に追いつかなくちゃ、頑張らなくちゃと思っているわ

けです。自分よりイケてる女と付き合うのはいいんです、きっと真里花的には。

恋泉：自分より下だと思っている女と主人公がくっついたら真里花の心の闇が始まるんだ(笑)

丘野：なんであんなのと！(笑)

一同：(笑)

どんまる：そらアフターのプロット段階では、独立した主人公の初仕事となるリフォーム依頼が真里花の家だったりしましたよね。親御さんの老後のためのリフォーム依頼で、真里花は家にいる設定でまだ結婚していないのかな、みたいな。

丘野：最終的には真里花とも他のヒロインとも関係のない、福沢家のリフォームに変わってますのでご安心ください(笑)

——色々と爆弾的なお話もありましたが、他のシナリオライターが書かれたシナリオを読んでいて感心したシーンはありますか？

丘野：全キャラにありますね。そらルート、特にアフター編は僕では書けなかったと思います。主人公が立ち立って建築事務所を構えるという、そこまでのビジョンは僕の中にはありませんでした。でも魁さんは涼介なら一級建築士になって独立するくらい当たり前前にできるだろう、と。

どんまる：他のヒロインのアフターより時間が経過しているせいもありますが、そらアフターの主人公は「大人のリア充」なんです。建築士として独立開業して、何かあったらクルマにそらに乗せて温泉へへ行けるという……。

丘野：プロットを聞いたときは一番不安だったんですが、そこは魁さんの夢パワーのおかげで。主人公は独立開業して、全キャラ登場して、数えるところちゃん20歳とか(笑) もう少し話を小さくまとめませんかと言ったんですが、魁さんの溢れる夢を描いたのがそらルートだと思います。

——そらルートは夢パワーですか。

丘野：夏希ルートはとにかくエンディングが綺麗なんです。僕らライターってのは書くのが仕事なんでチマチマ書かすにはいられないんですが、夏希ルートはクライマックスにセリフが何もありません。スクールもアフターも絵を1枚パーンと出して一切セリフなしで終わり。何も書かないのかと聞くと魁さんが「写真は語らへんやろ？」って。

——格好いいですね(笑)

丘野：それ以外でも夏希ルートは伏線を張って、それを回収して話をまとめるという、それぞれのポイントポイントがきちんとシナリオに作られていて読んでいても気持ちがいいです。

どんまる：夏希ルートは善人しかなくて、なんて優しい世界なんだ！ っと思いました。

丘野：律佳ルートは白矢さんの情念ですね(笑) 彼は描写が細かいんですよ。Aという事象を書いた時にAの裏だけでなく、Aの裏の裏まで書いてそれからBに行くんです。細かな事象を丁寧に積み重ねて行くことによってキャラクターの個性や心情を作り上げていくんです。

——俺かに律佳アフターでは同棲する際にお互いの両親に報告して筋を通してますね。

丘野：透子シナリオで僕が好きなのは、序盤のキャラの描き方が最も優れているところですね。共通部分では目立たない子だったので作品の中でも存在感の薄い子になるんじゃないかと心配していたんですが、ポンポンポンと印象的なシーンを繋いでユーザーの心を掴むと、ジェットコースターに乗っているかのように一気にラストまで急展開していきんです。「星織」ヒロインの中で透子は唯一、将来の夢が自分で描けていなかったキャラなんです。そんな子が主人公と出会って夢をつかむという透子の成長物語でもあるんです。

どんまる：透子のエンディングの演出はユーザーさんからの評判もいいですね。

丘野：あそこはにし～さんがアイデアを出してくださって、マスターアップ直前の最後の最後まで色々と調整しまくったところですよ。

マスターアップ前に体験した地獄のスケジュール

——「星織」の制作中、これが大変だったというエピソードを教えてくださいませんか？

丘野：ラスト2ヶ月前くらいからが大変でした。僕の持論として、体験版ができあがればゲームはほぼできるというのがあるんです。今回は体験版の公開を発売日の2ヶ月前にすると決めていたのですが、4月末にあったcharacter1と体験版の

作業時期がかぶって地獄のスケジュールでした。午前中に音声収録に立ち会って、午後から歌詞を書いて、さらにラジオのゲスト出演をしてと……。

どんまる：何をやってたか分からなくなる日がありましたね。スタジオを3つ、4つとハシゴしたりとか。今回はとにかく収録する音声の数が膨大で、台本を出すタイミングも分かれていたのでものを録ったのか、どこまで録ったのか分からなくなったりもしました。キャストさんへの説明も、今録っているのが誰のルートでスクール編なのかアフター編なのか説明が必要で。収録ではそれが大変でした。

——するとマスターアップ直前はさらに大変な状況になっていったわけですか。

どんまる：社内でもホントに予定通りに発売できるとは思ってなくて、恋泉さんが「もう無理」って丘野さんにいつ言うんだらうってみんな思っていました。

恋泉：言っちゃいけないのかなと思って言いませんでした(笑)

——どんまるさんたちの音楽チームはマスターアップ直前はどんな様子なんでしょうか？

どんまる：音楽チームは体験版の時点でBGMについては半分くらい完成していなければいけないのでマスターアップ直前でも開発チームほど修羅場ではないんです。徹夜続きで満身創痍の開発チームの声が漏れ聞こえてくる中で、音楽チームはわりと体調万全という……(笑)

——なるほど(笑) では音楽チームはどんな感じで制作を進められているのですか。

どんまる：まず作品にどういう曲が必要か、曲数や曲の雰囲気や計画を立てるためにプロットを全部読みます。シナリオが全部完成してから曲を作るのでは間に合いませんし、自分以外の人に発注をする場合でも「朝の曲。爽やかに」だけではなく、どんなシーンかプロットレベルでもテキストやセリフがあると曲の仕上がりが全然違うわけです。シナリオライターさんによってもプロットは色々違ってまして、丘野さんのプロットはセリフが入っているプロットなので助かります。

丘野：ある意味、tone work'sでどんまるさんが一番プロットを読み込んでいると思います。

LIMEスタンプコレクション2



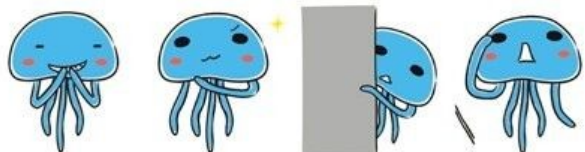
イヌ1



イヌ2



パンダ



くらげ

これは世間がひっくり返るくらい 完璧な主題歌じゃないかと 手ごたえを感じました (どんまる)

どんまる：『星織』は曲数も30曲ちょっとと大規模ゲームと比べれば曲数が少ないんですが、アレンジバージョンがほとんどありません。各キャラテーマのピアノアレンジなどを作ればもっと労力を減らせるんですが、他の人が作った曲を僕が勝手にピアノアレンジしていいのかなと迷っているうちにタイムリミットが来たりして。

—それぞれの曲を作る時、曲のインスピレーションはどうやって得るのでしょうか。

どんまる：tone work'sのお話は純愛で等身大の恋愛なので、近いと思われる少女マンガを読んだり、自身の学生時代の体験を思い出したり、街で見かけた学生カップルを参考にしたりします。BGMは自分が決めていますけれど、楽曲はシナリオライターから曲の要望を聞いたり、雰囲気合う曲があるならば教えてもらいます。

丘野：もちろんコンセプトありきなんですけれど、作曲家さんの個性も生かしつつ感じてです。この歌手さんがいいとか、この作曲さんはどうでしょう？ と提案することもあります。

どんまる：このキャラはこういう雰囲気が含ますよとか、この作曲家さんだったらこの歌手さんが含ますよなどとお互いに提案もしました。

—『星織』のBGMを作る時、どんまるさんはどんな環境で作っていたんですか？

どんまる：『初恋』と『星織』の方向性は同じものなので、自分が作る曲に近い『初恋』のシーンを選んでBGMをオフにして流していましたね。

—歌曲の作詞はそれぞれのシナリオライターさんが手がけられているんですね。

丘野：シナリオを書いているライターが詩も書くのが一番イメージがブレないだろうと考えてそうしています。作詞の際に参考として色々な曲を聞くんですけど、『星織ユメミライ』の作品の雰囲気に合うのは「感謝系ラップ」なんです(笑)

一同：(笑)

どんまる：家族に感謝、彼女に感謝、俺と出会ってくれてマジ感謝、みたいな(笑)

丘野：ジャンルは違えど歌詞として表現したいものは同じなので、作詞作業中は感謝系ラップを聴きまくってました。恋の歌ならJ-POPと思われるでしょうが、J-POPでは正面切ってお前が好きだと直接言う歌詞はあまりないんです。

どんまる：1ヒロインにつきイメージソングとエンディング、2曲分の詩を書くので内容がふって大変だと魁さんが言っていましたね。

丘野：テーマが一緒ですからどうしても言葉がかぶりやすいんです。全曲ベタベタなエンディング曲を作ってもみんな同じ雰囲気になってしまうのでその辺も変える必要がありました。

どんまる：律佳みたいに他のヒロインにはない特徴があれば作りやすいんですけど、どう曲の中で変化をつけるか。真里花は結婚式だとか夏希はいつも元気だろうとか。ヒロインによって少しずつ変化をもたせるように工夫しました。

丘野：主題歌の『星織ユメミライ』はコンペの結果できあがったんです。

—コンペというの？

どんまる：歌曲の数が多いので最初は主題歌も外注さんをお願いしようという話があったんですが、音楽チームがいるんだから主題歌は僕たちに作らせてほしいと言いまして。僕と竹下智博で1曲ずつ主題歌を作って競うことになったんです。

丘野：上がってきた曲を聴くと、曲の入りはこちらの曲が、でもサビはこっちの曲がイイとなりまして、何気なく合体させてみれば？ と……。

どんまる：それがきっかけで主題歌の『星織ユメミライ』は僕と竹下の共作になったんです。ふたりで作れば半分の時間でできるかと思ったら結局、倍の時間がかかったんですが(笑)

—でもその分、曲の評価も高かったですね。

どんまる：曲が完成した時に、これが世に出たらとんでもないことになるぞ、とお互いに褒め合うくらい手ごたえを感じていました。自分が作った曲だからという鼻屑目もあるかもしれませんが、一番重きを置いている「どれだけゲームの世界観やキャラクターの雰囲気を表現できるか」という

点ではトンビじゃじゃないか。キャラクターやプロットの段階から参加している人間が曲を作るんだから絶対外せないし、外注さんでは汲み取れない部分まで拾えたんじゃないかと思います。

—主題歌以外の曲でコレが素晴らしいという曲はありますか？

どんまる：もちろん他の曲もビッパリハマったと思います。特に律佳の曲「想いの欠片」は、律佳とめぐるの連弾から始めて途中から他の楽器が加わるという難易度の高い曲で、そういう曲を自分が受注したらどうしようと思ったりしました(笑)

—ゲームのBGMを作る際にどんまるさんがかけているのはどんなことでしょうか。

どんまる：Keyの曲の場合はメロディがしっかりある曲が多いんですが、tone work'sの曲は雰囲気を持たせながらメロディもありつつ、でもBGMとして出過ぎないようなギリギリのラインを手探りしながら曲を作っています。

丘野：背景を表示してBGMを流して、その状態で心地いいなと感じてもらえるかが大事ですね。そこで違和感を感じてしまうとシナリオも頭に入ってこないし、ゲームをプレイし続けようという思いもなくなってしまいます。

どんまる：背景は綺麗だわ、キャラは綺麗だわとなると他の部分も負けていられないんですね。

丘野：tone work'sというブランドはシナリオだけは飛び抜けています、グラフィックだけは飛び抜けています、でも他はまあまあですというのではなく、全体として高いレベルでまとまった総合力のあるブランドにしたいと考えています。チーム間で切磋琢磨しつつ頑張ります。



▲背景を描くために作られた汐風学園の見取り図。正門の正面にそらが天体望遠鏡を覗いていた校舎があったり、旧校舎が目につきにくい奥にあるなど、シナリオとの整合性を考えて校舎や付属施設が配置されている

ユーザーさんの感覚には常に敏感に シュ! っとしたものを作っていきたいですね (恋泉)

実現するか、単独ライブ そして次回作は……

——「星織」の発売後、ユーザーさんからの反応はいかがでしたか？

丘野：普段はゲームが発売されるまでドキドキしていることが多いんですが、今回はマスター前にチェックしていても十分な手こたえが感じられたので安心していました。面白いと喜んでくださったユーザーさんも多かったのが心穏やかにネットの反応も眺めていられました。今はTwitterなどで良い評価でも悪い評価でも反応がすぐに返ってくるので怖い時代でもありますけれども、今回はプラスに作用してくれました。

どんまる：僕は何の不安もありませんでした。絶対、大丈夫って思っていました。

——ちなみに「星織」の一番人気は誰ですか？

丘野：オフィシャルグッズでヒロインの抱き枕を作ったりもしているんですが、大きな差はありませんね。もともと「星織」はそら・真里花・夏希・美砂・律佳・透子の6人でワンセットとしたい、シナリオのボリュームやイベントCGの枚数でもヒロイン間で差をつけたくないという思惑がありました。6人もヒロインがいると、どうしても外れルート外れキャラと言われてしまうキャラが出てしまいがちなんですが、「星織」はどのヒロインも満遍なく人気が出たので良かったと思います。あえて一番を言うなら、律佳を好きとってくださるユーザーさんが少し多い感じですね。

——「星織」が発売されて9ヶ月。抱き枕も出揃ったところで「星織」の今後の展開などはありますか？

丘野：まあ、コンシューマ化されたら「星織」としてはだいたいやりきれたかな、と。どこか移植してくれるメーカーさんないでしょうか？ (笑)

どんまる：「星織」は最初からファンディスクが本編に入っているようなものですから、追加曲を作ろうと思っても、誰の、どんな曲を作るかという

話になってしまって大変です。

丘野：シナリオも入れられるエピソードは全部入られたって感じだったので、今回書き下ろし小説を書くのが本当に大変でした。

——先日、2015年10月下旬に開催される美少女ゲームライブ「EGG -Extra Games Garden-」への出演もアナウンスされましたが。

丘野：Ceuiさんの歌う主題歌「星織ユメミライ」など何曲かを会場で皆さんに披露できる予定です。詳しくはホームページやtone work's生放送などで追ってご連絡できると思います。

どんまる：tone work's単独でもライブをやりたいですね。「初恋」と合わせるとボーカルだけで22、3曲あるのかな？

——それだけの曲数があれば2作品だけでも十分単独ライブができますね。

丘野：ライブになるかは分かりませんが、次回作の広報も兼ねたイベントはやりたいですね。

どんまる：次回作の曲もね、曲数はもう見えているんです。やっぱりコンセプトを立てている時が一番楽しいですね。妄想が広がって(笑)

——tone work'sの3作目はどのような作品になるのでしょうか。

丘野：次回作の季節は冬になります。「星織」ではスクール編とアフター編をやったので、次はピフォー編というかその前を描けないかと考えています。初々しい、より純粋な恋愛を描けるんじゃないかとプロットを練っている最中です。

——次回作の曲やプロットもそのような感じで水面下で進んでいるんですね。

丘野：さらに言いますとヒロインの設定も決まりまして、プロットとキャラデザが現在進行中という段階です。これぞ「冬物語」といった感じの切なさや人恋しさを雰囲気として出しつつ、うまく物語をまとめたいたいと思っています。

——それでは最後に、「星織ユメミライ」、そして今回のアートワークスを買っていただいたユーザー

さんに一言ずつお願いします。

恋泉：tone work'sはまだまだ続くよ。次回作をお楽しみに！

丘野：今回はこんなのを描きたい、とか。

恋泉：ん～、やっぱりtone work'sっぽさを大事にしたいですね。

——恋泉さんが思うtone work'sっぽさとはどんなものでしょうか？

恋泉：シュ! っとした感じ。

一同：(爆笑)

恋泉：いつもシュ! っとした感じでお願ひしきすって言うんですよ。そういうとシュ! っとした物が上がってくるんです。

丘野：シュ! っと(笑)

恋泉：目指して行きたいですね。それから、こういうのがほしいなとか要望があったらドンドン言ってほしいです。どこまで応えられるかは、ちょっと……分かりませんけれども。

——どんまるさんからもお願いします。

どんまる：今回はアートワークスなので音楽の面で皆さんに見せられる部分はありますが、総合力がウリのtone work'sなのでゲームを思い出しながら、もう一度プレイしながら音楽やシナリオ、キャラクターや背景の細かなところまでぜひ楽しんでください。次回作については先ほどの通り、皆さんに気に入っていただけるシュ! っとしたものを盛り込んでいくつもりです。

——最後の締めを丘野さん、お願いします。

丘野：今のtone work'sがあるのは応援してくれた皆様のおかげなので本当にありがとうございます。やっとtone work'sはブランドとしての形ができたのでこれからさらに積み上げていきたいな、もっと面白いゲームを作っていきたいな、と思いますので今後ともぜひ応援をお願いします。

——次回作についても今後、少しずつ公開されていくそうなので楽しみにしたいと思います。本日はありがとうございました！

LIMEスタンプコレクション



ネコ1



ネコ2



ヒヨコ



リス

★ SONGS ★

ゲーム主題歌

星織ユメミライ

歌唱：Ceui
作詞：丘野塔也
作曲：どんまる・竹下智博

八月の花火が 消えた夜に
静かな 星がまたいた
夏の大三角 キミが指し示す
横顔を眺め ふと 胸が痛む

肩を預け 震え声そっと告げる
「もう少しこのままで
キミとおなじ 空を見ていたい」

触れあう指 そっと絡めて 痛いぐらいの好きで
息も出来ないほど キミが近くて
世界の中 ここにいること それだけが嬉しくて
ただ願いひとつだけ ふたりに向かう 未来を

堤防を駆け下り 見上げる顔
「行こうよ」って 整し出された手に
私は臆病で どこか怯えてた
このいまが終わる こと 恐れていた

波打ち際 並んで歩き出していく
星降る夜の下で 巡る空に ふたり包まれた

重ねた手と 繋ぐ温もり でも永遠じゃなくて
そのことに気づいて 泣きそうになる
瞳の中 輝く星を 壊さぬよう閉じこめ
ねえそっと教えてよ 夢結ぶ彼方を

キミのいた夏が終わる(切ない想いを)
伝えられず 寂しくて
届くはずがないと そう思っていた
今日にさよならを 告げるんだ

胸に抱え 溢れる言葉 波音にとかしていく
見上げた高い空 明日を描くよ
世界の中 キミがいること 二度と戻らぬ奇跡に
ただ願いひとつだけ 夢辿る彼方へ

また空が巡るよ
このきらめく願い あの星に 届きますように

逢坂そら イメージソング

Star Linker

逢坂そら エンディング

Celestia

歌唱：霜月はるか
作詞：魁
作曲：MANYO

篠崎真里花 イメージソング

キミの街へ☆彗

篠崎真里花 エンディング

あいのうた

歌唱：佐咲紗花
作詞：丘野塔也
作曲：どんまる

瀬川夏希 イメージソング

Just Love The Moment

瀬川夏希 エンディング

あの夏の宝物

歌唱：Airi
作詞：魁
作曲：竹下智博

沖原美砂 イメージソング

セイリング!

沖原美砂 エンディング

未来航路

歌唱：rino
作詞：丘野塔也
作曲：宮崎京一

鳴沢律佳 イメージソング

想いの欠片

鳴沢律佳 エンディング

大切な人へ

歌唱：Luna
作詞：白矢たつき
作曲：碓氷悠一朗

雪村透子 イメージソング

Make a Wish

沖原美砂 エンディング

しあわせの場所

歌唱：Duca
作詞：にっし〜
作曲：ANZE HIJIRI

星織ユメミライ

GAME DATA

『星織ユメミライ』
ブランド：tone work's
発売日：2014年7月25日発売
価格：8,800円(税別)

『星織ユメミライ』STAFF

○原画
武藤此史
唯々月たすく
恋泉天音
秋野すばる

○シナリオ
丘野塔也
白矢たつき
にっし〜
今科理央
魁

○BGM
天門
MANYO
水月陵
碓氷悠一朗
しょうゆ
Meeon
どんまる

○オープニングムービー
gram6design

○SDイラスト
柚木ガオ

○LIMEスタンプ
PonyTeam
ほそえ
ちー





星織コメミライ

HOSHI ORI ★ YUME MIRAI
The memories of that day, memories of you, I wish upon a star
to be always with you.

アートワークス

2015年5月9日発行 初版第1刷発行

編集	メガストア編集部 鷹城霞
協力・監修	tone work's ©VisualArt's / tone work's .All Rights Reserved.
カバーイラスト	武藤此史／秋野すばる
発行人	中沢慎一
装丁・デザイン	工藤雄介
発行所	株式会社コアマガジン
営業・通販	〒171-8553 東京都豊島区高田3-7-11 電話03(5950)5100
編集	〒171-8553 東京都豊島区高田3-7-11 4F 電話03(5952)7812
製版	株式会社山栄プロセス
印刷	凸版印刷株式会社
	ISBN978-4-86436-764-6

本書の内容の一部あるいは全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作権者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社宛に許諾を求めてください。